



## 第7章 軽井沢における場所イメージの記号化

### —文学作品などからみた場所イメージの変遷—

#### 1. はじめに

筆者は第I部において、地理的知識の研究に共通する枠組みの一端について考え、場所（と同時に場所と不可分に結び付いている地名）とその解釈（意味：すなわち社会に共通する場所イメージ）とが強固に結びつき、ある場所に対してある決まった解釈を要求される場合のあることを示した。しかし、それでは実際にはどのような場所（同時に地名）が社会に共通する場所イメージを植え付け、それがどのようにして一般化し定着していくのだろうか。また、そのように固定してしまった場所イメージは、社会を通してどのように場所や地名を変えていくのか。以上のような見地から、この絶えず移り変わる場所イメージ・場所・地名の関係と変化の過程を、現実の場所について具体的に記述し体系的に捉えようと試みるのが、本章の目的である。

ここではその事例として軽井沢のイメージを取り上げるが、対象として軽井沢を選んだのは、次のような理由

による。第1に、今日軽井沢と強く結びついているイメージは明らかに明治以降に形成されたものであり、近世以前の影響がほとんどないと考えられる。第2に、軽井沢はわが国でも有数の鮮明なイメージを持っており、その固定したイメージは町や県といった狭い範囲ではなく国民のレベルにまで浸透している。第3に、軽井沢のイメージは富や権力といった価値的イメージと強く結び付いているため、場所や地名を変えていく事例が顕著にみられる。第4に、次に述べる方法と関連して、著名な文学者をはじめ多くの人が記録を残しているという点である。

文学作品を資料として場所イメージを記述するという方法は、欧米の地理学界では既にいくつかの研究例がある。従来最もよく行われてきたのは、ある一つの作品またはある特定の作家の作品群を取り上げ、その作品なり作品群なりに描かれた場所のイメージを復原することであった。例えばDarby(1948), Paterson(1965), Goodey(1970), Jay(1975), Aiken(1977, 1981), Mc-Manis(1978), Prince(1981), Alexander(1986)、わが国では青山(1985), 田村(1986)などがそうであるが、これらの論文で扱われている場所イメージは基本的には作家の個人的(主観的)な場所イメージにあたり、あくまでもある特殊な個人とある場所との関係を記述したものである。その意味で、これらの論文は奥野(1972), 岡田(1976), 前田(1982), 松山

(1984)など、文学方面からの研究と共通する点が多い。

これに対し、いろいろな作家の作品を用いて、ある一つの場所についてのイメージを記述した例として、Zaring(1977)、Pocock(1979, 1982)、Lloyd(1981)、Andrews(1981)などがあり、そこでは作家の個人的な場所イメージを示すことより、ある場所に対する過去の人々のイメージを代表するものとして、数多くの文学作品を提示することに力点が置かれている。これは、いろいろな作家によって書かれたある場所についての記述から、当時のある社会集団内の人々がほぼ共通して持っていた社会的な場所イメージを再現することに等しい。

本章における文学作品等の扱いはこの後者に従うが、第4章で明らかにしたように、文学作品中の場所イメージの記号化には、既に社会的に記号化した場所イメージが作品中に用いられる場合と、作品中に示されたためにその場所イメージが社会の中で記号化する場合という二つの側面があるので、資料となる作品中の場所の記述から場所イメージを復原し、社会の中で場所イメージが記号化した時期を判断する際には、作品中に何が書かれているかはもちろん、その作品がなぜ書かれたかというメタ言語的分析も重要な手がかりとなる。

以下の論考ではその点を踏まえたうえで、軽井沢を扱った文学作品や新聞記事などの文献の中から、当時の社会的な場所イメージを反映しているもの、あるいは当時

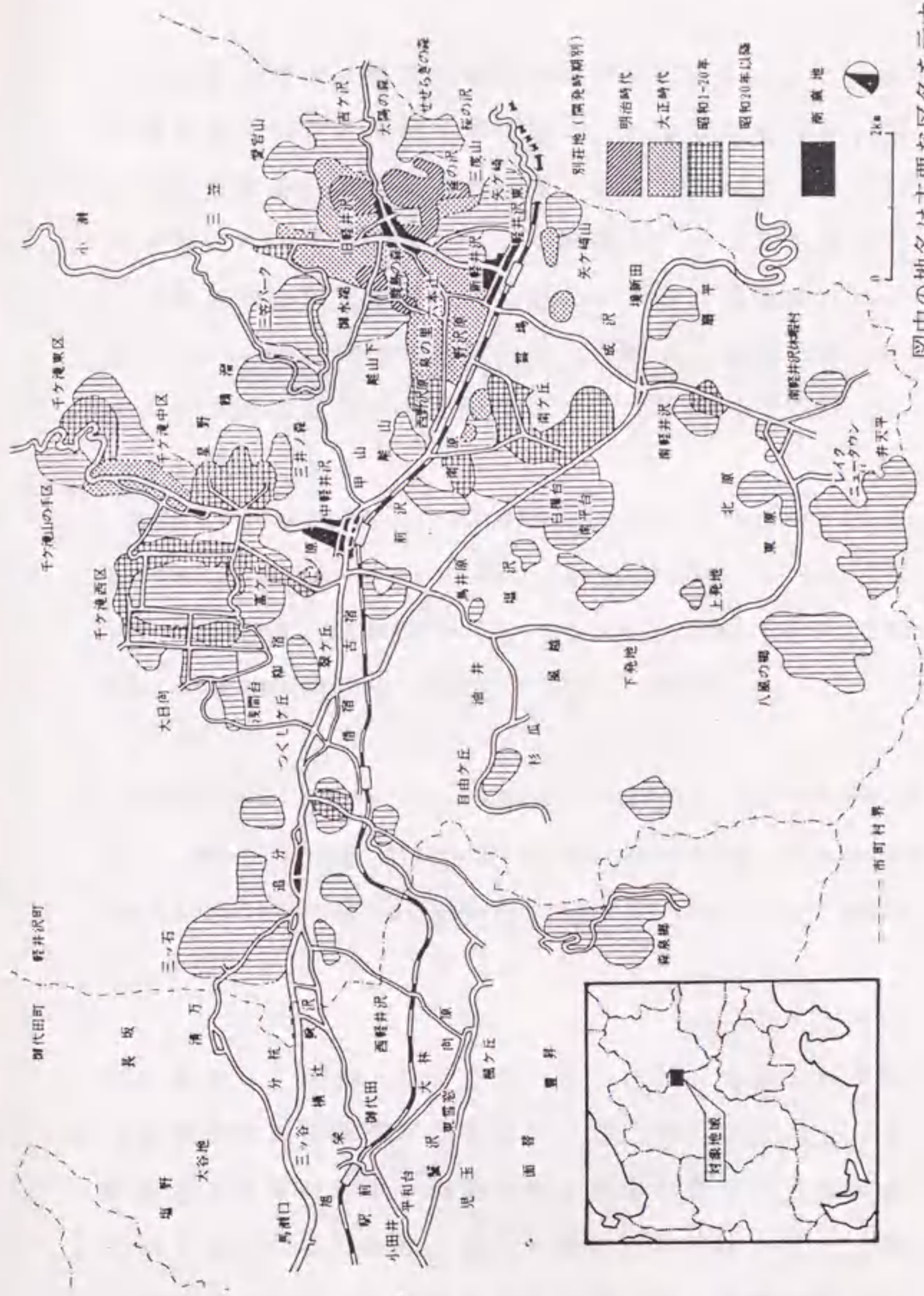
の社会的な場所イメージに影響を及ぼしたと考えられるものを資料として、近代以降のそれぞれの時代の軽井沢のイメージを復原することを目指す。そしてそれらを軽井沢の開発史と重ね合わせながら、軽井沢のイメージが歴史的にどのように形成され、人々の間に自明のこととして定着していったのかを記述する。さらに、その結果をもとに軽井沢における地名の改変、とくに「軽井沢」の名を冠した地名の分布の拡大という現象について解釈をくわえてみたい。

## 2. 軽井沢のイメージの形成と変遷

ここでは場所イメージの形成・変化という観点から、近代以降の軽井沢の歴史を五つの時期に分け、年代を追って記述していく。

### (1) 明治前期——宿場町としての衰退

近世の軽井沢は沓掛・追分とともに碓氷峠を控えた宿場町として栄えていたが、明治維新以降徐々にさびれはじめ、年々通行人は減少していった。この地域は、もともと高冷地のため農業はあまり盛んではなく、とくに軽井沢宿より2キロほど南を通過して碓氷峠を越える碓氷新道が明治16(1883)年に完成すると、人馬は一斉に新道を



図中の地名は主要な区名を示す

7-1図 研究対象地域と別荘地帯の拡大

通るようになり、軽井沢の衰退は決定的となる。さらに鉄道も明治18年に高崎・横川間が、21年には直江津・軽井沢間が開通し、26年には横川・軽井沢間がアプト式鉄道で結ばれ、交通集落としての機能は、かつての宿場町（旧軽井沢）から新道沿いに新しくできた新軽井沢へと移った。この時期軽井沢を訪れた森鷗外・正岡子規らの文人たちは、軽井沢について次のように述べている。

軽井沢停車場の前にて馬車はつ。恰も鈴鐸鳴るをりなりしが、余りの苦しきに直には乗り遷らず。油屋といふ家に入りて憩ふ。（略）停車場は蘆葦人長の中に立てり。車のいづるにつれて、蘆の菜まばらになりて桔梗の紫なる、女郎花の黄なる、芒花の赤き、まだ深き霧の中に見ゆ。（森鷗外「みちの記」 明治23）<sup>1)</sup>

軽井沢はさすがに夏猶寒く透間もる浅間おろしに一重の旅衣、見はてぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起きいで、窓を開ければ幾重の山嶺屏風を透らして草のみ生ひ茂りたれば其の色染めたらんよりも麗はし。（正岡子規「かけはしの記」 明治24）<sup>2)</sup>

いずれも、閑散とした原野の中にぼつりとある停車場（新軽井沢）の情景が描かれている。彼らは東京から長野方面への旅の途中、列車の乗り換えの都合から軽井沢に立ち寄ったのであり、決して軽井沢に興味があって来たわけではない。この時期の軽井沢には、当時の日本の代表的な文人達に、浅間山とその寒冷な気候以外にさし

たる感銘を与えるものはなかった。

と同時に、彼らは江戸時代には浅間三宿の一つとして繁栄した旧軽井沢宿についても、いっこうに触れようとはしていない。彼らが（そして当時軽井沢を通過した人々の多くが）見た新軽井沢は、つい数年前まで広漠たる原野だったところであるし、一方旧軽井沢のほうはすっかり昔の面影を失っていたらしい。しかし、この東山道以来の歴史を持つ宿駅の、近世以前のイメージがこの時期に急速に弱められたことは、この後の軽井沢のイメージ形成に大きな意味を持った。わが国のたいていの場所は、近世以前の伝統的な日本のイメージを多少なりとも引きずっているが、軽井沢のイメージはこの時期に一種の白紙の状態になり、大正期以降新しいイメージが形成されるのにはかえって好都合だったのである。

これに加え、軽井沢宿を衰退に追い込んだ国道と鉄道は、東京と信州・北陸方面を結ぶルートとして、東京からの接近性を高め、また軽井沢を通過する人の数を増やすことになった。さきに上げた2人の文学者がまさしくそうであるし、軽井沢で最初に別荘を建てたことで有名なA.C.ショーもこうして偶然この地を通りかかった人たちの一人であった。

## （2）明治後期——避暑地としてのスタート

英国聖公会の宣教師A.C.ショーが初めて軽井沢を訪れ



たのは明治19(1886)年の初夏のことである。彼は自分の故郷カナダのトロントや父の故郷スコットランドに似た軽井沢の風土をいたく気に入り、その年翌年と家族や友人達を誘って軽井沢で夏を過ごし、明治21(1888)年には別荘を建てた。当時の軽井沢には遊女屋や酒場がなく<sup>3)</sup>、手に入りやすい空き家が多かったことなど、宣教師であった彼にとっての好条件が揃っていたのである。

このころ軽井沢を訪れていた避暑客は、口コミによって軽井沢を知った外国人宣教師や大学の外国人教師が主だったが、やがて話を聞き知った在日の外交官や商社員なども訪れるようになり、別荘地を建てるものも増えていった。また、明治26(1893)年にはイギリス留学経験のある海軍大佐八田裕二郎が、日本人として初めて軽井沢に別荘を建て、日本の上流階級にも徐々に避暑地としての軽井沢の名が知られるようになった。こういう状況の中で、明治27(1894)年に開業した万平ホテルのような欧米風ホテルのほかにも、日本式旅館や貸し別荘が次々に建設されたことは、外国人をはじめ日本人も軽井沢を訪れ始めたことを示している。明治30(1897)年、軽井沢へ行こうか霧積へ行こうか迷ったあげく軽井沢へやってきた大町桂月は次のように書いた。

こゝは中山道と共にすたれたる孤駅なれど海をぬくこと四千尺にちかく白雲人の懐をたづねきて夏を知らぬところなり。四面山を帯びたる高原ひろく見わたす限り尾花

招き女郎花笑へり。菅茅の間に別荘とは名ばかりなる小屋の點綴せるは西洋人が避暑の、すみかとかや、新しく植えたりとは見えぬ並木の多くは老桜なるが、中に梨李などの時同ふして果々たる実をつけたるが立てる街道をはさみて隣次せる家の五十戸には足らぬ山村のいたうあれたるに思ひのほかの牛肉を売る家ふたつ、洋酒をうる家ふたつ、西洋風の玩具うる家ひとつ、洋服の裁縫店みつばかりそなはれるにてもこゝに暑をさくる西洋人の多きことは知れつ。(大町桂月「浅間山の一夜」 明治30) <sup>4)</sup>

広漠とした軽井沢の印象は10年ほど前の鷗外らのそれとあまり変わっていないが、桂月が軽井沢へ行ってみようと思ひ立ったように、外国人の避暑地としての軽井沢の名は既に一部の日本人には知られていた。この時期の軽井沢は文字どおり外国人の避暑地で、宣教師をはじめとする外国人達が主導権を握っていた。明治40(1907)年頃には外国人を中心とした自治組織もでき、運動会や遠足会などを催すほか、後に「軽井沢憲法」として知られる酒・女・博打を禁止したり、地元の商店に日曜休業を要求するなど、自分達の習慣に合わせて町を変えていった<sup>5)</sup>。彼らの散歩道にサンセットポイント、パイプオルガンロック、ハッピーヴァレイといった外国風のニックネームがつけられたのも、この頃である。宿場町としての機能がすっかり衰え、農業も振るわない軽井沢の住民にとって、このような変化は許容できる範囲であつたらしく、貸し別荘・旅館業・外国人相手の商店・住宅の建設・別荘のメイド等の仕事が増えることにより、軽井沢

はかつての活気を取り戻し始めた。

明治末期になると日本国内はもちろん、中国や東南アジアに住む欧米人達も軽井沢にやって来るようになり、外国人の避暑地としての軽井沢の地位は確立された。この頃の軽井沢を書いたものには、もう西洋人の避暑地という軽井沢の性格がしっかり描かれている。

八九分通り避暑客の掃ったあとのこの職場は宛然空き家ばかり並んで居る様だ。砂っぽい道路をぼくぼく歩いて行くと、両側の仰々しい金びかや色文字の英語などの看板ばかりが眼に立って、人は極く稀にしか行き逢はない。(若山牧水「旅とふる郷」明治43頃)<sup>6)</sup>

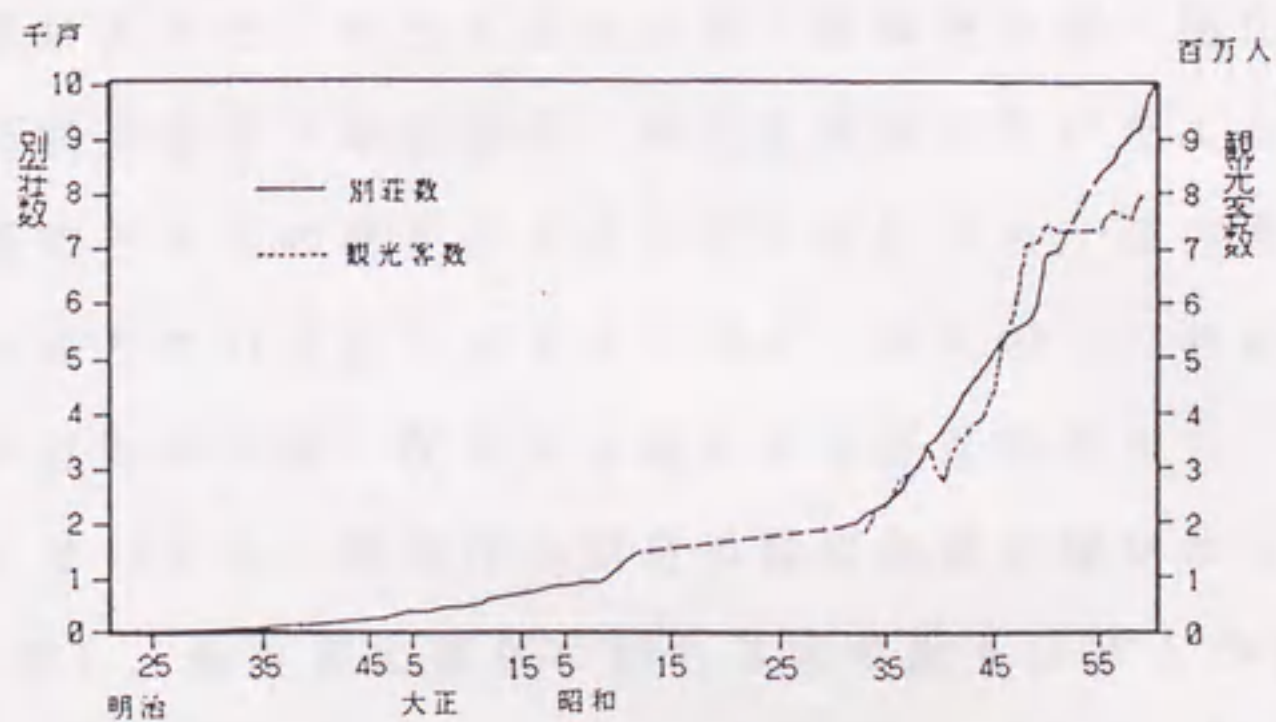
私のはじめて軽井沢に来たのは、明治天皇崩御の年であつた。伊香保に滞在中、ふと思ひ立つて、日帰りか、一夜泊りかで、外人の避暑地を、ちよつとのぞいて来ようというだけの単純な気持で、手ぶらで伊香保の山を下り、高崎経由で、アプト式の登山電車で目的地に来たのであつたが、駅に下りて見渡すと、茫漠たる高原が開展されてゐるだけで、日光や箱根のやうな山水の美に接触するのではなかつた。(略)寝そべって、これが軽井沢かと、興もなげに、思ひめぐらしながら、うとうとしてゐた。滞在客も一人もなさうであつた。西洋的ホテルは二三あるさうだが、其処は宿泊料が高いだらうし、泊り馴れない私などには居心地がよくあるまいと、予め氣遣われてゐたのであつた。(正宗白鳥「軽井沢と私」昭和33)<sup>7)</sup>

牧水も白鳥も軽井沢に避暑を目的に来たわけではなく、旅の途中で外国人の避暑地とはどんなところかという好

7-1表 邦人・外人別避暑客数の推移

稲垣(1924)による

年	邦人	外人	年	邦人	外人
明治44	1080	888	大正12	4110	2320
大正元	1078	1096	13	4429	1157
2	1129	1079	14	3658	1215
3	1287	1098	昭和元	5921	1328
4	1545	1105	2	6025	1480
5	1728	1134	3	6085	1376
6	1649	1322	4	6189	1402
7	2165	1489	5	5769	1565
8	2480	1356	6	5714	1333
9	3637	1407	7	5534	1513
10	2933	1552	8	6338	1580
11	3348	1214			



7-2図 別荘数と観光客数の推移(軽井沢町)

島崎(1978)、軽井沢町資料による

奇心から訪れているように、この時期の軽井沢はあくまで外国人中心の避暑地であり、少なくともまだ日本の作家達が住むような条件は整っていなかった。まさに聖職者に代表されるような厳格な雰囲気を持った避暑地であり、当時の日本の中では一種租界的な、日本ばなれした地域であったことは疑いない。この日本の村とは全く異質な西歐的雰囲気がこの時期に場所イメージとして定着し、外国人が徐々に軽井沢を去っていく大正期以降もしっかりと残ることになる。

### (3) 大正期・昭和初期——開発と文学

明治末期までに軽井沢に別荘を持ったり、毎夏避暑に訪れたりする日本人もかなりいたが、そのほとんどが華族・政界・財界・学界の大物といった、いわゆる特権階級の人々で、たとえば桂太郎・西園寺公望・徳川慶久・新渡戸稲造・末松謙澄・青山胤通等の名が見える<sup>8)</sup>。避暑地としての軽井沢の名が広まるにつれ、軽井沢に別荘を持ちたいと思う日本人も増えてきたが、これに拍車をかけたのが第一次世界大戦による好景気だった。大正期にはいると、軽井沢の別荘の数は急速に伸びはじめ(7-2図)、軽井沢に避暑に訪れる客の数も日本人が外国人を圧倒するようになる(7-1表)。同じころ、大正4(1915)年から野沢源次郎や堤康次郎が旧軽井沢以外の場所(雲場原・長尾原・千ヶ滝・南軽井沢)に大規模な別荘開発

を始め、また大正8(1919)年には日本の華族や実業家たちの手によって軽井沢ゴルフ倶楽部が設立された。

こうした状況の中で、明治半ばより質素で禁欲的な生活を旨とし、避暑地軽井沢をリードしてきた外国人聖職者たちは、軽井沢の俗化を避けて、次第に野尻湖や日光へと移動していった。

この時期、軽井沢のイメージに画期的な影響を与えたのは、文学者たちが次々と軽井沢を訪れたことである<sup>9)</sup>。そして軽井沢を訪れた作家たちの中には軽井沢を気に入り、また作品の舞台に用いるものも現れた。芥川竜之介は大正11(1922)年に大正文士の中では最も早く軽井沢を発見し、小説の舞台にこそ軽井沢を用いなかったが、毎夏軽井沢を訪れていた一人である。

薄暮、散歩の途次、犀星と共に万平ホテルに至り、一杯のレモナアデに渴を癒す。客多くは亜米利加人。露台に金髪紅衣の美人あり。籐椅子に倚つて郎君と語る。惚らくは郎君の鼻、鰐の嘴に似たることを。ホテルを去って、オウデイトリアムの前に至れば音楽会の最中なり。堂面樹下、散策の客少からず。(芥川竜之介 「軽井沢日記」 大正13)<sup>10)</sup>

芥川や室生犀星らをはじめとする大正文士たちが夏のあいだ投宿し、一種の文学サロンを形成していたのは星野温泉や千ヶ滝の旅館であったが、彼らを軽井沢という土地にひきつけたのは、夏の軽井沢の新鮮な空気とともに

に、旧軽井沢に根付いている西欧的な自由な雰囲気であった。彼らが軽井沢にいた大正末期には、既に聖職者達は軽井沢を去りはじめ、明治期の軽井沢にみられたような、厳格な聖職者の避暑地としての性格は次第に薄れていきつつあり、かわってこのような西欧的生活に憧れる日本の富裕階級が、軽井沢に別荘を構えるようになっていた。日本人が増えたとはいっても、軽井沢が当時の日本の中で特殊な場所であったことにはかわりはなく、むしろ軽井沢を訪れる日本人は、すでに自分たちの意識の中に固定されていた軽井沢のイメージに従って、ここに住む西洋人と同じような生活を演ずるふうにさえ見受けられる。軽井沢は日本にありながら日本らしくない土地であり、非日本的イメージを保ち続けた不思議な場所であった。このような状況を、室生犀星と川端康成は、皮肉な見方をまじえて次のように述べている。

澄江堂はパンとミルクの朝飯だが、予はあたり前のおぜんである。この宿に 五十幾人かの避暑客はみるがみんなパンとミルクの朝飯である。(略)

「この宿にゐる間だけパンとミルクにして、家にかへると日本食ぢやないかな。」

さういふと澄江堂はたいがいさうだらうと言つた。(室生犀星「碓井山上之月」大正15)<sup>11)</sup>

軽井沢には、土地に別荘を持つ人々の避暑団といふものがあつて、町政や警察の上にも勢力を及ぼしてゐるが、以前は外人、それも宣教師が主であつたから、なにかと

口喧しく几帳面なものだつたらしい。西洋人の避暑団が殆ど町政を握つて、店の品物の原価を調べては売価を制限した頃もあつたといふ。今もパブリック・コオトは日曜にとざされる。商店が休むのは基督教書店など一二軒に過ぎないが、元は大方の店が半ば強制的に日曜休業をさせられたといふ。教会は現在四つある。

やがて日本人の贅沢な避暑地となり、外人も大公使館員や商人が入り込むにつれて、宣教師達の山小屋風の別荘は追々日本人の手に買い取られてゆくけれども、秩序と公德とを尊ぶ宣教師達の美風は残つてゐて、今も割と静かな賑わひである。（川端康成「高原」昭和12）<sup>12)</sup>

堀辰雄が室生犀星に連れられ、初めて軽井沢へやってきたのは大正13(1914)年のことである。当時堀はフランス文学に傾倒し、フランス文学を日本に移植したような小説を書こうと考えていたが、フランス文学をそのまま日本の風土に移し替えるのには無理があつた。ところが軽井沢の持つ、この日本ばなれした一種西欧的な場所イメージは、そこに日本的なイメージがないゆえに彼が書こうとしている小説の舞台としてうってつけだつた。こうして堀は軽井沢を舞台にして何編か独自の小説を書くことになる。

その高原へ夏ごとに集まつてくる避暑客の大部分は、外国人か、上流社会の人達ばかりだつた。ホテルのテラスにはいつも外国人たちが英字新聞を読んだり、チェスをしてゐた。落葉松の林の中を歩いてみると、突然背後から馬の足音がしたりした。テニスコオトの付近は、毎日賑やかで、まるで戸外舞踏会が催されてゐるやうだつた。



(堀辰雄「麦藁帽子」 昭和7) <sup>13)</sup>

(私は) その村の手製の地図を、彼女の前に擴げながら、その地図の上に万年筆で、まるで瑞西あたりの田舎にでもありさうな、小さな橋だの、ヴィラだの、落葉松の林だのを印しつけながら、彼女のために、私の知つてゐるだけの、絵になりさうな場所を教へた。(堀辰雄「美しい村 或は小遁走曲」 昭和8) <sup>14)</sup>

これらの小説の舞台となる軽井沢は、明らかに日本にありながら日本ではない。そこに描かれる情景は、まるでヨーロッパのどこか静かな地方のようであり、登場する人物も日本人のようではあるが、一般の日本人が持っているような日本的な生活感が、まるで感じられないのである。しかしだからこそ、これらの小説は日常の日本を舞台にしてはとうてい書くことのできないロマンティックな叙情性を、まるでフランスの詩のように小説の中に持ち込むことに成功した。このように軽井沢の持つ場所イメージの特殊性は、堀辰雄をはじめとする昭和初期の芸術派や浪漫派と呼ばれた作家たちにとって格好の舞台となった(7-2表参照)。

堀辰雄の作品と同じく、この時期の作品に描かれた軽井沢は、非日本的な場所の象徴である。外国人がよく登場することはもちろん、カタカナで書かれた語、つまり外来語が多用されている点や、自転車・乗馬・テニス・ゴルフといった当時としてはハイカラなスポーツ、それ

7-2表 軽井沢を舞台にした主な文学作品と作品中軽井沢  
の描写に用いられたキーワード

作者「作品」(作中で描かれている年)	軽井沢の描写に用いられた語(主要なもの)
幸田露伴「酔興記」(明治21)	寒さ、馬車
森鷗外「みちの記」(明治23)	馬車、蘆葦
正岡子規「かけはしの記」(明治24)	寒さ、草
大町桂月「浅間山の一夜」(明治30)	尾花、女郎花、西洋人の避暑、牛肉、洋酒、西洋風の玩具
坪内逍遙「(日記)」(明治32)	アプト式、高さ、寒さ
若山牧水「旅とふる郷」(明治43頃)	避暑客、英語の看板
正宗白鳥「軽井沢と私」(明治45)	茫漠たる高原、避暑、西洋人、宣教師
菊地寛「陸の人魚」(大正13)	外国商人の假店、英語の看板、美しい人波
芥川竜之介「軽井沢日記」(大正13)	レモナアデ、亜米利加人、音楽会
室生犀星「碓氷山上之月」(大正14)	パンとミルクの朝飯、西洋人、ダンス
芥川竜之介「軽井沢日記」(大正14)	テニスコート、アイスクリーム、別荘、西洋人、自転車
芥川竜之介「歯車」(昭和2)	西洋髪、洒落た洋装、亜米利加人
堀辰雄「ルウベンスの偽画」(昭和2)	ドライブ、テニス、ダンス、西洋夫人、男爵のお嬢さん
堀辰雄「軽井沢にて」(昭和5)	西洋人、散歩、別荘、アンデルセン、グリム
横光利一「寝園」(昭和5)	サンマアハウス、避暑客、ホテルのロビー、外人
堀辰雄「恢復期」(昭和6)	別荘、散歩、スコットランド人らしい老夫婦、宣教師、趣味のいい暮らし方
堀辰雄「麦藁帽子」(昭和7)	避暑客、外国人、上流社会、ホテル、落葉松、英字新聞、馬、テニス、教会、ピアノ
堀辰雄「エトランジェ」(昭和7)	自転車、馬、ホテル、西洋人
寺田寅彦「軽井沢」(昭和8)	ユニークな町、東京の銀座、小さな可愛いブライド
寺田寅彦「沓掛より」(昭和8)	おかっぱに洋装、ワイシャツに下駄履き、和洋入り交じった盆踊り
堀辰雄「美しい村或は小通走曲」(昭和8)	外人、別荘、散歩、公使館、ピアノ、水車、雑木林
室生犀星「軽井沢の雨」(昭和9)	西洋人、散歩、軽快な雨、出張商店街
丸岡明「生きものの記録」(昭和10)	ホテル、舞踏会、ゴルフ、サナトリウム、教会、テニス、教師
堀辰雄「風立ちぬ」(昭和11)	白樺、ホテル、別荘
川端康成「高原」(昭和12)	宣教師達の美風、避暑団、日本人の贅沢な避暑地
中里恒子「乗合馬車」(昭和13)	風立つ、煖爐、新鮮な朝の光線
中里恒子「野薔薇」(昭和13)	西洋館、旅館、外人夫妻
遠藤周作「薔薇の館」(昭和13-20)	野薔薇、自転車、テニス、アイスクリーム、落葉松、葡萄液
三島由紀夫「彩絵硝子」(昭和15)	別荘、ロマンティック、パセティック、遠雷、童話的な感情
三島由紀夫「仮面の告白」(昭和20)	自転車、霧雨、テニスコート、独乙人の少年
室生犀星「消えたひとみ」(昭和24)	外人、別荘、疎開人や避暑人
円地文子「高原抒情」(昭和24-5)	疎開地、落葉松、フランス人の未亡人、コテージ、荒廃したゴルフ場
川端康成「みづうみ」(昭和29)	つめたい霧の夜、あき別荘、から松、トルコ風呂
北杜夫「霧の中の乾いた髪」(昭和31)	霧の帳、別荘、乗馬、ブナ、テニス靴
石坂洋次郎「光る海」(昭和38)	避暑地、山荘、テニス、スケート、乗馬、観光客、俗化
遠藤周作「さらば、夏の光よ」(昭和40)	ホテル、避暑地、外人、テニスコート、自転車
横溝正史「仮面舞踏会」(昭和49)	別荘、旧貴族、ゴルフ、落葉松
円地文子「彩霧」(昭和50)	別荘、落葉松、溪流、軽井沢人種、公爵、外交官、自転車、パーティ
栗本 薫「軽井沢心中」(昭和54)	自転車、避暑地、御代田のモーター
山本道子「蛇莓」(昭和61)	別荘、自転車、アイスクリーム、乗馬

にピアノやヴァイオリンといった西洋の楽器や音楽がよく出て来ることも共通する特徴となっている。これらに共通して描かれる軽井沢のイメージは、多くの人々に読まれることにより、固定した場所イメージを全国的に浸透させる要因となった。この時期に書かれた作品のいくつかが今日まで読みつがれ、現在でも軽井沢のイメージに寄与していることは明らかである。

しかし、軽井沢を舞台とするこの種の作品が盛んに書かれたのは、そう長い期間ではなかった。堀辰雄は『風立ちぬ』の終章を境にして、作品の舞台を軽井沢から追分や大和路に移し、日本の古典的な文学へと傾斜していったし、なにより戦争をはさんで世の中そして軽井沢自体が変わっていったからである。

#### (4) 戦中・戦後～昭和40年代

##### —— 混迷の時代から大衆化と俗化へ

第二次世界大戦は軽井沢にも影響を及ぼし、昭和13(1938)年頃から英米人が帰国しはじめ、戦争が激化すると疎開者が増え、軽井沢も避暑どころではなくなった。<sup>15)</sup>しかし、軽井沢に重大な変化がおこるのはむしろ戦後になってからのことである。敗戦後、西洋ふうのホテルや別荘などはすぐに米軍に接収され、数年後徐々に接収が解除されはじめてからも、軽井沢の生活は容易には戦前の水準には戻らなかった。このような戦後の軽井沢の混

乱は、戦前の軽井沢ではみることのできなかつたパチンコ屋やバー、そしてトルコ風呂などを出現させた。この戦後の軽井沢の急激な墮落とも取れる変化は、戦前の軽井沢の高級で厳格なイメージがしっかり残っていたからこそ、よけいに印象的であった。

しかし、古着は風呂敷にくるんで、これをどうしたものか。あき別荘のなかにはふりこんでおけば、来年の夏まで見つかりはすまい。(略) そのごみ箱のあるあたりから、銀色の蛾の群が霧のなかへ舞ひあがる幻を見た。銀平は取つてかへさうとして立ちどまつたが、銀色の幻は頭の上のから松をぼうつと青く照らして消えた。から松は並木のやうにつづいてゐるらしく、その奥に装飾灯のアアチがあつた。トルコ風呂だつた。(川端康成「みづうみ」 昭和29) <sup>16)</sup>

昭和28(1953)年、さらに当時の軽井沢の混乱ぶりを示す事件として、浅間山麓の米軍演習地誘致の問題が起こる。この事件に対する住民の反対運動をきっかけとして、戦後の軽井沢の風紀の乱れを直そうという機運が起こり、それが昭和33(1958)年の、風俗営業や夜間営業を禁止し騒音を防止する『軽井沢町の善良なる風俗維持に関する条例』の公布となって現れた。

昭和30年代の高度経済成長期にはいると軽井沢には再び別荘ブームが起こり、昭和27(1952)年のスケート場の建設や、昭和34(1959)年の皇太子御成婚にともなうテニスブームは、軽井沢に大量の観光客を訪れさせることに

なった(7-2図)。観光客の増加は軽井沢に再び活気を与えたが、一方、観光の大衆化は、軽井沢に戦前にはみられなかった新たな問題を引き起こした。大量の観光客の流入が閑静な避暑地であった軽井沢の環境を変えはじめたからである。当時の新聞や雑誌にはこの現象に関する記事が、毎年夏になると必ず取り上げられているが、大衆向けのメディアともいふべき新聞や雑誌が軽井沢の記事を組むということ自体が、軽井沢の大衆化を象徴していると言えよう。

凶悪犯罪こそないけれども、犯罪発生件数では長野県下第一位、窃盗被害額においても首位を占めるという町、それが“国際観光文化都市”と称し、外人宣教師によって開かれた清教徒的避暑地であり、多数の金持や知識人が集まることで有名な軽井沢であるといったら、誰しも奇異の感を抱くであろう。しかし残念ながらそれが最近の軽井沢の真の姿なのである。(中屋健一 「軽井沢のいやらしさ」 文芸春秋 昭和33) 17)

今年から夏でもアイススケートのできるスケートセンターには若者たちが群がり、ジャンスカ音楽のレコードが鳴り響く。ズラリと並ぶテンガロー。ここ二、三年のうちにみるみる町の姿が変わった。おまけにバーが五、六軒、キャアキャア笑う女給の声が聞えるにおよんで、別荘人種はキューッとマユをツリあげた。(「大衆化する軽井沢 別荘人種ハラハラ」 朝日新聞 昭和34) 18)

この時代の軽井沢に関する雑誌や新聞の記事は、いま

(当時)の軽井沢が昔と比べて変わってしまったことを嘆くような論調で書かれているところが共通している。昔とは戦前からのいわゆる「上流階級の避暑地」としての軽井沢のイメージのことにほかならず、要するに軽井沢の場所の実態と定着した場所イメージとの乖離が大きくなったことを指しているのである。一般の観光客は昭和30年代から40年代にかけて急増した(7-2図)が、さしたる見所もない軽井沢にこれほどの人が訪れたのは、軽井沢のイメージに惹かれたからで、これは軽井沢のイメージが戦前の一部の日本人のワクを越えて一般庶民にも普及し、より広い社会集団のレベルで定着してきたことを示している。大衆の読物である新聞や雑誌に、これだけ軽井沢の俗化の記事が取り上げられること自体、大きな意味を持っており、このような記事があちこちで書かれることによって軽井沢はさらに知名度を増していったと考えられる。

これらの記事を読んで気がつくのは、「軽井沢人種」・「別荘貴族」・「上層」といういささか差別語めいた語で表現される、戦前からの軽井沢の住人と、一般「大衆」とを対置して描く手法がとられていることである。じつは、このような書き方それ自体が、軽井沢の高級別荘地としての差別性を肯定するものであり、「高級避暑地・別荘地」としての軽井沢のイメージを強化しこそすれ、けっしてそのようなイメージを壊すものではなかつた。

た。その証拠に、現実の軽井沢は大衆化しつづけたにもかかわらず、次節で述べるように定着した軽井沢のイメージはその後も依然として残ったのである。

文学作品についても同様で、戦後の軽井沢を舞台にした作品は戦前と比べると多くなく、そのモチーフも軽井沢に住む人々の生活の裏面や冬の軽井沢の侘しさなど、必ずしも戦前のように軽井沢の特殊性そのものにはないが、そこに描かれる軽井沢のイメージは、やはり別荘、テニス、乗馬などで彩られる上流階級の避暑地としてのそれである（7-2表）。

#### （5）昭和50年代以降——現在の軽井沢

現在の軽井沢の状況も、大量の観光客が押し寄せ、相変わらず雑誌は軽井沢を取り上げるという点で、昭和30年代の延長上にあると考えることができるが、新聞や雑誌などについては、昭和50（1975）年前後から前節でみたような軽井沢の大衆化を主題とした記事は少なくなり、むしろ軽井沢にいわゆる別荘族と日帰りの一般大衆がいるのは当たり前とする論調のもの、さらには軽井沢の高級さを強調するものが増えてくる。

東京には、ニューヨークのフィフス・アベニューや、ワシントンのジョージタウンといった“上流”の家族が集まって住んでいる区画がないが、夏の軽井沢はこのような様相を呈する。（略）ここでは、みな上流階級に属していて、良家の人々だとい

う前提がある。軽井沢は、アメリカの東海岸の小さな町のようにだ。（加瀬英明「軽井沢・夏の日本人学」 諸君 昭和46）<sup>19</sup>）

軽井沢にあるテニスコートの数ときたら800面以上。シーズンにはそれが満員となり、旧軽銀座にはテニスラケット片手のテニスウエアがドットくり出しちゃうわけだけど、ちょっと待った。（略）軽井沢の本当の顔は、もっとほかにもあるはず。旧軽銀座をホンの一本横道にそれるだけでも、思わずロマンチックになってしまう本物の軽井沢の姿にお目にかかれるのだ。（「軽井沢」 るるぶ 昭和62）<sup>20</sup>）

つまり、「上流階級の避暑地」・「高級別荘地」という固定した軽井沢のイメージは、明らかに大衆化が進んだ現在においても一向に失われておらず、現在巷に溢れている観光ガイドやレジャー雑誌を見ると、この固定したイメージは以前にもまして強調されている観がある。それは、軽井沢を軽井沢たらしめているものは現実の軽井沢の姿ではなく、軽井沢という場所と歴史的に結びついてきたイメージである、ということの人々が理解し始めた結果であるのかもしれないし、さらに穿った見方をすれば、マスコミが意図的にこうした情報を流しているのだとも考えられる。

### 3. 軽井沢地名の分布の拡大と場所イメージ

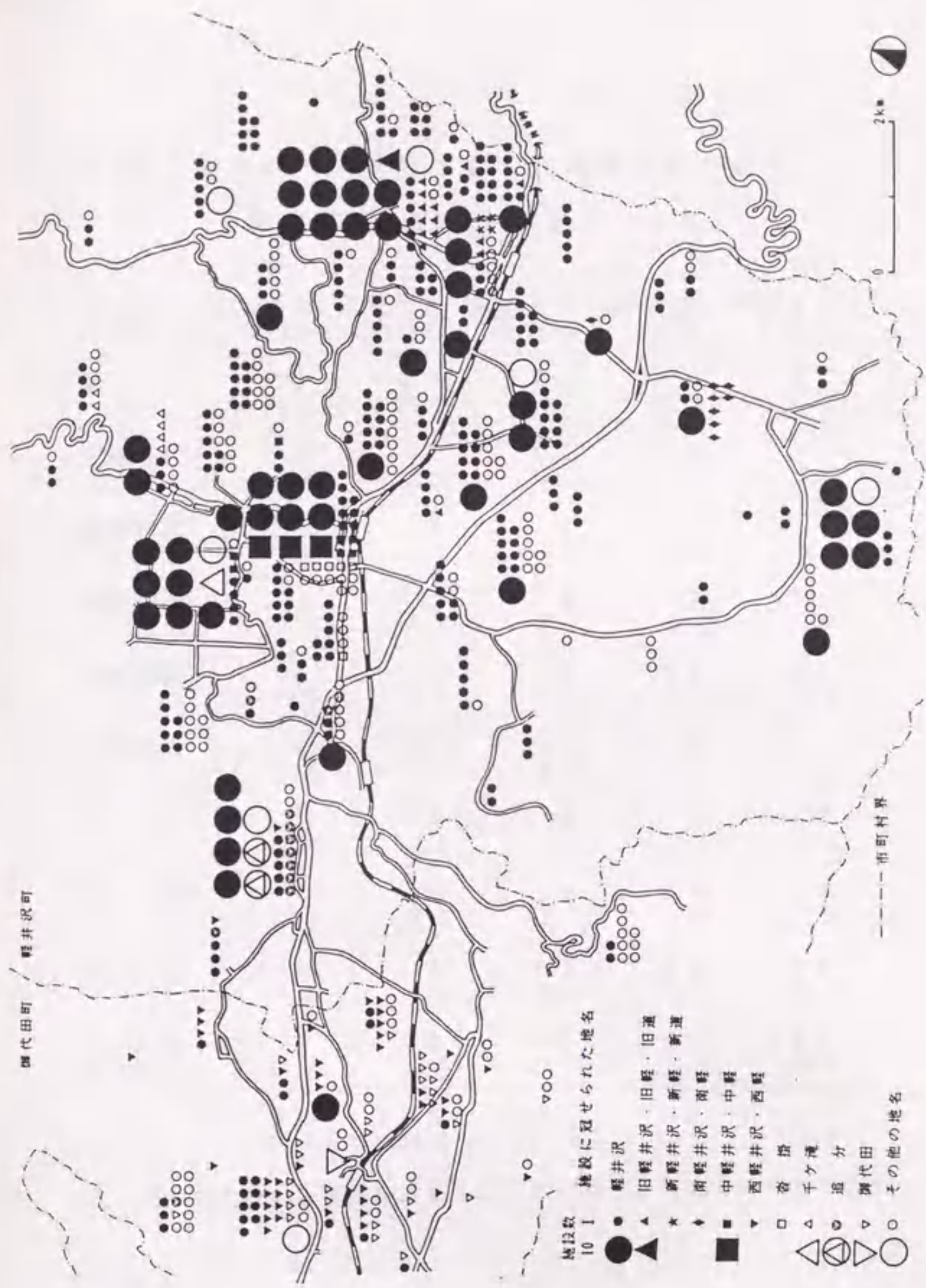


地名を変更することによって、既存の場所イメージとの関連を断ち切ったり、逆に既に地名と強く結びついている場所イメージを利用したりすることがしばしば行われていることは、第6章で述べたとおりである。これまで見てきたように、軽井沢のイメージは歴史的に、とくに別荘地との関係において形成されてきた。さらに、他の場所とは可換性のないその特殊なイメージは希少であるがゆえに価値的側面が強く、このようなイメージと結び付いている「軽井沢」という地名もまた強く価値付けされている。その結果、軽井沢の歴史、とくに別荘地開発が広範囲に広がった戦後の歴史において、このような場所イメージの利用が軽井沢地名の拡大という形で進化した。ここではその実情を検討する。

(1) 軽井沢・旧軽井沢・新軽井沢・南軽井沢・千ヶ滝  
軽井沢地名の分化は、明治12(1879)年の国道(碓氷新道)の開削にともない、新しくできた国道沿いの新しい集落を新道または新軽井沢、旧中山道(旧道)沿いの軽井沢宿を旧軽井沢と呼んだことに始まる。軽井沢に最初の別荘が建つ前の話であり、もちろん地名改変と別荘地の開発は無関係であった。旧軽井沢は軽井沢の本集落のことであり、新軽井沢と区別するために旧の字を頭につけただけなので、新軽井沢と区別する必要のないときは単に軽井沢と呼ぶことが多い。

その逆に、ふつう軽井沢といえば、それはこの旧軽井沢を意味する。前述のように、日本の富裕な人々の間で軽井沢の名に避暑地としてのイメージが定着してきたのは、明治末から大正期にかけてと考えられるが、それ以前は軽井沢の別荘の分布は旧軽井沢に限られていたので、西欧的な避暑地のイメージを持つ「軽井沢」という地名は、ほんらい旧軽井沢を指していた（7-1図参照）。

ところが軽井沢のイメージが定着してきたのと時を同じくして、旧軽井沢を囲む長尾原・雲場原・野沢原などが開発され、それらはやがて「軽井沢」の名で呼ばれるようになり、また、同じ頃に開発された地蔵ヶ原や沓掛区有の入会地は、旧軽井沢からあまりに離れていたためにそのまま軽井沢を名乗ることはできず、南軽井沢・軽井沢千ヶ滝と名を変えて売りに出された。さらに軽井沢のイメージが広く浸透し、より多くの人々が軽井沢に別荘を持ちたがるのと歩調を合わせるように、大正12(1923)年には東長倉村から軽井沢町へと町名が変わり、昭和4(1929)年頃には群馬県長野原町の法政大学村付近の地蔵川が北軽井沢と呼ばれ始めるなど、「軽井沢」という地名の指す範囲は拡大していくことになる。別荘地の開発競争は戦争によって一時中断されるが、昭和30(1955)年頃から再び別荘ブームが起こり、これに加えて大衆観光地となった軽井沢では、戦前に数倍する勢いで別荘地の開発が進み、「軽井沢」の名前は高級別荘地の象徴とし



7-3図 軽井沢等の地名を冠した施設の分布

(50音別電話帳による)

昭和60年8月1日現在。それぞれの施設数は第1図に示した各区ごとに集計し図示してある。

7-3表 軽井沢等の地名を冠した施設の数の変化

(軽井沢町・50音別電話帳による)

冠せられた地名	昭和24 (1949)	昭和34 (1959)	昭和44 (1969)	昭和52 (1977)	昭和60 (1985)
軽井沢	31 63.3	128 65.6	371 70.9	647 72.0	787 71.4
旧軽井沢	0 0.0	5 2.6	12 2.3	15 1.7	23 2.1
新軽井沢	0 0.0	3 1.5	3 0.6	0 0.0	4 0.4
南軽井沢	1 2.0	4 2.1	2 0.4	4 0.4	11 1.0
中軽井沢	0 0.0	3 1.5	16 3.1	29 3.2	37 3.4
西軽井沢	0 0.0	0 0.0	1 0.2	6 0.7	2 0.2
沓掛	7 14.3	13 6.7	5 1.0	7 0.8	7 0.6
千ヶ滝	0 0.0	9 4.6	14 2.7	14 1.6	16 1.5
追分	3 6.1	1 0.5	13 2.5	28 3.1	30 2.7
その他の地名	7 14.3	29 14.9	86 16.5	149 16.6	185 16.8
計	49 100.0	195 100.0	523 100.0	899 100.0	1102 100.0

注：表中の上段の数字は施設数を、下段の数字は計に占める%を示す

7-4表 軽井沢等の地名を冠した施設の数の変化

(御代田町・50音別電話帳による)

冠せられた地名	昭和24 (1949)	昭和34 (1959)	昭和44 (1969)	昭和52 (1977)	昭和60 (1985)
軽井沢	0 0.0	0 0.0	6 14.3	28 18.2	32 16.2
西軽井沢	0 0.0	0 0.0	10 23.8	31 20.1	41 20.7
追分	0 0.0	0 0.0	2 4.8	1 0.6	0 0.0
御代田	3 60.0	4 50.0	10 23.8	38 24.7	38 19.2
その他の地名	2 40.0	4 50.0	14 33.3	56 36.4	51 25.8
計	5 100.0	8 100.0	42 100.0	154 100.0	198 100.0

(表中の上段の数字は施設数を、下段の数字は計に占める%を示す)

て各地で乱発されるようになった。

そこで、とくに戦後の「軽井沢」地名の拡大について、50音別電話帳をもとに軽井沢・旧軽井沢・中軽井沢・沓掛といった地名を冠する施設の数で軽井沢町と御代田町の各地区について数え、その分布の変化を調べてみた（7-3図, 7-3表, 4表）。電話の加入件数の増加を考慮すれば多少割り引く必要があるが、戦後40年の間「軽井沢」の名を冠する施設が一貫して増加し続けていることは確かだ。これを年次毎に地図に落としてみると、南ヶ丘・南原・南平台・レイクニュータウン等の新興別荘地が外へ外へと開発されるのにも関わらず、軽井沢地名は確実にその分布域を広げてきており、現在では「軽井沢」の名は軽井沢町の全域に分布していることがわかる。

因みに現行の観光ガイドでの記載のされ方を見ると、旧軽井沢・新軽井沢・南軽井沢・中軽井沢・追分の、いわゆる軽井沢町内に分布する地区は、どのガイドでも軽井沢の一部と見なされており、北軽井沢も軽井沢の一部として紹介されることが多いが、御代田（西軽井沢）については軽井沢として取り上げられている例は少ない。

新軽井沢は軽井沢の玄関口にあたり、駅とともに発展したところである。場所を示す言葉としてはよく用いられるが、新軽井沢にある施設に新軽井沢の名がついていることは、とくに旧軽井沢と区別する必要がある場合のほかはない。旧軽井沢とおなじく新軽井沢にある施設も、

単に軽井沢と名乗っていることが多い。昭和49(1974)年、区画整理にともなって新軽井沢の一部は軽井沢東と名を変えた。

南軽井沢は大正10(1921)年頃、箱根土地(現国土計画)の堤康次郎が地蔵ヶ原と呼ばれていた旧発地区有地を買収し、新しく名付けた地名である。まだ別荘地の開発が旧軽井沢周辺に限られていた時代なので、別荘地として売り出そうとした堤の思惑はずれ、戦前は南軽井沢飛行場があるくらいであった。南軽井沢が本格的に開発されるのは戦後になってからで、南軽井沢湖や南軽井沢ゴルフ場ができてから徐々に知られるようになった。南軽井沢の地名は狭義には国土計画所有の一带を指すが、JR信越本線より南側の南ヶ丘や塩沢など広い地域を、まとめて南軽井沢と呼ぶこともある。南軽井沢の名のつく施設の分布を見ると、最近になって南ヶ丘周辺を含めた地域に少し増えている。ただレイクニュータウンも含め、信越線より南では、軽井沢かその他の名で呼ぶことが多い。

千ヶ滝ももと沓掛の入会地(地籍では獅子岩・坂下・芹ヶ沢・小谷ヶ沢)だったところを、堤康次郎が大正7(1918)年と昭和3(1928)年以降に買収し別荘地とレジャーランドとして売り出したところである。旧軽井沢付近以外では最も古い別荘地で、千ヶ滝の名も別荘地のブランドとして戦前より定着しているが、千ヶ滝の名のつい

た施設の数を見ると、年々その比率は下がってきている  
(7-3表)。

## (2) 中軽井沢・沓掛

戦後誕生し現在かなり普及している「軽井沢」地名に、中軽井沢と西軽井沢がある<sup>21)</sup>。中軽井沢はかつて沓掛と呼ばれていたが、戦後千ヶ滝の別荘地の拡大やスケート場の開設にともなって千ヶ滝への入口としての重要性が高まったことから、ここを訪れる避暑客や観光客が昭和27(1952)年頃から使い始めたと言われる。その後、地元商店街や不動産業者などからの働きかけもあって、昭和31(1956)年にまず駅名が沓掛から中軽井沢に変わり、ついで昭和35(1960)年に区名も沓掛区から中軽井沢区に変わった。

施設の名称に用いられる地名についても、地名が変わった昭和30年代前半を境に沓掛は減少し中軽井沢が増え、その地位は逆転する(7-3表)。今日では地元でも沓掛の名を知らぬ者がいると言われるほど中軽井沢の地名は定着しているが、実際のところ中軽井沢の名称を使っているのは地元商店が主で、別荘などでは単に「軽井沢寮」などつけている場合が多い。

とくに中軽井沢自身の場所イメージという点では、「新しいレジャーゾーン」や「庶民的」という言葉でしか表されないように、旧軽井沢ほどの強いイメージもな



く、一方で沓掛の名を変えたことによって、「沓掛の時次郎」に代表される歴史的なイメージも無くなり、「軽井沢」の中では印象の薄い地名になっていると言わざるを得ない。これは最近千ヶ滝の名を冠した施設の数が増えていないこととも合わせて、かつていわゆる軽井沢とは別のものであった沓掛・千ヶ滝地区が、「軽井沢」の拡大によってその中に取り込まれたとみることができる。

これとちょうど対照的なのが、追分の場合である。追分は旧軽井沢からずいぶんと離れていたために、別荘地としての開発はずっと遅れ、いわば取り残された形になっていたが、昭和40年代後半頃から旧軽井沢とはひと味違うひなびた旧宿場町として脚光を浴びるようになり、追分の名を前面に出した観光施設や別荘が増えてきた。追分の場所イメージは「軽井沢」の華やかなイメージとは対照的に、「宿場町の面影」や「落ち着いた情趣」としてかなりイメージが定着してきており、軽井沢町にあって「軽井沢」地名以外の地名が、唯一根強く残っている場所となっている。

### (3) 西軽井沢・御代田

西軽井沢という地名は、昭和32(1957)年に御代田町東部の東台区が西軽井沢区に区名を変更した時に初めて現れるが、昭和40年代に入ってから観光ブームが起こると、軽井沢を訪れる観光客をねらい、御代田町の観光協会や

商工会が中心となって西軽井沢の名をさかんに使用し始めた。このころから町名を西軽井沢へ変更しようという動きも何度かあったが、結局うまくいかず、かえって御代田町のこのような動きに対し、軽井沢町の西部に位置する追分地区が、御代田町を牽制する意味もあって、昭和42(1967)年に信濃追分駅付近の小字七区画を字西軽井沢に変更したことにより、御代田町と軽井沢町にそれぞれ西軽井沢が出現した。

一方、御代田町も西軽井沢あるいは西軽高原の名で観光PRを行い、昭和40年代以降西軽井沢を名乗る施設の数も急速に増加し(7-4表)、現在では西軽井沢の名は国道沿いを中心に御代田町のかなりの地域に広がっている(7-3図)。

追分の西軽井沢については、現在ではその存在を知る人さえ少なく、ふつう西軽井沢といえは御代田町のそれを指す。しかし全国的にみると、西軽井沢の地名が一般化しているとは言い難いようで、現行の観光ガイドや雑誌でも御代田町の区域を「軽井沢」の一部として紹介しているところは少なく、とくに西軽井沢という呼称は地元以外ではあまり使われていないというのが現状である。それどころか、軽井沢町には風俗営業を禁ずる『条例』があることから、御代田町の国道沿いにはこの種のホテルがかなり建っているが、むしろこの事実の方がイメージに影響を与え始めている。

大体軽井沢なんてそんな面白いところじゃねえよな、高原に白いワンピースのセーソな娘がひっそりーなーんてさ、そんな感じ、まるでねえのな。みーんな、うろうろしてる女さ、男ほしくってしょうがねえ、みてえな、ギンギンの目つきで、足から肩から出しまくってよ、大体ものほしそうなんだよ。(略)あ、ヤローが声かけてんの。あ、乗りゃがった！あーあーあ！これであいつら、今夜は御代田のモーテルだぞ。あーんなヤローどこがいいんだろうな。(略)けどさっきのタクシーの運コウあったま来るよなッ。オレたちが乗って、オレが「御代田」って云うかいわねえうちに、「ああ、わかったよ。モーテルだろ」だってよ。(栗本 薫「軽井沢心中」 昭和57)<sup>2)</sup>

上の例の場合、「西軽井沢」ではなく「御代田」がモーテルのイメージと結びついているわけだが、「軽井沢」と名のつく所にモーテルはふさわしくないという感覚がどこかに働いているのであろう。御代田町では昭和62(1987)年の国鉄民営化を機会に御代田駅を西軽井沢駅に変更する計画があり町民の過半数の賛成を得ていたが、軽井沢町のほうからクレームが付き、またしても実現はならなかった。その際の軽井沢町の反対理由は、「百年かけて作り上げた軽井沢のイメージに影響を与えかねない」、「軽井沢を信じてやってくる観光客にまぎらわしい印象を与える」というものであった<sup>23)</sup>。

#### (4) 場所イメージの利用と軽井沢地名の拡大

以上の例に見られるように、定着した軽井沢のイメージはそれ自体経済的な価値を帯び、その利用が軽井沢地名の拡大をもたらした。軽井沢地名の拡大は、①「軽井沢」の名を冠する別荘分譲地の拡大、②「軽井沢」の名を冠する各種施設の分布地域の拡大による「軽井沢」自身の膨張、および③他集落の「軽井沢」への地名変更による新しい軽井沢の出現、によって進行したと考えられる。その結果、元来一宿場の名であった「軽井沢」の名は、今では県境をも越え、2県数町村にわたって広がっている。しかし一方で、軽井沢の場所イメージを守ろうとする、あるいはその利用を独占しようとする立場からは、「西軽井沢」の例のように軽井沢地名の無制限な拡大に対する抑制の動きも見られる。

#### 4. 軽井沢のイメージの記号化——結びにかえて

人がある限られた空間に意識を向けるとき、対象としての空間（すなわち場所）と主体に生起したその空間に対するイメージ（これを場所イメージと呼ぶ）とが対応しているとみることができる。場所イメージはそれ自体は個人的なもので、世の中には無限個の場所が存在し、イメージする主体の数だけの無数の場所イメージが考えられるが、かといってそれぞれの人のいろいろな場所イ

メージに全く共通点が無いというわけではない。少なくとも同じヒトとして、あるいは同じ環境や文化や歴史的背景のもとで育った者として、場所をイメージするしかた（それは対象を認識する方法にほかならない）に、必ずある程度なんらかの共通性が認められるはずである。例えば一幅の絵のような風景を見て、それを美しいと思わない人がそう沢山いるだろうか。このことは個人のレベルでの場所イメージを研究する際の大きな依りどころとなっている。もしそうでなければ、他人の「原風景」などを追体験し、それを語ることはできなくなる。

一方、場所イメージを社会のレベルで捉えることも可能だ。われわれは家族から国家までさまざまなレベルで社会組織の一員としての役割を演じており、それぞれの社会内でのコミュニケーション（その大部分は言語もしくは言語的な記号によっている）を円滑に行ううえで、いくつもの暗黙の約束ごとに従って生活しているが、ある種の決まった場所に対するイメージのしかたもその例外ではない。われわれがあるレベルの社会の中で、その場所イメージを冗々と説明することもなく、地名や場所の提示によってある程度の場所イメージを互いにやり取りできるのは、社会的に決められたコードによってその地名や場所が意味する場所イメージが相互に解読されるからである。むろんこのような場所イメージは、例えば宣伝広告の文句や教科書の事項の丸暗記のように、ステ

レオタイプ化されやすく歪みも生じやすいが、それゆえにかえって記憶されやすく、また場所の性格を大胆かつ的確に捉えていることもある。この社会のレベルでの地名や場所と場所イメージとの間の対応関係は、はじめは緩いものがその社会の中で繰り返し使用されることによってより強固になり、ついには場所（及び地名）を記号表現とし、場所イメージを記号内容とする狭義の記号関係ができる。この場所と場所イメージの関係が社会的に徐々に固定されていく過程が、場所イメージの記号化と呼ぶものである。

社会的に記号化した場所イメージを扱うことの意義は、出版物や報道に代表されるかなり客観性の高い資料によってイメージに迫ることができるだけでなく、その記号化が起こった社会（それを構成する組織としての人々）の意志決定や行動、ひいてはその結果としての地理的事象を説明する重要な要因となっていることにある。つまり場所イメージの記号化は、一方では社会の認識や行動の結果生じたものであり、同時に一方で社会の認識や行動に影響を及ぼす原因ともなっている。また、小さいスケールの社会内で記号化した場所イメージが、より高次の大きいスケールの社会内で記号化していくというように、記号化の過程自体が動的なものとして一つの社会地理的な事象と考えられる。

本章で取り上げた軽井沢の場合、まさしくそのような

事例の典型的な一つであり、近代以降の軽井沢の歴史は、「軽井沢」という場所と地名が「高級避暑地・別荘地」という固定した意味（場所イメージ）をもつ記号表現と化していった過程と密接な関係があった。そこで、第2節、第3節において明らかにされた事実をもとに、場所の変化を場所イメージの記号化との因果関係という観点から考えてみたい。

明治以降の軽井沢の変化は、明治前半の宿場としての衰退期→明治後半の聖職者に特徴づけられる外国人を中心とした避暑地の時代→大正期から昭和戦前期にかけての日本人の富裕階級を中心とした避暑地の時代→戦中戦後の混乱による衰退期→昭和30年頃からの急激な大衆化→昭和50年頃から現代にいたる大衆化が安定した時代、という六つの段階として捉えることができよう。このうち、避暑地としての軽井沢のイメージの記号化は明治20年代の終わり頃には始まりつつあったと考えられる。在日外国人の間に軽井沢のことが口コミで伝えられ、軽井沢のイメージはまず彼らの間で記号化した。一方、その結果軽井沢に外国人が多く集まったことは、軽井沢に外国人の別荘地としてのイメージを与えた。西洋風の避暑地という軽井沢のイメージは明治末期には一部の日本人にも定着し、ここを訪ねようという日本人の数も増えてくる。

これが大正期に入ると外国人と日本人の地位が逆転す

る。日本人が多くなるということは、記号化したイメージの基となった外国人の避暑地という軽井沢の場所の性格そのものを変えていくというジレンマに必然的に陥ることになったが、大正から昭和初期にかけて作家達が軽井沢を舞台にした多くの作品を残したことにより、結果的にイメージはむしろ強化された。彼らは自分達の作品に、既に記号化していた軽井沢のイメージを用い、より西洋的・ロマン的なイメージを書き込んだが、それらの作品が広く読まれることによって、そこに描かれた軽井沢のイメージはさらに強く記号化され、この後、軽井沢自体の変化にもかかわらず、記号化された軽井沢のイメージが常に一定の形を保つ拠りどころとなる。しかし、まだこの時期の軽井沢のイメージは全ての日本人について記号化していたわけではなく、富裕な階層に属する一部の人々に限られていた。

戦争前後の軽井沢衰退の時期にも、既に記号化していた軽井沢のイメージは変わらず、その後再び避暑地・別荘地として復活したのも、軽井沢の住民が町の俗化に反対し、またこれらの話題が新聞や雑誌の記事に取り上げられたのも、そのためであった。

戦後は新聞・雑誌・テレビといったマス・メディアが発達し、軽井沢に関するいろいろな情報が流されるようになり、戦前に増じてそのイメージは全国的に記号化していく。観光の大衆化の結果、それまで軽井沢に行くこ



とのなかった一般大衆も軽井沢に興味を示すようになった。こうして再び軽井沢は高級な避暑地ゆえに大衆化していくというジレンマに陥るのだが、いったん記号化した「上流階級の避暑地・別荘地」としての軽井沢のイメージは現在に至るまでほとんど変わっていない。

以上のように、はじめ少数の在日外国人達だけの間で記号化していた軽井沢のイメージは、外国人から日本人、富裕な階級から一般庶民へと、時が経つにつれ記号化している集団の規模が大きくなっていった。と同時に、現実との乖離にもかかわらず軽井沢のイメージが永く保たれていることは、記号化した場所イメージの強い持続力をも示している。

今日、記号化した西欧的な避暑地としての軽井沢のイメージは戦前の軽井沢に由来するものであるが、現実の軽井沢との乖離はますます大きくなってきている。戦後、「ゴルフの軽井沢」、「スケートの軽井沢」、「ペンションの軽井沢」などという新しい軽井沢のイメージも生まれてはいるが、戦前のイメージにとって代わるほどのものではなかった。今後考えられる展開として、現実の軽井沢の変化にかかわらず、堀辰雄の小説に描かれているようなイメージが軽井沢のイメージとして存続するのか、また、現実の場所に即した新たなイメージの記号化が起こり、いわゆる古き良き軽井沢のイメージは崩壊するのか、興味深いところである。しかし後者のような動

きは、第2節の(5)で見たように現在のところは確認されない。ただ、現在このように記号化した軽井沢のイメージが強く存続している陰には、土地開発業者や観光業者をはじめとする企業家たちが軽井沢の持つ経済的価値を失わぬよう、意図的にイメージを操作している部分があるように思われる。

#### 注

- 1) 森 鷗外「みちの記」(初出は明治23(1890)年。  
『鷗外全集22』岩波書店, 1973より引用)。
- 2) 正岡子規「かけはしの記」(初出は明治24(1901)年。  
『子規全集13』講談社, 1976より引用)。
- 3) 例えば、山東京伝『通言總籙』に「けふ此比は、いたこやかるい沢ではやる時分、生上田ぞろいにゆかたを下夕着、～」(『日本古典文学大系59 黄表紙・洒落本集』岩波書店, 1958. p.369)とあるように、江戸時代の軽井沢宿は飯盛り女で知られたところであったが、この頃にはそれらは一軒も残っていなかった。幅(1973, p.26)、小林(1974, p.26)など。

- 4) 大町桂月「浅間山の一夜」(初出は明治30(1897)年。島崎(1985)p.25)。
- 5) 例えば、軽井沢はもともとカルイサワと澄んで読んだが、外国人が発音のしやすさからカルイザワと呼ばれるようになり、今では町名も駅名もすべてカルイザワが正式名称となっている。市川(1976)p.148。島崎(1985)p.20。
- 6) 若山牧水「旅とふる郷」(初出は明治43(1910)年。『若山牧水全集5』誠新社,1982より引用)。
- 7) 正宗白鳥「軽井沢と私」(初出は昭和33(1958)年。『正宗白鳥全集29』福武書店,1984より引用)ただし、引用の部分は明治45年を回想して書かれたもの。
- 8) 坪谷水哉「軽井沢の今昔」 太陽, 大正2(1913)年。
- 9) 大正8(1919)年の偽鈴木三重吉事件と、大正12年の有島武郎の情死事件がそのきっかけとなったといわれる。前者は浅間山に投身自殺にきた人物が、当時「赤い鳥」で有名だった鈴木三重吉の名を名乗って料理屋で豪遊し、無銭飲食で捕まった事件。この事件が縁で鈴木三重吉や「赤い鳥」の同人たちが軽井沢を訪れるようになった。後者は有島武郎が軽井沢の別荘浄月庵で波多野秋子と心中した事件。当時大ニュースとなり、作家仲間だけでなく広く日本中に軽井沢の名を知らしめた。
- 10) 芥川竜之介「軽井沢日記」(初出は大正13(1924)年。

- 『芥川竜之介全集7』岩波書店, 1978より引用)。
- 11) 室生犀星「碓氷山上之月」(初出は大正14(1925)年。  
『室生犀星全集3』新潮社, 1966より引用)。
  - 12) 川端康成「高原」(初出は昭和12(1937)年。『川端康成全集6』新潮社, 1981より引用)。
  - 13) 堀 辰雄「麦藁帽子」(初出は昭和7(1932)年。『堀辰雄全集1』筑摩書房, 1977より引用)。
  - 14) 堀 辰雄「美しい村 或は小遁走曲」(初出は昭和8(1933)年。『堀辰雄全集1』筑摩書房, 1977より引用)。
  - 15) 室生朝子『父犀星と軽井沢』毎日新聞社, 1987, 236  
ページ
  - 16) 川端康成「みづうみ」(初出は昭和29(1954)年。  
『川端康成全集18』新潮社, 1980より引用)。
  - 17) 中屋健一「軽井沢のいやらしさ」文芸春秋, 昭和33  
(1958)年8月9日号。
  - 18) 「大衆化する軽井沢 別荘人種ハラハラ」朝日新聞,  
昭和34(1959)年8月26日。
  - 19) 加瀬英明「軽井沢・夏の日本人学」諸君, 昭和46(1  
971)年10月号。
  - 20) 「軽井沢」るるぶ, 昭和62(1987)年6月号。
  - 21) このほか戦後できた「軽井沢」地名に、東軽井沢  
(群馬県松井田町)と奥軽井沢(群馬県嬭恋村)が  
あるが、地元を除くとほとんど知られていないのが  
実状である。

22) 栗本 薫「軽井沢心中」(初出は『小説現代』昭和  
54(1979)年10月号。『軽井沢ミステリー傑作選』河  
出書房新社,1986より引用)。

23) 信濃毎日新聞1987年1月5日。

## 第8章 場所イメージの記号化と都市の「風格」

### — 換喩的認識に基づく場所イメージと

### 場所イメージによる都市の評価 —

#### 1. はじめに

「都市のイメージ」といえば、リンチの有名な著書(1960)の名がおそらく思い出されるに違いない。その中でリンチは、「個々の人間が物理的外界(環境)に対して抱いている総合的な心像」を研究対象とすることを示し、この心像(イメージ)は「現在の知覚と過去の経験との両者から生まれたものであり、情報を解釈し行動を導くために用いられる」と述べているが、この考え方は、その後の環境のイメージに関する研究のひとつの出発点となった。本研究で扱う都市のイメージのとらえ方も、基本的にはこれと同じ考えに立脚しており、その点でリンチが考えていたであろう「都市のイメージ」と本研究でいう「都市のイメージ」は、本来は同じ意味であると思われる。

しかし、リンチ自身が同書の中で明らかにしているよ

うに、「この本では、アメリカの市民が彼らの都市に対して心に描いているイメージを調べることによって、アメリカ都市の視覚的な特質について考え」、「この視覚的な特質の中でも、とくに都市の眺めの外見の明瞭さあるいはわかりやすさ legibility ということに焦点をしばること」が目的とされており、文字どおり「都市のイメージ」の語で表現されるイメージの全体像を研究の対象としているのではない。それは厳密に言えば「都市の構造の視覚的イメージ」とでも呼ぶべきものであり、実際の都市の可視的構造を心の中でどのように再構成するかが問題とされている。

本研究が対象として扱う都市のイメージとは、リンチがはじめに定義した総合的なイメージのことであり、例えば東京や大阪という都市をイメージしたときに現れる心的な内容の全てを意味する。

さて、実際にいくつかの都市のイメージを思い描いてみると、かつてそこを訪れたときの光景や、雑誌やテレビなどで見て記憶していた風景が頭に浮かぶし、こうした視覚的な像のほかに、音や臭いや味といった感覚も想起されるだろう。また、その都市に関係する歴史的イベントや、その都市にゆかりの人物、さらには都市の規模や位置といった知識（概念知）なども思い出され、これらと関連する別の事項がまた連想されるという具合に、都市のイメージは複雑に構成されていく。つまり、その都市

に関するあらゆる種類の情報が、ちょうど網の目のように互いに関連し合って、都市のイメージを作り出していると考えられる。

これら都市のイメージを構成する情報の内容を、すべて対象となる都市の属性であるとみなすと、都市のイメージはその都市の持つさまざまな属性の集合体ということになり、各人（主体）の都市のイメージは、その人がどの属性をイメージの構築に用いるかによって決定される。つまり、人は都市の持つ無数の属性のうち、いくつかの限られた属性のみによって都市のイメージを作り上げていると思われるのだが、このような都市のイメージのしかたは、第4章で述べた換喩的認識の方法にほかならない。

しかも、その属性の選択の基準も条件も人によって異なる以上、各人の持つイメージは厳密にはみな異なっているはずであるが、これを多数の人について考えてみると、誰もがイメージする都市の属性と、そうではない属性のあることが十分予想される。とくに、自分自身と個人的なつながりのほとんどない都市、すなわち名前だけは知っているがほとんど行ったことがない都市、あるいは一二度行ったことのあるだけの都市、などに対するイメージは、いわゆるマスコミなどから与えられる間接的な情報から作られている割合が高く、かなり紋切り型のステレオタイプ化されたイメージであることが多くなる



であろう。とくに本研究で行うように、日本中のさまざまな都市に対するイメージを、多数の人に対して求めるような場合、都市の無数の属性のうち、その都市を最も印象づけるもの、言い替えればその都市の属性の中で最も目立っているものが、多数の人に共通する都市のイメージとして選ばれるものと思われる。

これから本研究が扱う都市のイメージとは、個人的な都市のイメージではなく、まさにそのような多数の人に共有され、いわばステレオタイプ化された都市のイメージである。リンチが扱った都市のイメージが、その都市の住民が共通して描いているイメージだったのに対し、本研究が扱う都市のイメージは、むしろその都市の住民以外の人を持つイメージが中心となる、ということもできよう。

このステレオタイプ化されたイメージを構成する都市の属性は、その都市をイメージする人々に共通に用いられるという点から、一種の記号としての働きを持つと考えられる。本研究ではそのような属性を「都市のシンボル」と呼ぶことにする。

「都市のシンボル」という語は、従来、一般に都市の個性を豊かにし、都市のよい意味でのイメージを高めるものを意味して用いられることが多かった。例えば、磯村(1976)は「都市には、何かその特徴を示すような、何らかの象徴がいつの間にか“人間”によってつくられる」

と言い、服部(1978)はシンボルを「市民によって納得された都市文化のお国自慢的・個性表現的なキャッチ・フレーズ」と定義し、その発生機構から、風土変化系・歴史印象系・現代演出系・都市理念系の4種に分類している。これに対し、本研究の言う都市のシンボルとは、社会の内部に共通な記号としての働きをもつという点から命名したもので、定義的には従来の都市のシンボルの概念を包含するかたちになり、都市にとってあまり好ましくない特徴(例えば、公害や犯罪多発など)も、その都市のイメージを規定する重要な要素となるところから、シンボルと見なす点で異なっている。

多数の人に共通する都市のシンボルの数はそう多くはなく、とくに共通なイメージを持つ集団の規模が大きくなるほど、その数は少なくなることが経験的に知られている。これはイメージに関するジップ(Zipf)の法則と呼ばれ、ある事物や図形に対して自由に思いつくことがらを多数の人に挙げさせてみると、一見、人によってひどくまちまちのようであるが、大局的にまとめると、きわめて小数の事柄(7±2の事柄)に想起の内容が集中してしまうという(Miller, 1956)。

結局、共通な都市のイメージは、ごく少数の強力な都市のシンボル(それはその都市の特徴でもある)によって再現されることになる。もちろん、こうして得られた共通な都市のイメージは、市民や国民の最大公約数のイ

メージであり、例えばそこには子どもの頃に見た風景や昔の思い出といった、人ひとりひとりが持つ個性豊かで人間味にあふれた都市のイメージはない。個人的なイメージや少数の人々にのみ共有されるイメージは、社会全体に共通するイメージではないという理由で捨象されてしまうからである。

本研究の目的の第一は、都市のイメージを社会全体に共通するイメージというレベルでとらえ、わが国のいくつかの都市のステレオタイプ化したイメージを、具体的に明らかにすることである。このレベルでの共通な都市のイメージは、社会一般の人々が関与する種々の行動や、それにとまなう地理的事象を説明する資料として最も重要であると考えられるし、物理的な存在としての都市と、各人に受け入れられた都市のイメージとの、一般的な関係に接近する手がかりともなろう。

また、本研究の第二の目的は、そのような都市のイメージを、実用的な側面、ここでは実際の都市の評価に応用することにある。社会一般に共通するイメージとしての都市のイメージは、それがわが国のほとんどの人々が共通に抱いているイメージであるという点から、イメージという非常に主観的なものでありながら、同時に、全国民に共通する判断としてある意味での客観性を帯びているという特性を持っており、イメージに基づいた都市の総合的評価に利用することができると思われる。その

一例として、ここでは都市の「風格」という概念を取り上げ、実際にわが国の都市を評価し、その結果を都市のイメージとの関連から考察する。

## 2. 都市の「風格」

従来、地理学ほか多くの分野で、都市に関するさまざまなかたちの評価が試みられてきた。都市の経済的指標に基づく評価や、マーケット（市場）としてのランキング、いろいろな指標を総合した「民力」といった概念による多角的な評価をはじめ、都市の機能による分類や、人口規模によるランクづけなども、広い意味での都市の評価であったと考えてよいであろう<sup>1)</sup>。正しい評価を行うためには、まず客観性がなければならず、これら従来の都市の評価が、人口や経済的指標などといった、きわめて数量的なデータをもとにして行われたことは当然であり、またそれが社会からの要請であったことも間違いない。このように都市を量的にランクづけするという行為自体が、戦後の高度経済成長期の都市に対する価値観を反映していたと見ることもできる。

しかし、近年、これら従来の経済的なデータのみをもとにした評価では測り得ないものを、都市に必要なものとして重視するような傾向が現れてきた。例えば、自然

環境や精神的な豊かさや「ゆとり」といったものがそうである。このような、いわば都市の量的な豊かさから質的な豊かさへの価値観の転換は、わが国の経済・社会状況の変化と密接に関係しているものと思われるが、いずれにせよ都市の質的な側面は、数量を指標とした従来の都市の評価の方法にはそぐわない性質のものである。自然環境保護を主目的とする景観評価の研究で、景観の印象といった主観的な指標を用いて評価を行った例<sup>2)</sup>などは、従来の量的な評価方法に対する反省と、新しい評価方法を探る試行としてとらえることもできよう。

確かに、地表空間はそこに生活する人間がいて、はじめて環境として意味づけられるのであるから、その環境を評価するには生身の人間を用いるのが最も適當、という見方も成り立つかもしれない。最近、企業イメージや商品イメージなどというように、とみにイメージという言葉がもてはやされているが、このイメージという言葉で表現されているものこそ、数量ではとらえにくい質的な価値なのであって、やはり最近よく耳にする都市のイメージという表現も、人間自身による都市の質的な面の認識・理解を指していると解釈することもできる。

本研究がとくに都市の「風格」という概念を取り上げる理由もそこにあり、都市の「風格」が感覚的な、イメージに基づく評価尺度であるのと同時に、この言葉で示される価値観が、今日ますます没個性化してきたといわ

れる多くの都市に対して、強く求められていると思われるからである<sup>3)</sup>。

風格という語は「風采品格」の略といわれ、その意味するところは、①人物の外見的な姿態を表す語としての風采・恰幅の意、②人物の内面的な性格を表す語として人柄・品性の意、③自然の性状に対する価値観を表す語としての情趣・風情の意、の大体三つがある<sup>4)</sup>。ふつう都市の風格という場合、③の意にあたる、自然の一部としての都市に対する評価を意味するものと思われるが、その一方、都市を擬人化して、①や②の意味で用いることも考えられる。それゆえ都市の風格の意味は、しばしば具体的に言葉では言い表しにくいものになる。しかし、例えば、

金沢に生まれ金沢に住む者にとって、能の鼓の音はなつかしい生活の響きでさえある。子どものときから、人々はおのずからに能の雰囲気になじんでいる。それは金沢という町の風格を形づくり、格調を添えているといえよう<sup>5)</sup>。

日本じゅうどこへ行っても同じような型にはまった町が多くなってくると、陸の孤島のように山奥にとり残されて、古く雅やかな風格をたもっている高山のような山都に心を魅かれるのは無理もないことだ<sup>6)</sup>。

などといった表現が日常使用されているという事実からも、都市の「風格」という概念は、少なくともわが国に

おいては、多くの人がある意味を莫然とではあるが理解しており、都市の評価に関する価値尺度として、他の言葉では置き換えられない、ある種の説得力を持つものとして認められているようである。

このように感覚的で意味のはっきりしない、風格のような語が、都市を評価する尺度として少なからず用いられているという事実は、曖昧な表現を特に好むといわれる日本人の性格と、おそらく無関係であるとは思われない。例えば、広告における日米の違いを見ると、合衆国の場合、とにかく消費者を論理的に説得しようとする広告が多いのに対して、わが国では、いわゆるイメージ広告に頼ることが多く、広告を媒介として、そのブランドの品格・趣きといったものを伝えようとするのが特色であり、そのほうがかえって説得力があるという（小林、1982, p. 57）。風格に相当する語を英語に求めた場合、うまい訳語が見つからないのも、そのあたりに理由があるのかもしれない<sup>7)</sup>。

都市の風格あるいはそれに類する概念は、都市計画方面の従来の研究の中にも散見されるが、そこでは風格の語は、都市の個性、アイデンティティ、都市の文化的センスといった意味あい、現代の都市に望まれるものとして使用されている（都市科学研究所、1978；服部・小野、1981；田村、1984；岡、1987など）。しかし、都市の風格の概念をとくに取り上げ、「風格」そのものにつ

いて論考した研究はいまのところ見あたらない。

### 3. データの収集と集計結果

本研究の目的は、第一に各都市の「風格」の評価を行うことであり、第二に各都市のイメージと都市の「風格」との関連から、「風格」の概念を明らかにすることである。

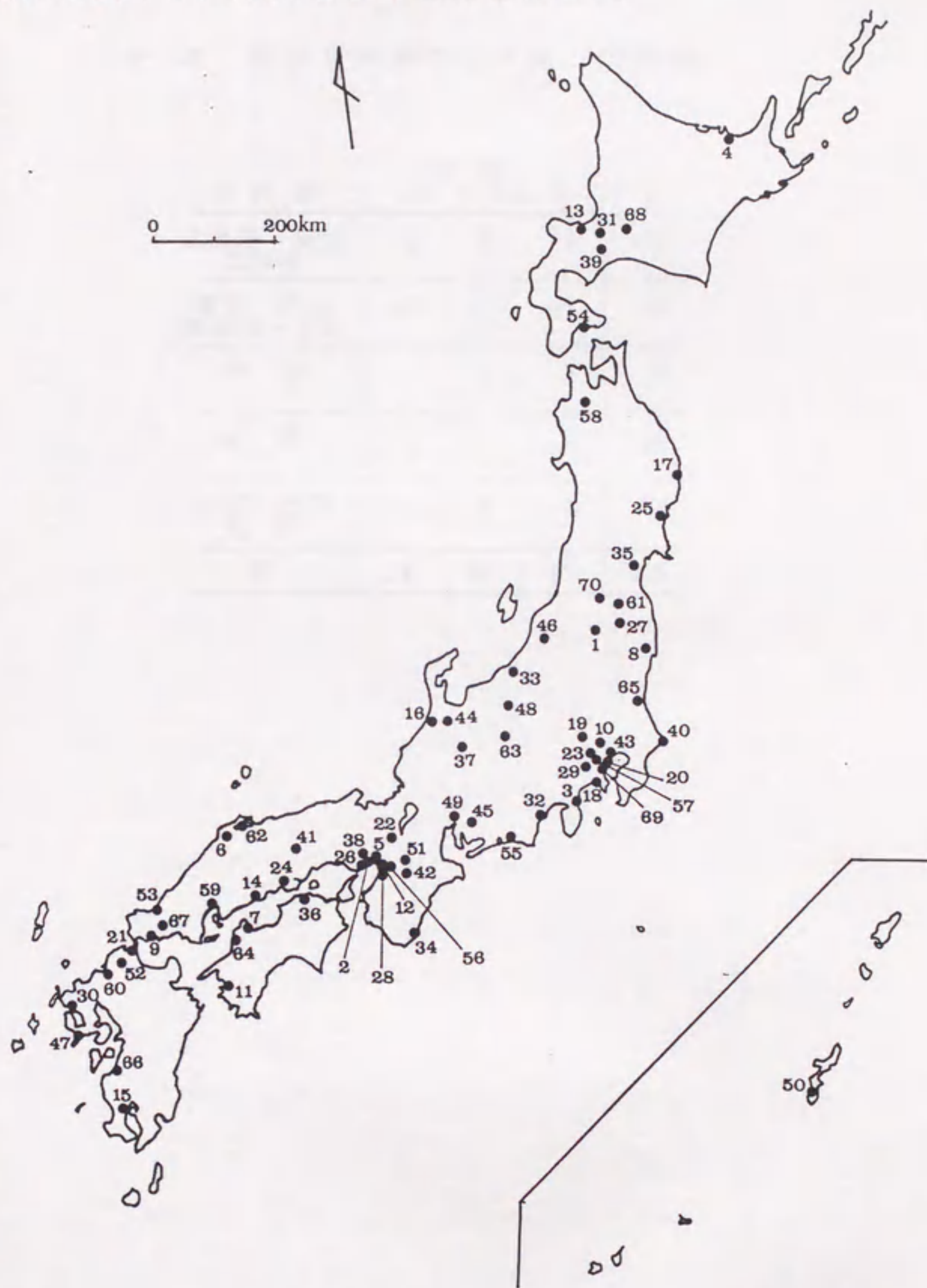
そこで、まずわが国の地理学者を対象に、都市のイメージと「風格」についてのアンケート調査を行い、各都市の「風格」の評価を実際に評価すると同時に、各都市の都市のシンボルを抽出し、これをもとに各都市のイメージを明らかにする。つぎに都市の「風格」を、都市のイメージとの関連によって分析し、回答者が理解している都市の「風格」とは、どのような概念なのかを考察する。

#### (1) データ収集の方法

本研究で用いる分析データは、筆者が1982年10月～11月に実施した”都市の「風格」についてのアンケート調査”の結果による。この調査は1982年10月現在、日本地理学会の評議員または人文地理学会の評議員・協議員を、過去3期（6年）の間につとめたことのある日本地理学



図中の数字は8-6表の各都市の番号に同じ。



8-1図 調査の対象とした70都市

8-1表 回答者の属性（年齢と居住地）

居住地	年 齢			計
	-49	50-59	60-	
北海道・東北 北関東	3	6	3	12
東京・埼玉 神奈川・千葉	14	15	17	46
中 部	1	5	5	11
近 畿	4	11	5	20
中国・四国 九 州	2	7	7	16
計	24	44	37	105

会の会員142名を対象に、わが国の都市70市<sup>\*)</sup> (8-1図) について、都市の「風格」の評価、および都市名から連想されるシンボルや特徴の記入を求めたものである。

都市の「風格」の評価は7段階評価方式により、その際都市の「風格」の語については質問文の中でいっさい定義を行わず、その解釈は全て回答者の主観に任せた。その理由は、①都市の「風格」の評価は、「風格」という語そのものによる刺激によってしか得られないこと、②都市の「風格」の定義をこちらから行うことにより、回答者の都市に対する自由なイメージの広がりを規制することを恐れたこと、③回答者が持っている都市の「風格」の概念がどのようなものであるかを知ることが、本研究の目的の一つであること、の3点に要約される。

また、都市名から連想されるシンボルや特徴については、各都市について最高五つまで書き出してもらい<sup>\*)</sup>、その表現方法についてもいっさい指定はしなかった。調査は郵送法で行い、最終的に105通(全体の約74%)の有効な回答が得られた。回答者の年齢と居住地による分布を、8-1表に示す。

ところで、この調査の回答者は全て日本の地理学者であるところから、回答者が持っている都市に関する情報は、一般の人と比べて多量かつ正確であると推測される。このことは、調査結果にある程度の信頼性を与え、回答者の情報不足から起こる無回答や、回答者の居住地など

の及ぼす影響をかなり排除できると思われる。

そこで、回答者の個人属性（データの制約上、年齢と居住地のみ）が各都市の「風格」の評価に影響を及ぼしているか否かをカイ2乗検定で判定したところ、都市によっては居住地による影響がいくらか見られたが、全体としてはほとんど個人属性による差はみられなかった。この点、回答者群の持つ都市に関する情報の均一性を、消極的にはあるが裏付ける結果となっている。ただ、回答者の居住地に近い都市は、遠くの都市に比べてN.A.数とD.K.数が少なく、川越・国立が東京に住む人に高く評価され、萩・鹿児島・那覇が西日本に住む人に高く評価される傾向があるなど、わずかではあるが、いくつかの都市では回答者の居住地の影響らしきものも見られた。このことから予想されるように、かりに一般の人々に対して同様の調査を行うならば、おそらく回答者の居住地・年齢・学歴・職業などといった個人属性に影響される都市についての情報の差異により、都市の「風格」の評価パターンはかなり大きな影響を与えられるのではないかと推測される。

## （2）都市の「風格」の評価

8-2図は、全回答者の各都市に対する「風格」の評価を図示したもので、都市の「風格」評価の評点を-3・-2・-1・0・+1・+2・+3の7段階の数値に置き換え、平均 $\bar{x}$ と標準偏



8-2図 70都市の「風格」の評価

差 $\sigma$ を求め、平均の高い都市から順に並べて示してある<sup>10)</sup>。この図によれば、回答者たちの「風格」の評価は、京都・金沢・奈良・鎌倉といった都市に共通して高く、逆に尼崎・水俣・東大阪などの都市に低い。東京・大阪などの例外を除くと、一般に評価の高い都市ほど評価のバラツキが小さいという傾向があり、各都市の $\bar{x}$ と $\sigma$ との間の相関係数は-0.49（有意水準0.1%以下で有意）で、有意な負の相関が認められる。

その一方で、東京・大阪・名古屋といった大都市、豊田・宇部・川崎といった鉱工業都市、出雲・新宮・気仙沼といった地方都市、国立・川越・浦和といった近郊衛星都市には、回答者による評価の違いが大きい。これを回答者側の評価パターンの差異という点からみると、東京・大阪・名古屋・横浜・札幌・神戸・広島などの大都市、および北九州・川崎・釜石・豊田・浜松・郡山などの産業都市に対して、「風格」を高く評価する回答者グループと、逆に低く評価する回答者グループのあることが明らかとなる<sup>11)</sup>。ところが、これを京都・金沢・奈良などの都市について見ると、どちらのグループの回答者も一様に「風格」を高く評価しており、その間の差異はほとんど見られない。つまり「風格」の評価の個人差は、全ての都市に対して見られるのではなく、大都市や産業都市のような一部の都市の評価に際してのみ現れるのである。

このような評価パターンの差異は、回答者たちのこれらの都市に関する知識からみて、二つの回答者グループが東京や大阪についてまったく違った情報を持っていたからだとはいえにくい。現に回答者がこれらの都市に対して挙げた都市のシンボルもまったく共通している。すると、この評価パターンの差異は、回答者の「風格」観とでもいふべき、都市に対する価値観の違いに帰せられるべきであろう。この問題は都市の「風格」の定義と深くかかわる問題で、都市の「風格」がどのようにして評価されているのかということに関係するので、次節の分析で詳しく考える。

### (3) 都市のシンボル

一方、アンケート調査の結果、都市名から連想されるものや特徴として挙げられた各都市の属性（都市のシンボル）を見ると、固有名詞から抽象名詞、形容詞まで多岐にわたり、都市の持つ属性とその表現の多様さを感じさせる。得られたシンボルの延べ総数は7,854(1都市あたり延べ112.24)になり、その中には「ブロック中心都市」・「トンボロ」・「(各地の)大学」のように、回答者群の特殊性を反映した用語も見られたが、とくに出現頻度の高いものについては、一般の人が考える内容と大差はないと思われる。

シンボルの種類については、「城」と「城下町」、

8-2表 70都市のシンボル

都 市	象 徴 要 素
1 会津若松	城78.8, 白虎隊・飯盛山・戊辰役67.3, 会津塗・伝統工芸34.6
2 芦 屋	(高級)住宅84.9, 芦屋夫人・上流家庭15.1
3 熱 海	温泉84.6, 観光・ホテル38.5, 金色夜叉・お宮の松34.6, 海・錦ヶ浦15.4
4 網 走	刑務所71.2, オホーツク海・流氷65.4, 原生花園36.5, 漁港・港17.3
5 尼 崎	工業77.4, 公害・地盤沈下60.4
6 出 雲	大社・門前町77.4, 散村・築地松15.1, 神話・歴史13.2
7 今 治	タオル・地場産業69.8, 港・フェリー26.4, 来島海峡・瀬戸内海11.3
8 いわき	石炭・炭鉱39.6, 広域・合併・非核都市26.4, 工業24.5, ハワイアンC.・温泉17.0
9 宇 部	工業・コンビナート46.2, 炭鉱・石炭40.4, セメント26.9, 宇部興産15.4, トキワ公園11.5
10 浦 和	住宅・衛星都市62.3, 県庁32.1, 特急のとまらない県都13.2
11 宇和島	城59.6, 斗牛32.7, みかん25.0, 階段耕作25.0, 黒潮・海・海中公園21.2, (漁)港13.5
12 大 阪	商業56.6, 城41.5, 川・橋・水都26.4, 道頓堀22.6, 工業20.8, 中之島11.3
13 小 樽	港71.2, 運河46.2, 小樽高商・商大19.2, 小林多喜二13.5, 倉庫群・町並13.5, 漁港13.5
14 尾 道	瀬戸内海・水道41.5, 港30.2, 寺・千光寺26.4, 坂17.0
15 鹿 児 島	桜島79.2, 西郷隆盛34.0, 城山24.5, 城17.0, 南國的15.1, しらす・火山灰13.2
16 金 沢	兼六園64.2, 城64.2, 百万石22.6, 町並18.9, 伝統工芸・金箔・友禅・九谷焼18.9
17 釜 石	製鉄60.4, 漁業18.9, 新日鉄11.3
18 鎌 倉	八幡宮34.0, 大仏30.2, (高級)住宅30.2, 古都22.6, 湘南・江ノ島20.8, 観光15.1
19 川 越	城30.8, 土蔵30.8, さつま芋25.0, 川越街道・宿場17.3, 寺社・喜多院15.4
20 川 崎	工業78.8, 公害38.5, 川崎大師21.2
21 北九州	八幡製鉄所・新日鉄・製鉄49.1, 工業45.3, 合併15.1, 若戸大橋13.2
22 京 都	寺社40.4, 古都36.5, 伝統産業・西陣・友禅30.8, 京大・大学28.8, 祭り15.4, 観光15.4, 鴨川13.4
23 国 立	一橋大・音大・文教都市84.9, 住宅・衛星都市47.2, 都市計画・街路13.2
24 倉 敷	土蔵造り・町並・水路・美観地区78.8, 大原美術館67.3, 水島コンビナート・工業44.2, クラレ・倉紡・紡績32.7, 観光11.5
25 気仙沼	漁港・漁業78.8, リアス式海岸・三陸海岸40.4, のり・かき・養殖13.5
26 神 戸	港75.5, 六甲山47.2, 異人館・異国情緒41.5, ポートアイランド18.9
27 郡 山	工業・紡績37.7, 安積疎水17.0, 交通中心15.1
28 堺	中世・自由都市・南蛮貿易・鉄砲・納屋衆・朱印船55.8, 工業・コンビナート51.9, 刃物17.3
29 相模原	住宅・衛星都市39.6, 基地・軍都18.9, 工場17.0, 台地13.2
30 佐世保	軍港・軍都60.4, 造船41.5, 港15.1, 九十九島・西海13.2
31 札 幌	北大・ポプラ並木55.8, 時計台42.3, 計画都市・蒼盤街路32.7, 北海道の中心23.1, 大通り19.2, 道庁17.3, 雪まつり17.3, ビール11.5
32 静 岡	城40.4, 茶38.5, 登呂遺跡26.9, 徳川15.4, 久能山15.4, みかん13.5
33 上 越	雪41.5, 城17.0, 雁木17.0, スキー13.2, 合併11.3
34 新 宮	木材57.7, 熊野川30.8, 神社・門前町25.0
35 仙 台	城73.1, 大学34.6, 七夕祭32.7, 杜の都30.8, 東北の中心23.1, 伊達氏17.3, 広瀬川11.5

数字は全回答者に対する出現%



8-2表 (つづき)

都 市	象 徴 要 素
36 高 松	栗林公園57.7, 城34.6, 宇高連絡船34.7, 屋島26.9, 四国の玄関23.1
37 高 山	伝統工芸・春慶塗・飛騨の匠53.8, 町並・民家42.3, 高山祭・山車34.6, 観光17.3, 小京都15.4, 飛騨の中心13.5, 朝市13.5
38 宝 塚	(少女)歌劇83.0, 住宅37.7, 温泉18.9, 阪急15.1, レジャー11.3
39 千 歳	空港92.5, 自衛隊・基地15.1
40 銚 子	漁港・漁業86.5, しょうゆ34.6, 犬吠碕32.7, 利根川28.8, 灯台19.2
41 津 山	城49.1, 盆地18.9, 中国自動車道11.3
42 天 理	天理教67.3, 宗教都市36.5, 天理大・図書館23.1
43 東 京	皇居45.3, 首都43.4, 大都市18.9, 新宿17.0, 官庁街13.2, 銀座11.3
44 砺 波	散村・屋敷森73.6, チューリップ26.4
45 豊 田	自動車(工業)58.0, トヨタ26.4, 企業城下町20.8
46 長 岡	雪23.1, 融雪パイプ19.2, 城15.4, 信濃川11.5, 雁木11.5, 工業11.5, 河井継之助・北越戦争11.5
47 長 崎	港43.4, 造船39.6, 原爆34.0, 坂30.2, グラバー邸18.9, 天主堂17.0, 観光15.1, 災害15.1
48 長 野	善光寺82.7, りんご32.7, 門前町23.1, 県都15.4
49 名古屋	城67.3, 街路・100m道路・都市計画50.0, 中京17.3, 熱田11.5
50 那 覇	首里城・守礼門32.7, 基地・米軍32.7, 大戦・沖縄戦19.2
51 奈 良	東大寺・大仏58.5, 古都37.7, 平城京24.5, 鹿22.6, 春日山・春日大社22.6, 観光15.1
52 直 方	炭坑57.7, ポタ山25.0, 遠賀川13.5, 閉山・失業11.5
53 萩	城69.2, 夏みかん26.9, 武家屋敷25.0, 松下村塾25.0, 萩焼21.2, 吉田松陰11.5, 観光11.5
54 函 館	五稜郭51.9, 青函連絡船40.4, 陸警島・トンボロ30.8, 漁港25.0, 函館山19.2, トラビスト17.3, 港17.3, 北海道の玄関15.4, 啄木13.5, 夜景13.5
55 浜 松	楽器・ピアノ60.4, バイク24.5, 浜名湖22.6, 工業18.9
56 東大阪	工業・町工場23.1, 住宅・衛星都市19.2
57 東久留米	住宅・団地・衛星都市54.7
58 弘 前	城92.5, りんご50.9, 桜22.6, 大学・文教17.0, 岩木山15.1
59 広 島	原爆61.5, 太田川・デルタ46.2, 平和公園・原爆ドーム36.5, 広島カープ21.2, 東洋工業17.3, かき15.4, 城11.5, 宇品11.5, 中国の中心11.5
60 福 岡	九州の中心25.0, 中州21.2, 博多17.3, 博多人形17.3, どんたく13.5, 九大11.5
61 福 島	果樹26.9, 県都21.2, 阿武隈川13.5, 城11.5, 飯坂温泉11.5
62 松 江	宍道湖・湖75.0, 城51.9, 小泉八雲38.5, 水(の都)13.5
63 松 本	城77.4, 日本アルプス54.7, 登山基地11.3, 文教・大学11.3
64 松 山	城73.6, 温泉62.3, 坊っちゃん・漱石45.3, 県庁15.1, 子規・俳句15.1
65 水 戸	偕楽園47.2, 城28.3, 水戸黄門26.4, 梅20.8, 県庁13.2
66 水 俣	水俣病・公害80.8, チッソ23.1, 工業23.1
67 山 口	ザビエル聖堂・ザビエル26.9, 県都19.2, 温泉17.3, 中世都市・大内氏13.5, 城11.5
68 夕 張	石炭・炭坑88.7, 斜陽・閉山・失業・かわいそう20.8
69 横 浜	港78.8, 外人墓地34.6, 中華街32.7, 山下公園15.4, 工業11.5
70 米 沢	城43.4, 織物35.8, 上杉鷹山・上杉氏24.5

「工場」と「工業」などを同様のイメージを示すとみなすか否か、さらに同じ「城」という回答でも、回答者のイメージするところは果たして同じか、などは難しい問題だが、ここでは以下で行う分析への便宜も考慮して、同種のイメージに基づくとみられる類似の語は、それらを包含する、より広い概念の属性としてまとめた。その結果、一つの都市について全回答者の10%以上が共通して挙げた都市のシンボルを、一応回答者に共通なイメージの要素とみなした。8-2表は、こうして得られた都市のシンボルの一覧である。

出現頻度のとくに高いシンボルとしては、千歳の空港（回答者の92.5%が回答。以下同じ）・夕張の石炭（88.7%）・国立の大学（84.9%）・芦屋の高級住宅（84.9%）・熱海の温泉（84.6%）・宝塚の少女歌劇（83.0%）・水俣の公害（80.8%）などがあるが、一方シンボルの種類の少ない、つまりは都市のイメージが単純である都市を挙げてみると、芦屋・尼崎・千歳・磯波・東大阪・東久留米・水俣・夕張という都市が並び、先に挙げた頻度のとくに高いシンボルを持つ都市と共通するものが多い。また、このように単一の強いイメージでとらえられている都市は、一般に延べシンボル数も少なく、都市の「風格」の評価にもN.A.数やD.K.数が多い、という傾向が強い。

逆にシンボルの数や種類が豊富な、言い替えれば多様

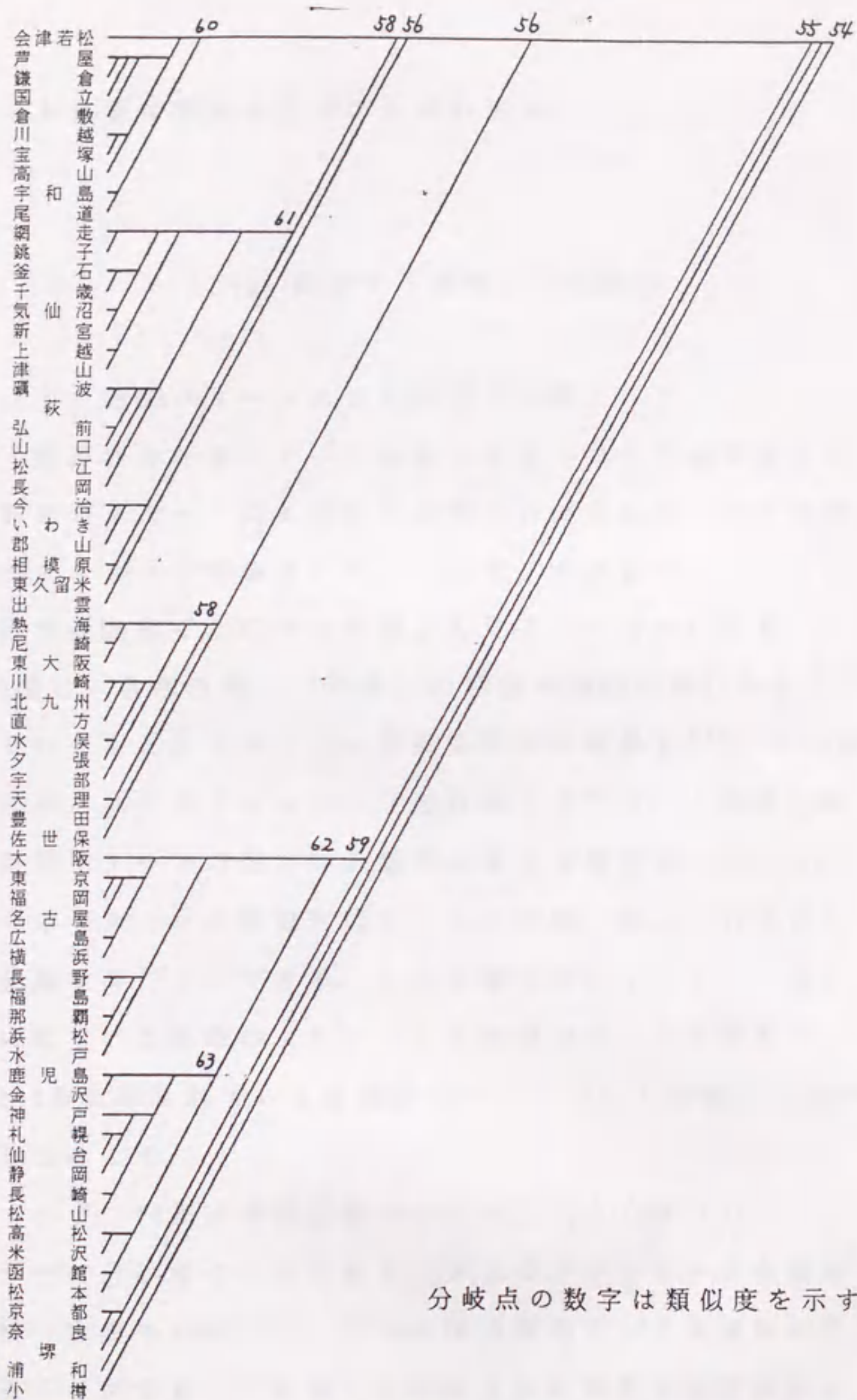
なイメージを持つ都市には、宇和島・大阪・小樽・鹿児島・鎌倉・京都・札幌・静岡・仙台・高山・東京・長岡・長崎・奈良・萩・函館・広島・福岡などがあり、これらの都市は延べシンボル数も多く、明らかに「風格」の評価の高い都市が多い。各「風格」評価の平均 $\bar{x}$ と延べシンボル数との間には有意な正の相関 ( $r = 0.685$ ) が、 $\bar{x}$ とN.A.数・D.K.数との間には有意な負の相関 ( $r = -0.687$ ) があり、これらのことから、イメージの乏しい都市や単一のイメージしか持たぬ都市は概して「風格」が低く、多様なイメージを持つ都市は「風格」が高く評価されていることがわかる。

さらに興味ある点として、これら共通する都市のシンボルの中に、その都市の市域外の広範な地域に関する事物が挙げられている場合のあることが指摘できる。例えば「桜島」(鹿児島)・「日本アルプス」(松本)といった山岳、「原生花園」(網走)・「三陸海岸」(気仙沼)といった周辺の自然観光地、「茶」(静岡)・「りんご」(弘前・長野)といった農産品がそうである。これらのシンボルは、都市の風景の一部としてイメージされていたり、その都市を中心(結節点)とした後背地のシンボルが、都市のシンボルとしてみなされていると考えることによって理解できる。実際には出雲市の市域にはない「出雲大社」を、少なくとも77.4%の人が出雲市のイメージのなかに見ていることは、その典型であると

いえる。

また、「金色夜叉」・「坊ちゃん」・「小泉八雲」・「小林多喜二」のように、作家や文学作品が都市のシンボルとしてよく登場してくるのも、特徴の一つである。このことは小説をはじめとする文学作品が、その作品の舞台となる都市（場所）のイメージと密接な関係を持っていることを示すと同時に、著名な文学作品が都市のイメージに与える影響も、決して無視できないことを示している。因みに、わが国の都市の中で文芸作品の舞台としてよく用いられている都市は、東京・金沢・神戸・鎌倉・奈良・京都・札幌・福井・広島・長崎といったところで、いずれも都市のシンボルが豊富で、都市の「風格」の評価が高い都市ばかりである<sup>12)</sup>。なお、それぞれの都市を舞台とした文学作品の数と、都市の「風格」の平均値との間には、有意な正の相関（ $r = 0.56$ 。有意水準0.1%以下で有意）が認められた。

また、共通する各都市のシンボルの多くはその都市を代表する観光名所であり、「風格」に関しても、高く評価された都市の多くは観光地としても著名な都市である場合が多い。これは観光行動（とくに見学観光）の目的となるべき人目を引く対象物が、その本来の性質から当然都市のシンボルとなる一方、観光にまつわる場所はしばしばよく宣伝され、情報量が多くなりやすいからであり、都市のイメージや「風格」が、観光資源という面か



分岐点の数字は類似度を示す

8-3 図 評価パターンによる都市のクラスター分析の結果

らも重要な意味を持つことがわかる。

#### 4. 都市の「風格」の分析

##### (1) 評価パターンによる都市の分類

回答者の評価パターンの違いによって、評価の異なる都市のグループのあることはすでに述べたが、ここではクラスター分析を用いて、「風格」の評価パターンの特徴を各都市ごとにさらに詳しく見ていくことにする。8-3図は、各都市間の「風格」の評価の順位相関行列を求め、それをもとにクラスター分析を行った結果で<sup>13)</sup>、この図に示された各クラスター（樹枝状の束）は、「風格」の評価パターンの似ている都市によって構成されており、そのパターンの類似性によって、対象となった70都市を分類することができる。これら都市のクラスター（互いに似ている都市のグループ）の評価パターンの類型を、8-2表に示されている各都市のイメージにしたがって解釈してみよう。

まず、70都市は類似度56の線で、大きく3つのクラスターに分けることができる。第1のクラスターは会津若松～出雲の30都市で、全体に地方都市という共通性を見ることができ、「風格」の評価では中程度の都市が多く含まれる。第1クラスターはさらに会津若松～尾道、網

走～東久留米、出雲の3グループに分けることができる。

会津若松～尾道のグループは、会津若松・倉敷・高山・宇和島・尾道といった地方都市と、芦屋・鎌倉・川越・国立・宝塚の近郊都市の10都市からなる。前者は全て観光都市としても知られる、地方都市の中でも独特の個性を持った都市で、後者も大都市近郊の都市の中では、個性的なはっきりしたイメージを持つ都市ばかりであり、ともにその他の地方都市や近郊都市と比べ、概して「風格」の評価が高いという点でも共通している。

網走～東久留米のグループは、網走・銚子・釜石・千歳・気仙沼・新宮・砺波といった純地方的な都市、上越・津山・萩・弘前・山口・松江・長岡といった旧城下町、今治・いわき・郡山の地方産業都市、相模原・東久留米の近郊都市よりなる。網走～砺波は70都市のなかでも最も地方的な都市の一群であり、農業あるいは漁業のイメージが全体に共通しており、「風格」の評価も中から中の下で一定している。

旧城下町は、このクラスター分析の結果では、いろいろなクラスターに分散しており、必ずしも旧城下町というカテゴリーで評価されているのではないことを示しているが、ここに出てくる上越～長岡の7都市は、いずれもかつては広い地域の中心地であった旧大城下町であり、今日では衰退気味、あるいは近代以降あまり発展を見なかった都市である点が共通する。今治～郡山は、産業都

市としてのイメージが強いが、いずれも旧城下町であり、次に出てくる第2クラスターの諸都市と比べると、より地方中心地的・地方都市的である点が異なる。「風格」の評価もそのぶん高くなっている。相模原・東久留米は、ともに東京のベッドタウンとしてのイメージが強いが、

しかし芦屋や国立のような高級・整然としたイメージはない。出雲市は一つだけ他のクラスターから離れているが、地方都市的なイメージが共通するため、ここでは第1クラスターに分類した。

第2クラスターは熱海から佐世保までの12都市で、すべて単一的なイメージを持つ点で共通しており、その大部分は「炭坑」・「工業」・「公害」といったイメージでとらえられている鉱工業都市からなる。総じて最も「風格」の評価の低い都市群であるが、この中では天理・豊田・佐世保は「風格」の評価が高いほうで、主要業種も自動車・造船といった組立工業であり、それはイメージにも表されている。

注目すべき点は、多くの鉱工業都市に混じって熱海と天理がこのクラスターに入っていることであろう。熱海は温泉観光地として、天理は宗教都市としてイメージされているが、そのイメージは熱海の「俗悪」・「人工城」、天理の「おちば」・「親里」・「特殊地域」といったシンボルが挙げられるように、例えば京都や奈良のような観光都市・宗教都市とは異なり、それはむしろ「公害」

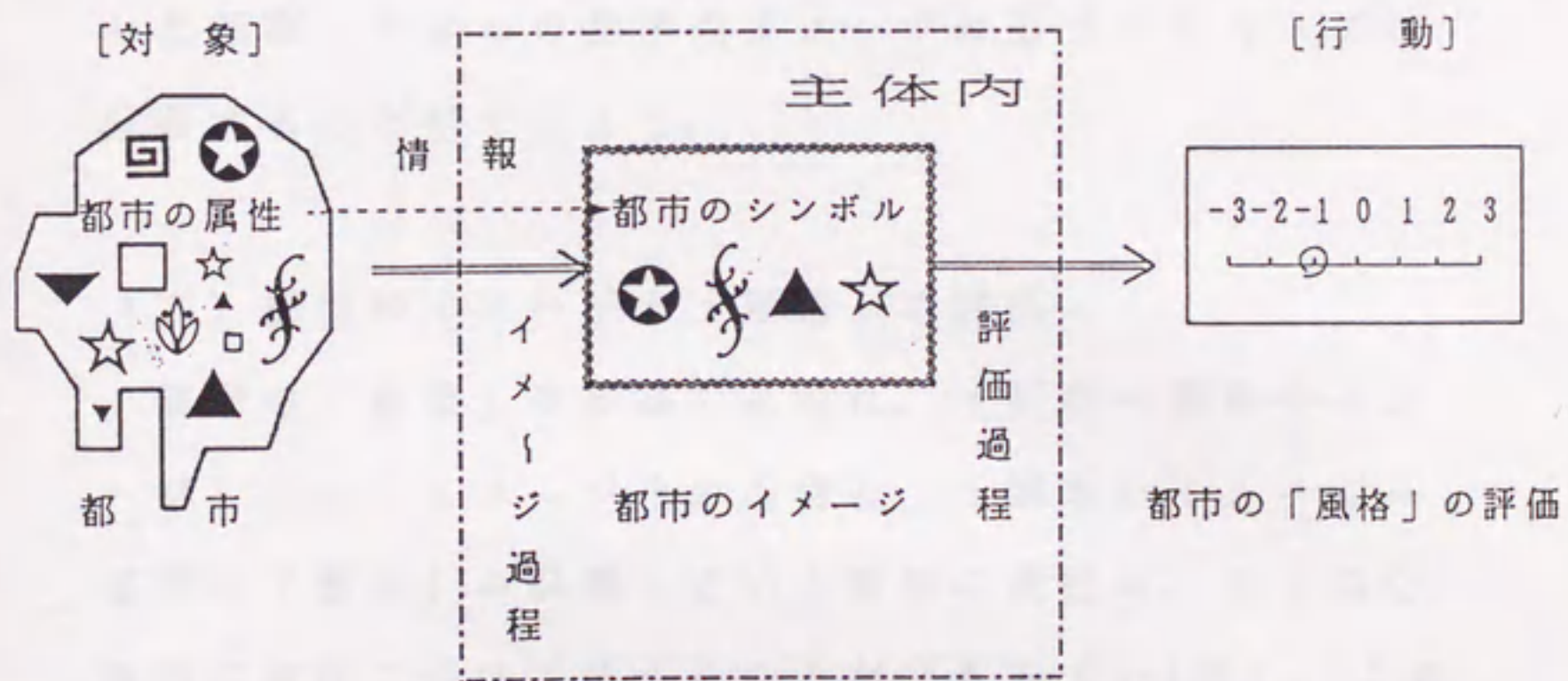


の尼崎や、「企業城下町」の豊田のイメージに近いようである。

第3のクラスターは、大阪～堺の26都市からなる。このクラスターのうち、大阪～松本の23都市は比較的近い関係にあり、なかでも大阪・東京・福岡・名古屋・広島・横浜の、いわゆる大都市や広域中心都市は非常に評価パターンが似ている。この6都市に長野・福島・那覇・浜松・水戸の5都市が加わって一つのグループを形成しているが、これらの地方都市は、例えば会津若松・宇和島・気仙沼などと違って、行政的・経済的な力も大きく、より都市的なイメージを持っている。ただし、次のグループと比べると、「風格」の評価では一步劣る。

鹿児島～松山および高松～松本のグループは、いずれも多くの人に共通して「風格」が高く評価されている都市であり、旧城下町や港町といった強い個性に加えて、現在も県都や県の副次的中心として実力を備えている都市が多い。「風格」の平均値ではほぼ同様に思われる第1クラスターの会津若松～尾道や萩・松江などとは、明らかに評価パターンが異なっている。

また、百万都市の神戸・札幌とそれに準ずる仙台が、大阪・東京・福岡・名古屋・広島・横浜の6大都市とは異なり、評価パターンはむしろ静岡・長崎・松山・金沢・鹿児島といった都市に近い点にも注目すべきであろう。また、残る大都市のうち北九州と川崎は、第2クラスタ



8-4図 都市の「風格」評価の図式

一にあって直方・宇部・水俣といった鉱工業都市に近い評価パターンを示し、京都は次に示すように、また別のパターンとなっている。

京都・奈良・堺は、いずれも古代・中世の都市という点で評価パターンが共通しているが、「風格」の評価の面では京都・奈良がほぼ全回答者について高いのに対し、堺は評価のばらつきが大きい。これは堺に歴史都市としてのイメージの他に、工業都市としてのイメージがあることと関係している。

以上の3つのクラスターのいずれにも含まれない都市として浦和と小樽があるが、今回評価の対象とした70都市は、「風格」の評価パターンから、①地方的な都市、②鉱工業都市（単一機能都市）、③都市的な機能の充実した都市、の3つの都市のイメージに基づくグループに分類することができよう。

## （2）都市のイメージと「風格」の関係

都市の「風格」の評価の過程は、[都市→都市のイメージ]というイメージ化の過程と、[都市のイメージ→都市の「風格」の評価]という評価の過程の、2つの心理的な過程に分けて考えることができる（8-4図）。このうち前者における個人差が主として回答者の持つ情報の差異により左右されるのに対し、後者での個人差は回答者の持つ評価尺度の差異に基づくもので、それは都市の

8-3表 特定のシンボルの記入の有無による

評価の差についてのt検定の結果

都市	シンボル記入の有無	ケース数 N	平均	σ	自由度νと 学生t値	有意水準5%での 帰無仮説の判定
芦屋	「高級住宅地」あり	33	4.636	0.731	ν=42	棄却
	「高級住宅地」なし	11	4.545	0.782	t=0.352	
尼崎	「公害」あり	20	1.250	0.698	ν=43	棄却
	「公害」なし	25	1.440	0.898	t=0.776	
浦和	「県都」	6	2.000	0.816	ν=30	棄却
	「住宅地」	16	2.813	1.223	t=1.519	
倉敷	「コルナート」あり	22	4.909	0.848	ν=45	棄却
	「コルナート」なし	25	4.840	0.731	t=0.300	
堺	「歴史都市」	6	3.167	1.213	ν=11	棄却
	「工業都市」	7	2.857	0.990	t=0.516	
松江	「小泉八雲」あり	17	4.882	0.582	ν=44	棄却
	「小泉八雲」なし	30	4.767	0.616	t=0.598	
松山	「文学」あり	27	4.444	0.685	ν=51	棄却
	「文学」なし	26	4.269	0.857	t=0.823	
水俣	「公害」あり	20	1.350	0.654	ν=26	棄却
	「公害」なし	8	1.625	0.696	t=0.988	
夕張	「失業・事故」あり	10	1.300	1.100	ν=37	棄却
	「失業・事故」なし	29	1.345	1.123	t=0.110	

「風格」の概念に関わるものである。すでに述べたように、回答者の年齢や居住地による「風格」の評価への影響がほとんどない点や、今回のアンケート調査の回答者がすべて地理の専門家であるという点から考えても、それぞれの回答者が持っている都市についての情報に、「風格」の評価に影響を与えるだけの差異があるとは考えにくい。しかし、都市名から連想されるシンボルの記入数には個人差があり、出現頻度の高い都市の属性でも、必ずしも回答者全員が挙げているわけではないので、もし都市の属性の記入の有無が、その人の「風格」の評価に反映されているならば、これらの都市の属性を回答者に共通するイメージの要素とみなして、共通なイメージを推測する手がかりとする事はできないことになる。

そこで、いくつかの都市について特定の都市の属性を挙げた回答者グループと、挙げなかった回答者グループとの間で、「両グループの間には、「風格」の評価に差が見られる」とする帰無仮説を設け、ステューデントのt値によって検定した。検定に用いた都市とその属性の組み合わせは、「芦屋と高級住宅地」、「尼崎と公害」、「浦和と県都」、「倉敷とコンビナート」、「堺と歴史都市」、「松山と文学」、「松江と文学」、「水俣と公害」、「夕張と失業・事故」の9組である。その結果は8-3表に示すとおり、都市の属性の調査表への記入の有無と「風格」の評価との間には関係があるとする帰無仮

8-4表 都市のシンボルの有無による分散分析の結果

変数の有無	都市の数	平均	標準偏差	F 値	有意水準
城	無	50	0.35	10.61	0.0018
	有	20	1.22		
鉦工業	無	51	1.00	40.16	0.0000
	有	19	-1.14		
県都	無	55	0.45	5.62	0.0206
	有	26	1.17		
観光	無	61	0.49	5.74	0.0196
	有	9	1.38		
住宅地	無	62	0.66	5.74	0.2405
	有	8	0.18		
歴史シンボル	無	39	-0.03	54.75	0.0000
	有	31	1.40		
伝統・文化	無	51	0.29	20.79	0.0000
	有	19	1.45		
港	無	63	0.55	1.80	0.1846
	有	7	1.12		
公害	無	66	0.71	16.04	0.0002
	有	4	-1.29		
自然シンボル	無	44	0.55	0.33	0.5677
	有	36	0.70		
不況・失業	無	66	0.69	7.83	0.0067
	有	4	-0.79		
農林業	無	63	0.56	0.83	0.3652
	有	7	0.96		
漁業	無	62	0.66	1.27	0.2645
	有	8	0.20		
軍事・基地	無	66	0.66	3.82	0.0548
	有	4	-0.39		
文教・大学	無	59	0.45	8.91	0.0039
	有	11	1.45		

説は有意な水準で全て棄却された。すなわち、各回答者レベルでの都市の属性の調査表への記入の有無は、その回答者の都市のイメージの内容とあまり関係がなく、少なくとも10%以上の回答者が共通して挙げた都市の属性については、それを挙げなかった回答者の大部分も、同様のイメージを持っているものと考えることができる。

そこで、つぎに8-2表に掲げられた都市のシンボルを回答者群に共通する都市のイメージを示すものとみなして、各都市のイメージと「風格」の評価との関係から、都市の「風格」の評価に強く影響を及ぼしている都市のイメージを選び出してみることにする。8-4表は都市のシンボルのうち、複数の都市に共通して見られるものを選び、そのシンボルの有無を独立変数に、各都市の「風格」の評価の平均を従属変数として分散分析を行い、特定のシンボルの有無により「風格」の評価に差があるか否かを検定した結果を示したものである。これによると「城」・「鉱工業」・「歴史シンボル<sup>14)</sup>」・「伝統・文化」・「公害」・「不況・失業」・「文教・大学」・「県都」・「観光」といったシンボルの有無による評価の差異が、高い有意水準で認められ、とくに「歴史シンボル」・「鉱工業」・「伝統・文化」・「公害」の各シンボルは「風格」の評価に強い影響力を持つことが推測される。一方、「自然シンボル」・「農林業」・「漁業」のシンボルの有無はあまり「風格」とは関係のないことがわか

った。

さらに、これらのシンボルの有無による「風格」の評点の比較から、「歴史シンボル」・「伝統・文化」・「城」・「文教・大学」・「観光」・「県都」といったシンボルの存在が「風格」の評価に対してポジティブに働くのに対し、「鉱工業」・「公害」・「不況・失業」の各シンボルは、逆に都市の「風格」を低くするように働くことがわかる。

### (3) 都市の「風格」の意味

前段において、都市の「風格」を左右していると思われるいくつかの都市のシンボルを選び出すことができたが、これらのシンボルは、必ずしもすべて同次元の都市の評価系列に由来するものとは思われない。そこには「歴史シンボル」・「伝統・文化」・「城」に共通する都市の歴史的な側面と、「鉱工業」・「県都」などにみられる、都市の機能的または規模的な側面の、少なくとも2つの異なる次元に基づく評価系列があると考えられる。クラスター分析による都市の評価パターンによる分類の結果にも、やはり同様の傾向が現れていた。

翻って、風格という語自体の持つ意味について考えてみると、都市の風格という場合、自然の風景としての趣きを指す、環境の審美的評価の意味と、人物の外見および内面に関する評価のアナロジーとしての、都市の総合



8-5表 数量化理論 I 類の結果

変数	カテゴリー	都市数	数値
第1変数 都市歴史分類	1. 古代・中世の政治中心	3	1.16
	2. 城下町	32	0.22
	3. 港町・宿場町	11	0.12
	4. その他の歴史的都市	5	-0.17
	5. 非歴史的都市	19	-0.57
第2変数 都市規模機能分類	1. 大都市	8	0.78
	2. 県都	16	0.44
	3. 地方都市	18	0.03
	4. 鉱工業都市	15	-1.15
	5. 住宅・衛星都市	6	0.22
	6. その他の都市	7	0.29

8-6表 70都市の「風格」の推定値と計測値

都 市	推定値	計測値	差異	都 市	推定値	計測値	差異
1 会津若松	0.85	1.45	-0.60	36 高 松	1.26	1.22	0.04
2 芦 屋	0.25	1.52	-1.27	37 高 山	0.85	1.74	-0.88
3 熱 海	0.33	-0.51	0.84	38 宝 塚	0.25	0.62	-0.38
4 網 走	0.06	-0.63	0.70	39 千 歳	0.33	-0.84	1.17
5 尼 崎	-0.33	-1.54	1.21	40 銚 子	0.75	-0.25	1.00
6 出 雲	0.47	0.79	-0.32	41 津 山	0.85	1.04	-0.19
7 今 治	-0.33	0.10	-0.43	42 天 理	0.73	0.65	0.08
8 い わ き	-0.33	-0.17	0.34	43 東 京	1.59	1.24	0.35
9 宇 部	-1.12	-0.59	-0.52	44 砺 波	0.47	0.17	0.30
10 浦 和 島	1.16	-0.31	1.47	45 豊 田	-0.33	-0.48	0.15
11 宇 和 島	0.85	0.95	-0.10	46 長 岡	0.85	0.34	0.51
12 大 阪	1.49	0.91	0.58	47 長 崎	1.16	1.96	-0.80
13 小 樽	1.33	1.25	-0.93	48 長 野	0.87	1.38	-0.50
14 尾 道	1.01	1.50	-0.49	49 名 古 屋	1.59	1.00	0.59
15 鹿 児 島	1.26	1.55	-0.29	50 那 覇	1.26	0.35	0.91
16 金 沢	1.26	2.34	-1.08	51 奈 良	2.20	2.09	0.12
17 釜 石	-1.12	-0.47	-0.64	52 直 方	-1.12	-1.54	0.42
18 鎌 倉	1.98	2.01	-0.03	53 萩	0.85	1.98	-1.13
19 川 越	0.85	0.86	-0.01	54 函 館	0.33	1.33	-1.00
20 川 崎	-0.43	-1.30	0.87	55 浜 松	0.75	0.08	0.67
21 北 九 州	-0.33	-0.78	0.45	56 東 大 阪	-1.12	-1.54	0.42
22 京 都	2.54	2.63	-0.19	57 東 久 留 米	0.25	-0.84	1.09
23 国 立	0.25	1.03	-0.78	58 弘 前	0.85	1.49	-0.64
24 倉 敷	-0.43	1.80	-2.23	59 広 島	1.26	0.39	0.86
25 気 仙 沼	0.46	0.02	0.45	60 福 岡	1.59	1.19	0.40
26 神 戸	1.49	1.87	-0.38	61 福 島	1.26	0.39	0.87
27 郡 山	-0.43	-0.18	-0.25	62 松 江	1.26	1.78	-0.53
28 堺	-0.43	0.00	-0.43	63 松 本	0.85	1.47	-0.61
29 相 模 原	0.25	-1.11	1.36	64 松 山	1.26	1.31	-0.05
30 佐 世 保	0.33	-0.01	0.34	65 水 戸	1.26	1.08	0.18
31 札 幌	0.81	1.91	-1.10	66 水 俣	-1.12	-1.64	0.52
32 静 岡	1.26	1.22	0.03	67 山 口	1.26	1.25	0.01
33 上 越	0.85	0.18	0.68	68 夕 張	-1.12	-1.58	0.46
34 新 宮	0.85	0.48	0.37	69 横 浜	0.81	1.17	-0.36
35 仙 台	1.26	1.81	-0.56	70 米 沢	0.85	1.03	-0.18

的評価という、異なる2つの意味があることは前に述べた。この2つの意味が、「風格」を左右する2つの評価の系列に対応している、と見てみたらどうであろうか。つまり、都市の歴史的側面に関する評価系列は、情趣や風情といった感覚で示されるような、都市の審美的評価に相当する。これに対し、都市の機能的・規模的側面に関係する評価系列は、中心性の高低、人口の大小、都市の経済力、文化性などを反映した評価系列である。ここではひとまず前者を審美的評価系列、後者を総合的能力の評価系列と名付けておくと、実際の都市の「風格」の評価は、その都市のイメージを、この2つの評価系列によって評価した結果の総合として表されるものと考えられる。

そこでこの仮説に従い、都市の審美的評価系列を代表するものとして都市の歴史分類を、都市の総合的能力の評価系列を代表するものとして都市の機能・規模分類を用い、この2つを変数に各都市の属性をカテゴリー化し、数量化理論Ⅰ類による計算によって各都市の「風格」の推定値を求め<sup>15)</sup>、これと実際の「風格」の評価(計測値)とを比較してみた。その結果得られた各カテゴリー変数の数値は8-5表、各都市の「風格」の推定値と計測値との差異は8-6表のとおりである。

各カテゴリー変数に与えられた数値を見ると、都市の歴史分類では、古代・中世の政治中心(1.16)、城下町

(0.22)、港町・宿場町(0.12)の順に高く、非歴史都市(-0.57)に低い。都市の機能・規模分類では、大都市(0.78)、県都(0.44)に比べて地方都市(0.03)は低く、鉱工業都市(-1.15)が最も低い。こうして算出した「風格」の推定値と計測値との重相関係数は0.76(寄与率0.58)で、わずか2つの変数の組み合わせとしては、「風格」の評価をかなり再現しているといえよう。

しかしその一方で、推定値と計測値とがかなり違っている都市も、少なからず見られる。この推定値と計測値との差異は、数量化の際、機械的にカテゴリー化した都市の属性と、回答者の持つ共通な都市のイメージとの乖離から生じたものであると考えられる。したがって、8-2表に示した都市のシンボルをもとに、該当する都市のイメージを個別に再現することによって、推定値と計測値との差異を説明することが可能である。

芦屋(推定値と計測値の差は-1.27。以下同じ)は、機能・規模分類では住宅都市しというカテゴリーに該当したが、8-2表に示されるように芦屋は単なる住宅都市ではなく、その「高級住宅地」としての強いイメージが、この都市の「風格」を高めていると考えられる。金沢(-1.08)と萩(-1.13)は、例えば金沢の「百万石」や「伝統工芸」、萩の幕末にまつわる歴史的なシンボルに代表されるように、同程度の規模の他の都市と比べると、旧城下町としてずっと多彩で個性的なイメージを持つ。札幌

(-1.10) と函館 (-1.00) は、近代以降に発展した非歴史的都市でありながら、小樽 (-0.93) も含めてどちらも北海道では歴史のある都市であり、札幌の「時計台」、函館の「五稜郭」に象徴されるように、強い歴史的イメージを備えている。これと反対に、尼崎 (1.21) は歴史的には旧城下町でありながら、城下町としてのイメージは非常に弱い。銚子 (1.00) も歴史のある町ではあるが、これといった歴史的シンボルが見られない。相模原 (1.36) と東久留米 (1.09) は、芦屋とは対比的に、ただの住宅都市であるという以外に良い意味で目立つイメージが存在しないし、千歳 (1.17) の場合も、「空港」という単一のイメージがあるだけである。浦和 (1.47) はれっきとした県庁所在地であるが、「特急の止まらない県庁所在都市」のイメージなどもあり、むしろ住宅・衛星都市としてのイメージのほうが優勢である。

ひとつ倉敷 (-2.23) の場合だけは、少し事情が異なる。8-2表にも「重工業」のイメージがはっきりと示されているにもかかわらず、「風格」の計測値は、推定値よりむしろ高くなっているからである。これは、イメージ化の過程では明らかに存在した重工業のイメージが、評価の過程で意識的に無視され、回答者はこれと対比的な美観地区（大原美術館などを含む）のイメージのみを念頭に、評価したと考えねばならない。あるいは合併都市としての倉敷市の性格から、重工業地区（水島）が美観地区

(倉敷)とは全く別の場所としてイメージされたからとも考えられる。

同じ合併都市でありながら、これとちょうど逆の例となっているのが、いわきと北九州である。両市とも歴史的には、平15万石、小倉15万石という旧大城下町を中核としてきたにもかかわらず、城下町としてのイメージは、いわきで5.8%、北九州で9.4%の人が挙げたに過ぎない。一般に、非常に目立つ1つのイメージがあると、他のイメージが目立たなくなってしまう傾向があり、とくにそれぞれイメージの異なる、複数の核を持つ合併都市の場合、どの核のイメージが最も強力なイメージとなるかで、全体としての都市のイメージは大きく左右されることになる。8-2表によれば、いわきでは「常磐炭鉱」の、北九州では「八幡製鉄」のイメージが、平と小倉の歴史的イメージをはるかに上回っており、倉敷の場合とは対照的な結果である。都市の「風格」の面で、いわきと北九州が倉敷にまったく及ばないのも、その辺に理由があるものと思われる。

以上のように、都市の「風格」の評価は、都市の歴史分類と機能・規模分類という、2つの変数によっておおむね再現できることがわかった。これは、都市の「風格」の評価が、都市のイメージをもとに、都市の審美的評価系列と総合的能力の評価系列という、2つの評価系列による評価を総合したものとして表される、とする仮説を

支持する結果である。

## 5. むすび

都市の「風格」の評価を構成する2つの評価系列は、都市の審美的評価系列が、都市の過去のイメージにつながる、心情的・質的な尺度であるのに対し、都市の総合的能力の評価系列は、都市の現在の姿を映しており、物質的・量的な尺度であるというように、ある意味ではまったく相反する価値観念を包含している。

したがって「風格」の評価は、2つの評価系列に対するウェイトづけが、どのような比率で行われるかによって、かなり異なったものになる。回答者の評価パターンの違いにみられた個人差も、評価過程におけるウェイトづけの相違によるものであったと考えられる。つまり、とくに都市の審美的評価の方にウェイトを置く回答者と、都市の総合的能力の評価にウェイトを置く回答者との実質的な評価尺度の差が、例えば都市の総合的能力には優れるが、情趣や風情という点では問題のある、大都市や産業都市に関しては、歴然とした「風格」の評価の差となって現れたのである。

これに対し、京都・金沢・札幌・仙台のように、審美的イメージに優れ、かつ都市としての機能や規模も充実

している都市は、誰にとっても「風格」が高く評価されることになる。逆に、都市としての歴史が浅く、政治中心地や商業中心地としての機能も比較的弱い、いわゆる新興工業都市（宇部・直方・水俣など）や新興住宅都市（東久留米・相模原など）の評価は総じて低くなる。

ところで、萩・鎌倉・尾道・小樽などのように、審美的イメージには優れるが、現在の都市としての機能や規模は必ずしも大きいとはいえない都市が、比較的高い「風格」の評価を得ている。これは、2つの評価系列のウェイトづけに関して、全般的に都市の総合的能力の評価より、都市の審美的な評価のほうを重視する傾向が強いことを示している。評価パターンによる回答者の分類の結果からも、審美的な評価に比重を置いていると見られる回答者のほうが、数のうえで圧倒的に多いことがわかっている。都市の「風格」をあえて定義するとすれば、一般には都市の審美的評価を主とし、総合的能力の評価を従とする複合的評価であるということができよう。

しかも、2つの評価系列はいずれも都市のイメージに基づいた評価であって、必ずしも、城跡があるから審美的な評価が高く、人口が他の都市より多いから都市の総合的能力に優れるというように、現実の、しかも量の大小によって単純に決められるものではない。ある意味で、都市のイメージの内容は非常に気まぐれであるようにも見える。その理由は、都市が持つ無数の属性のなかで何



が社会的なイメージを構成するものとして取り上げられるかが、量的に一律には定められないからであるが、そのような選択の方法こそまさにレトリックであり、とくに社会的な都市のイメージの形成は、いわゆる換喩的認識に基づくことが多いと考えられる。

ここでいう換喩的認識とは、種種雑多な多様な内容を含む対象（例えば都市）全体を、少数の特徴的な部分によってとらえてしまうことである。芦屋市にある住宅が全て高級住宅であるわけではなく、また水俣市にはチッソの工場のほかに美しい風光や海の幸もあるのであるが、それらは社会レベルでの都市のイメージには反映されず、結果として両者の「風格」の評価に大きな隔たりを生じさせることになった。こうしたかなり短絡的とも見える対象（都市）の認識は、実は我々の日常では頻繁に行われており、我々はそのようにして形作られたイメージをもとに都市同士を比較し、一定の意味空間の中に位置づけているのだと思われる。社会レベルでの都市のイメージとは、まさにそのような形で我々のイメージの中に取り込まれ、都市の「風格」という概念は、そうした位置づけの一つの尺度として働いているということになる。

## 注

- 1) 『週間東洋経済臨時増刊・地域経済総覧 1989年版 (東洋経済新報社)』や『別冊民力 (朝日新聞社, 1978)』, 『日本の統計 市町村別統計総覧 全10巻 (清光社, 1983)』など。
- 2) 例えば、溝尾(1983)に紹介されているイギリスやアメリカの景観評価に関する研究や、わが国では溝尾・大隅(1983)など。
- 3) 新村 出編(1955)『広辞苑』岩波書店。大野 晋・浜西正人(1981)『角川類語新辞典』角川書店。による。
- 4) 高度経済成長期以後、わが国の都市の多くがどれも似たりよったりの景観となって、均質化への道を歩みつつけていることに対する危惧が囁かれており、とくに都市の個性やアイデンティティを強く打ち出すことが、都市の魅力を高め、活性化に役立つ、という議論が多くの研究者によって述べられている。例えば、栗田, 1965; 清水・服部, 1970; レンツ・ローマイス, 1978; 田村, 1984など。
- 5) 主婦と生活社編『カラー旅8』p.10。
- 6) 荒垣秀雄: 高山, 主婦と生活社編『旅情5』p.38。

- 7) 性格・人格の意で character, personality、風采の意で appearance、品格の意で elegance, refinement, dignityなどが考えられようか。なお、風格の語は元来漢語であり、今日の中国でもほぼ日本と同じ意味で用いられている。
- 8) 対象とした70都市は、まず、東京・大阪・名古屋・横浜・神戸・京都・札幌・福岡・北九州・川崎・仙台・広島の12大都市を選び、残りの58都市については、①全国各地に分散するようわが国を9つの地方に分け、各地方から4~8都市を選ぶ、②回答者が容易にイメージできるよう、原則として知名度の高い都市を選ぶ、③似たような都市規模・都市機能の都市は、できる限り1都市で代表させる、の3点を考慮しながら、2回のサブテストを経て選定した。
- 9) 実際には、一人の回答者に課せられる作業の量を考慮し、70都市を無作為に35都市ずつの2つの都市グループに分け、回答者は、これも無作為に割り当てられた、いずれか一方の都市グループについて、連想されるシンボルや特徴を記入してもらった。結果的に2つの都市グループの有効回答者の数は、52と53であった。
- 10) 調査表での「風格」の評価は、-3~+3の数値を付した数直線上に○を記入してもらい、結果が少しでも距離尺度に近いものになるよう考慮したが、本来順

序尺度である7段階の評価を数値に置き換え、その算術平均と標準偏差を求めることは、統計学的に問題がないとはいえない。しかし、平均と標準偏差はもっともポピュラーな指標であり、また一般には、このような数値尺度法で得られたデータを距離尺度とみなしても大過ないことが多いことから、今回は便宜的に回答者の評価した値をそのまま用いることにした。

- 11) 各回答舎監の順位相関計数 (KendallのTau b) 行列を求め、それをもとに各回答者間の相対的距離を算出して、クラスター分析を行った。その結果、回答者集団全体は、その評価パターンから、大都市を比較的低く評価する第IIグループ、大都市や産業都市を高く評価する第IVグループ、両者の中間型としての第Iグループ、そして以上のどれにも属さない第IIIグループ、の4つのグループに分けられた。
- 12) 第3章3-1表を参照。
- 13) クラスター分析については、東洋編(1974)を参照。
- 14) 歴史に関係する都市の属性の延べ数が、都市の属性の延べ総数の半数以上を占めている場合、「歴史シンボル」があるとみなした。
- 15) 数量化理論については、安田(1969); 大村(1980)を参照。

## 第9章 「小京都」にみる場所イメージの記号化 — 隠喩的認識に基づく場所イメージ —

### 1. はじめに

第I部第4章で述べたように、場所に関する比喩的認識とその表現には、隠喩的認識に基づくものと、換喩的・提喩的認識に基づくものの2つが考えられ、そのいずれもが場所イメージと深く関わっており、また記号化することにより社会にもさまざまな影響を与え得ることが示された。

ところで、地理学の論文でこのような比喩的認識を扱った例を見てみると、これが極めて少なく、最初に取り上げたのは、おそらく Tuan(1978)であろうと思われる。Tuanは直喩と隠喩を感情を伴う一種の記号として、共感覚とともに人の思考や認識に関係することに触れている。Livingstone & Harriton(1981)は、場所に関する隠喩表現を取り上げ、それが類似性に基づく場所のイメージであることを見抜き、さらにいわゆる「死んだ」比喩(彼らはそれを神話と呼ぶ)についても言及した。また、Mills(1982)は、時代ごとの世界観を表す隠喩としてThe

Book of Nature と Humanity as the Model と The Earth Machine の三種の隠喩を取り上げて、時代の変化に伴う人間の環境に対する認識方法の変化を、解釈しようとしている。なおこのほかに、メンタルマップが実在するのか、あるいは説明のための比喩にすぎないのか、という点に関する論争 (Downs, 1981; Graham, 1982; Kuipers, 1982) があるが、本研究でいう比喩的認識とは直接は関係がない。

すでに述べたように、場所に対する比喩的な認識とその表現は、世界観・環境観などを包含する地理的イメージの核心部分にも迫り得る重要な概念であると思われるのだが、地理学において比喩的認識を扱った研究は極めて少数で、しかもそれは隠喩的認識に限られており、また Mills の論文を除くと、それを実際の比喩的表現を例にとって研究したものがないのが現状である。そこでこの章では、比喩的認識に基づいて記号化した場所イメージの例として、「小京都」という表現を取り上げ、場所イメージの記号化とそれに伴う諸問題を、比喩的認識という観点から実証してみたい。

研究の対象として取り上げる「小京都」ということは、言うまでもなくある町を「京都」によって喩えた比喩的表現であり、京都に似た町、つまり京都のミニ版、の意味であると取れば、その町を京都に喩えた隠喩的認識に基づくものと考えられる<sup>1)</sup>。さらに、「東北の小京都」や「伊予の小京都」などと、小京都に地域を示す地

名を冠して呼ぶ場合、愛媛県の中における大洲の位置が、ちょうど日本の中における京都の位置に相当する、というような構造的な隠喩の関係を見いだすこともできる。

ここで重要なことは「小京都」という比喩が既にステレオタイプ化し、いわゆる「死んだ比喩」になっている点にある。例えば、金沢や角館をイメージする際、本来全ての人はいずれも異なる自由なイメージを持つことができるはずだが、ひとたび「小京都・金沢」や「小京都・角館」と耳にしたり、自分で考えたりしてしまうと、この言葉を理解している人は、必ずある固定したイメージへと引っ張られてしまうのである。

このように、ある場所とその場所イメージとの結びつきが固定化してしまうことを、場所イメージの記号化と呼ぶが<sup>2)</sup>、今日「小京都」という表現は観光に関連するメディアを中心に広く用いられているところから、おそらく経済的価値を伴う観光事業や、人の観光行動と関係が深いことが予想される。そして、その記号化した「小京都」のイメージは、当然喩えに用いられた京都のイメージとも何らかの関係を持っているはずである。

したがって「小京都」について場所イメージの面から考える際、おそらく次の2つのテーマが研究の目的として考えられよう。ひとつは、ある町が一般に「小京都」と認識され表現されることの意味を明らかにすることで、これはそれぞれの町と京都との間のイメージの類似性の

問題であり、最終的には「小京都」の定義（基準）を求めることになる。いまひとつは、「小京都」という概念がある特定の意味を伴って一般化した理由や、その社会への影響等について考えることになる。いわば前者が「場所」としての小京都を扱うのに対し、後者は言葉（表現）としての「小京都」が対象となる。社会のレベルにおける場所イメージの記号化という視点からみれば、後者との関連がより重要であると思われるが、後者を知るためにはまず前者を知る必要がある。以下、この二つの目的に沿って考察を進める。

## 2. 「小京都」のイメージ

### (1) 従来の小京都の定義

小京都について論じた文献は、これまでもいくつかあり、それぞれの著者の考えに基づいて小京都の定義のようなものがなされていることも多い。森谷剋久は「小京都」を文明社会へのアンチテーゼとみなし、①京風文化の影響、②京都の自然景観と地理的条件との近似性、具体的には盆地状の地形や碁盤目状の直交型都市形や京風の地名の存在、③伝統産業の存在、という三点での京都との類似性を、小京都の共通項として挙げている（エコノミスト'81, 1985）。また、村井(1975)は小京都を地



方における京都のミニチュア版とし、その条件として、①京都に似た自然景観（中央に川が流れ、周囲を山に囲まれる）、②京都に似た都市的景観（碁盤目状の町並み、京の寺社の勧請、町家など）、③京都と同様、生活習俗や産業に伝統が保持されていること、のやはり三つの条件を挙げた。楠本(1981)は、①山紫水明であること（北西東が山に囲まれ、川が流れている）、②おいしい水と料理があること、③神社仏閣が多いこと、④美人が多く、人柄が優雅であること、を挙げ、やはり京都と似ていることを条件としている。

これに対し、エコノミスト'81(1985)は現代における小京都の定義づけとして、単に歴史に培われた古い伝統を大切にす町、開発に走るのではなく、継承された古いまちなみや生活を大切にす町、というゆるやかな定義をし、一方、西川(1973)や服部(1984)は日本の文化の象徴である京都に対する憧れの表現と見ており、米山(1989)も小京都を小盆地宇宙の伝統的な文化中心としてとらえた。

また、昭和60(1985)年に発足した全国京都会議は、観光の振興を目的として全国の小京都の団結を呼びかけた、いわば小京都の集まりであるが、そこでは小京都の基準として、①京都に似た自然景観、町並み、たたずまいがある、②京都と歴史的なつながりがある、③伝統的な産業、芸能がある、の三つの条件のうち最低ひとつを満た

すことを加入の基準としている。

以上の定義から、小京都が京都に似た町であるという従来の観点に基づいて、小京都と呼ばれるべき町の京都のイメージとの共通点を列挙すると、次のようにまとめることができよう。

地形——周囲を山に囲まれた盆地状で、川が貫流する

人文景観——古い町並みや古い建物や史跡、寺院・神社が多い

碁盤目状の地割り、京にまつわる地名

(かつての) 政治中心

伝統産業——織物、焼物、その他伝統工芸

伝統文化——祭り、年中行事、しきたり、方言、料理、茶の湯、能など

## (2) 小京都の歴史

つぎに、小京都の歴史についても見てみよう。京都を模して造られた町としての「小京都」の発生は、中世末期の室町～戦国時代にまで遡ることができる。このころ地方の大名が城下町を形成するにあたり、東山や鴨川に比せられる山河のある、京都の立地条件と共通する土地を選び、碁盤目状の町並みや京風の家屋、祇園社・清水寺などの勧請、言語や習俗・祭礼など、積極的に京都文

化の導入をはかるなかで、いわゆる「小京都」が生まれた。

その原因の一つは「田舎わたらい」と呼ばれる、商人や芸能者の都から地方への下向が、応仁の乱による京都の荒廃以降、もっとも盛んになったことに求められる。とくに琵琶法師や連歌師による京都文化の地方への伝播は、当時政治的にも経済的にも実力をつけ始めていた地方大名（武士）に、京都の伝統的公家文化ひいては京都に対する劣等感をいだかせることになった。この文化的な劣等感が、地方大名の京都への憧憬へと変わり、京の模倣つまり京の隠喩としての小京都を自分の領国内に建設したというのである（村井、1968）。

このようにして建設された小京都に、大内氏によって造られた「西の京都」こと周防山口がある。山口の町造りは、正平19(1364)年に初めて京へ上った大内弘世が京の風物に魅せられ、帰国後地形的に京とよく似たこの地に新しく街を造り、居城を定めたことに始まる。京の模倣は、盆地を貫流する一の坂川を鴨川に見立て、通りの名も大路・小路など京風のものにしたほか、八坂神社や北野天神など京の寺社の勧請はもちろん、京から京童を連れてきて街の辻々に立たせ、京言葉を教えさせたときさえいわれるほど徹底し、以後7代にわたって京風化の努力は続けられた。このほかにも、応仁の乱を避けて京から下向した前関白一条教房が、京を慕って造った土佐中

9-1表 「××（地名）の○○（地名）」の比喩的表現に  
用いられた地名

喩えられた地名 (○○の部分に相当)		喩えに冠せられた地名 (××の部分に相当)	
富士	26	日本	14
京都	23	東洋	11
松島	10	海(上)	7
高野	10	関東	6
アルプス	9	山陰	6
軽井沢	7	東北	5
ライン	7	西	5
鎌倉	5		
嵐山	5		

村、朝倉氏の「越南の都」越前一乗谷や、金森長近が京を模して城下町を形成した飛騨高山など、戦国時代に京を意識して造られた領国経営の拠点としての城下町は、かなりの数にのぼる。村井(1981)は、これら武士による京都憧憬に基づいて建設された城下町を典型的な小京都と考え、本来の意味での「小京都」であるとしている。

### (3) 小京都とみなされている町——研究対象の選定

本稿は、比喩的認識ならびにその結果である比喩的表現としての「小京都」という言葉、そしてその認識や言葉と強く結び付いている場所イメージ、すなわち記号化した場所イメージを対象とするわけであるから、金沢や山口や津和野といった町の実際がどのようなものであるかということより、これらの町が現在「小京都」として呼ばれている事実、あるいはその現象について考えることが主眼となる。そこで、まず小京都という表現が、現在どのくらい使われているかを、おもに市販の観光ガイド80冊余りによって調べてみた。その結果、小京都を含む京都の隠喩表現は23種にのぼり、富士の26について2番目に多く比喩に用いられている地名であることがわかった(9-1表)。

このように、小京都という言葉は「○○富士」や「××銀座」などと並んで、多くの場所について最も広く用いられている比喩的表現のひとつであると考えられる。

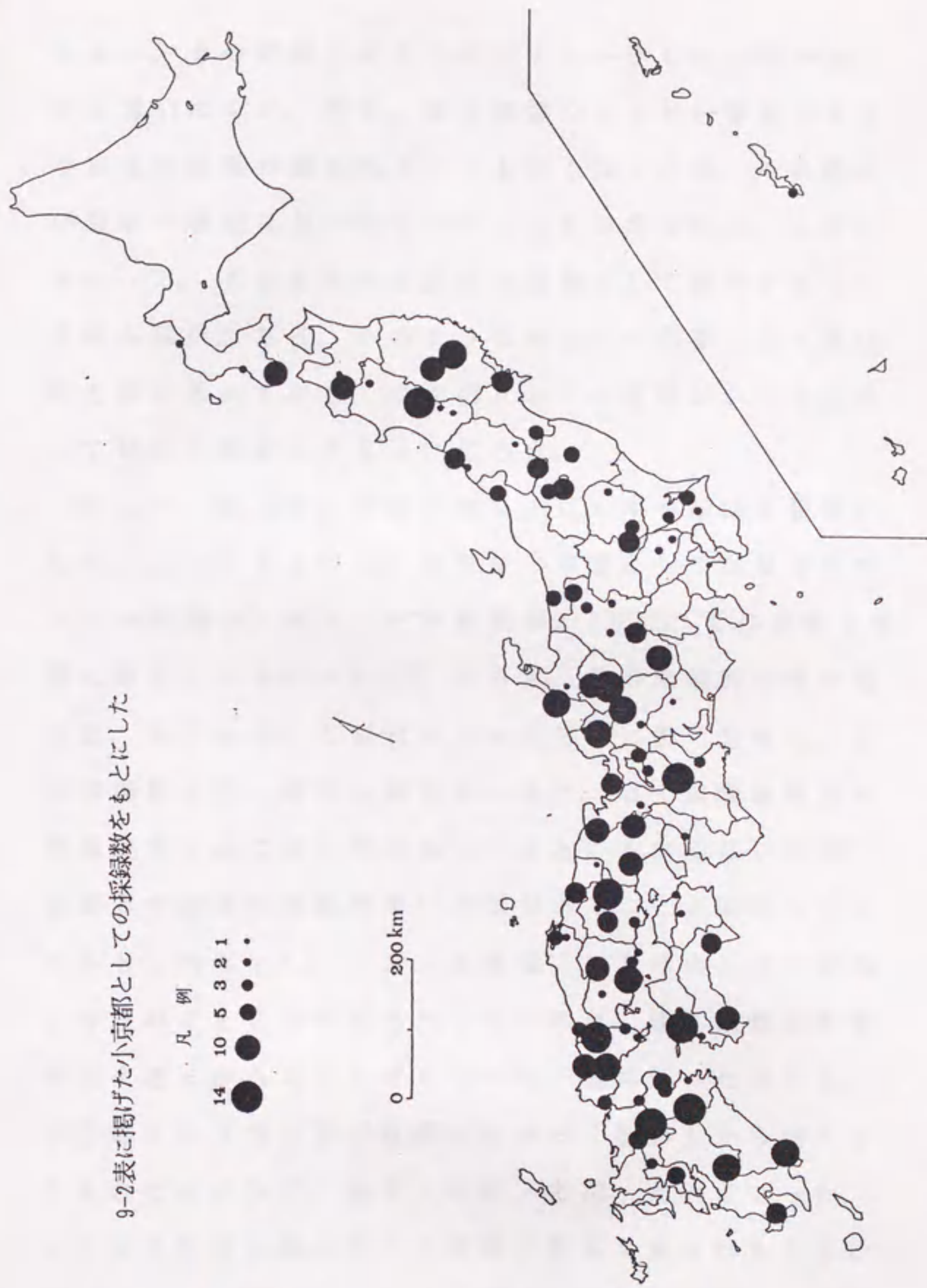
9-2表 資料ごとにみた「小京都」としての採録の有無

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	計		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	計		
松前町	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○		10	上越市高田○									○	○	○	○		5			
寿都町														○	2	加茂市															0		
江差町				○											2	長野市松代○									○				○	3			
弘前市	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10	飯山市	○	○						○	○			○	○	6			
黒石市	○														1	高遠町	○	○					○	○	○	○	○		7				
遠野市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13	飯田市		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11	
盛岡市		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10	松本市											○			○	2		
水沢市															0	小諸市												○		2			
大館市	○	○													2	城端町												○		1			
横手市	○														1	金沢市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13		
角館町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14	小浜市	○	○									○	○	○	○	○	○	8
湯沢市														○	1	大野市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13			
登米町	○	○	○					○	○	○	○	○	○	9	勝山市	○								○							2		
白石市								○	○	○		○	4	足助町	○																1		
村田町															0	古川町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11			
山形市														○	1	高山市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14		
米沢市	○	○					○	○	○	○	○	○	8	八幡町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13			
鶴岡市	○						○								2	岐阜市									○		○		2				
酒田市		○	○				○	○	○	○	○	7	上野市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14				
三春町	○	○					○	○		○		5	松坂市										○	○		○		3					
会津若松市	○	○					○	○	○	○	○	○	9	近江八幡市○											○		○		3				
喜多方市	○						○	○		○	○	5	彦根市											○	○		○	○	4				
足利市	○	○	○				○	○	○	○	○	9	亀岡市	○											○				2				
栃木市	○							○		○	○	4	岸和田市													○		○		2			
烏山町	○						○							2	出石町	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	12			
黒羽町									○			○	2	篠山町	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	10				
水海道市	○								○			○	3	竜野市	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	11				
佐原市	○						○	○		○		4	倉吉市	○	○								○	○	○	○		8					
佐倉市									○			○	2	若桜町	○																1		
川越市	○						○							2	松江市	○							○		○		○		4				
小川町							○					○	2	津和野町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14				
世田谷区烏山									○			○	2	広瀬町									○	○		○					3		
鎌倉市	○													1	益田市								○	○		○	○					4	
村上市	○	○					○	○	○					5	高梁市	○	○						○	○	○	○	○	○				9	

(○印が採録されているもの、右端の数値はその合計)

9-2表 (つづき)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	計
津山市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
勝山町	○														1
倉敷市							○			○				○	3
竹原市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
三次市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
福山市鞆										○				○	2
尾道市							○		○					○	3
吉田町		○										○			2
山口市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
萩市	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	12
岩国市	○	○												○	3
下関市長府	○						○	○						○	4
柳井市										○				○	2
引田町										○				○	2
脇町										○				○	2
大洲市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
内子町										○				○	2
宇和島市										○				○	2
安芸市	○	○					○	○	○	○				○	7
中村市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
甘木市秋月	○	○					○	○	○				○	○	7
柳川市							○		○					○	3
島原市		○					○	○	○				○	○	6
福江市							○		○					○	3
人吉市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
日出町	○	○					○	○							4
杵築市	○	○					○	○	○					○	6
日田市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
竹田市	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
臼杵市										○				○	2
中津市								○	○					○	3
日南市飯肥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
知覧町	○	○					○	○	○				○	○	7
那覇市首里							○		○					○	3



9-2表に掲げた小京都としての採録数をもとにした

9-1図 「小京都」と呼ばれている都市の分布



しかし、その定義となると必ずしも一定したものがある  
とは言いにくい。近年、観光雑誌やテレビの番組などで  
小京都の特集が組まれることも多くなったが、その際の  
小京都の選定にもかなりのばらつきが見られる。しかし  
その一方、どの資料にも必ず小京都として紹介されてい  
る町も確かにある。そのような町は、小京都として現在  
広く認められており、小京都としての認識がかなり定着  
していると解釈してもよいだろう。

そこで、全国の小京都を取り上げた本や雑誌を資料と  
して、これらにどのような町が小京都として採録されて  
いるかを調べてみた。その結果が9-2表で、その分布を地  
図に落としたものが9-1図である。その地理的分布を見  
ると、大体において東日本より西日本に多く分布し、ま  
た採録数の多い都市も西日本に多い。とくに関東地方や  
東海地方に小京都と呼ばれているところが少ないのは、  
京都との関係が比較的薄い地域であることと関係してい  
るかもしれないし、一方、近畿地方にもほとんど小京都  
と呼ばれるところが見あたらないのは、逆に京都の影響  
が強すぎるからだとも考えられる。既に述べたように、  
小京都という考え方が京都に対する「憧れ」から出てき  
たものだとすれば、東北・中国・四国・九州といった、  
いわゆる日本の縁辺部に小京都が数多く見られることと  
はちょうど符合する。また、内陸部に多く分布している  
のも、京都と同じく盆地状の地形にある町が多いことと

9-3表 小京都と呼ばれ始めた時期と契機

(回答市町村数37、エコノミスト'81(1985)による)

時期	契機	歴史的な 経過から	雑誌等に よる紹介	京都に似 た雰囲気	計
明治以前		4	0	0	4
明治・大正期		4	0	3	7
昭和30年以前		3	1	7	11
昭和30-50年		2	5	5	12
昭和50年以降		0	2	4	6

関係しているのであろう。酒田や竹原などいくつかの例外もあるが、小京都と呼ばれている町の大部分が旧城下町であることも特徴の一つである。

ここに挙げた102の市町のうち、より多くの資料に採用されている町は、小京都として広く認められ、小京都としての認識がかなり定着している可能性が高いと判断してもよいであろう。そこで、とりあえず7つ以上の資料に採用されている市と町、それに昭和60年に観光の振興を目的として京都市が音頭を取って発足した全国京都会議の加盟市町<sup>3)</sup>を加えた52の市と町を、ひとまず今回の研究の対象とすることにした。

#### (4) 「小京都」という名称

ところで、京都を模した町の成立は戦国時代にまで遡ることができるけれども、それらが当時から「小京都」という名称で呼ばれていたとは思われない。つまり「京都に似た町」という概念は古くからあったが、「小京都」という言葉は比較的最近になってよく用いられるようになったものなのである。エコノミスト'81(1985)が行ったアンケート調査の結果(9-3表)によれば、明治以前から「小京都」と呼ばれていたと回答した市町が4例あるが、筆者が文献の中に表された「小京都」の名称を調べたところでは、明治41(1911)年の山崎直方・佐藤伝蔵編『大日本地誌』の高山の項に「四周山を繞らし中に小盆地を

9-4表 地誌や特集本にみる「小京都」としての名称の記載の有無

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	a	b	c	d	e	f	g	h			
松前	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
弘前	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
盛岡	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
水沢	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
遠野	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
登米	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
村田	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
三春	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
角館	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
酒田	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
鶴岡	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
米沢	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
会津	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
若松	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
喜多方	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
足利	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
榑木	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
加茂	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
高田	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
金城	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
大野	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
小浜	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
飯山	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
飯田	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
高遠	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
高山	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
古川	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
郡上	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
伊賀	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
上野	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
龍野	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
篠山	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
出石	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
倉吉	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
松江	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
津和野	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
津山	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
高梁	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
竹原	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
三次	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
山口	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
萩	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
大洲	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
安芸	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
中村	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
秋原	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
島田	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
日方	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
杵築	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
竹田	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
人吉	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
肥前	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
佐賀	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
知覧	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.

9-4表 (つづき)

- A 吉田東伍「大日本地名辞書」富山房、明治33-35.
- B 山崎直方・佐藤伝蔵「大日本地誌」博文館、明治39-44.
- C 太田為三郎「帝国地名辞典(全)」三省堂、明治45.
- D 仲摩照久「日本地理風俗大系」新光社、昭和4-5年.
- E 山本三生「日本地理大系」改造社、昭和4-6年.
- F 澤田久雄「日本地名大辞典」日本書房、昭和13年.
- G 渡辺 光「日本地名辞典」朝倉書店、昭和29-30年.
- H 倉地武雄「日本都市大観」日本都市大観編纂事務局、昭和30年.
- I 下中弥三郎「世界文化地理大系」平凡社、昭和32-33年.
- J 日本地理風俗大系編集委員会「日本地理風俗大系」誠文堂新光社、昭和34-35年.
- K 日本旅行協会「全国旅と温泉辞典」鶴書房、昭和35年.
- L 浅香・木内・児玉「図説日本文化地理大系」小学館、昭和36-38年.
- M 「新しい日本」国際情報社、昭和38-41年.
- N 後藤茂樹「日本の旅」小学館、昭和40-41年.
- O 渡辺・中野・山口・式「日本地名大事典」朝倉書店、昭和42-43年.
- P 「日本の文化地理」講談社、昭和43-46年.
- Q 主婦と生活社「カラー旅」主婦と生活社、昭和47年.
- R 日本地誌研究所「日本地誌」二宮書店、昭和43-46年.
- S 山口恵一郎「日本図誌大系」朝倉書店、昭和47年.
- T 横田泰一「小京都の旅」讀売新聞社、昭和49年.
- U 宮田 輝「小京都100選」秋田書店、昭和50年.
- V 松田 清「全国旅行案内」日本交通公社、昭和50年.
- W 奈良本辰也「日本の山河」国書刊行会、昭和51-57年.
- X 第一アートセンター「四季日本の旅」集英社、昭和58-59年.
- Y 相賀徹夫「城郭と城下町」小学館、昭和59年.
- Z 「週刊朝日百科・世界の地理」朝日新聞社、昭和59年.
- a 毎日新聞社「ふるさと日本列島」毎日新聞社、昭和61-62年.
- b 全国京都会議「小京都ガイド」昭文社、昭和62年.
- c 「角川日本地名大辞典」角川書店、昭和54-平成元年.
- d 「エアリアガイド1-37」昭文社、昭和63年.
- e 「交通公社の新日本ガイド」日本交通公社出版、昭和63年.
- f 「ブルーガイド」昭和63年.
- g 「ブルーガイドバック」昭和63年.
- h 「ヤマケイガイド」山と溪谷社、昭和63年.

- ◎ 「小京都と呼ばれている」
- 「小京都にふさわしい」
- 「○○の京(都)と呼ばれている」
- △ 小京華
- + その他の比喩的表現
- ・ 「小京都」の記載なし
- 空白 該当項目なし

造り、宮川町の中央を流れ、山河の形成、街衢の状況さながら京都に似たるを以に一に小京華の名あり。」とあり、また、明治45(1915)年の太田為三郎編『帝国地名辞典』の高山の項目に「宮川町の中央を流れ、山岳四周し、形勢京都に似たるより小京華の名あり。」という記述があるのが、もっとも古いほうの例であろうかと思われる。また、この当時は「小京都」ではなく、「小京華」という語で呼ばれていたことが、この記述から推測される。

さらに、戦前の段階では地誌などの類に「小京都」の名称が書かれていることは稀であるが、皆無というわけではなく、すでにこの頃には「小京都」という言葉自体は存在していた。例えば、「小京都高山：四近の山水すぐれて美しくクラシックな町の様子と相對して真に小京都の感がある。(中略)「小京都」の異名は単に山紫水明の環境に包まれた都邑の概念的類似の上から名付けたものではなく、市坊の有様、山川のたゞずまひなどの細かい点まで似通つてゐるからなのであらうかとまで考へさせられる。」や、「小京都津和野：稲荷神社の祭礼と盆の津和野踊の優艶さはこの山間の名邑、小京師にふさはしい景觀である。」といった記述がある<sup>4)</sup>。

しかし、「小京都」の名称が頻繁に目につくようになるのは、やはり戦後になってからのことである。9-4表は、地誌や特集本などに記載された「小京都」の名称の有無を一覧したものであるが、とくに昭和50(1975)年頃の地

方観光ブーム以後になって、観光ガイドなどを中心に「小京都」と称されるところが日本じゅうに登場してきたことがわかる。また、この表でも「小京都」と呼ばれている町が、東日本より西日本に多く分布していることがはっきりしている。

9-4表をもとに、現在「小京都」と考えられているこれらの町を、いったいいつ頃から「小京都」と呼ばれているのか、という点からいくつかに分けてみると、①戦前からを含め、比較的早い時期から小京都と呼ばれていたところ：高山・山口（西の京）・津和野・日田・津山・飯田・竜野・人吉・角館・盛岡、②かつて小京都と呼ばれることもあったが昭和50年代以降顕著となるどころ：中村・大野・大洲・出石・竹原・知覧、③昭和50年代以降になって初めて小京都と呼ばれるもの：飯山・八幡・高梁・秋月・竹田・飫肥・弘前、のほかに、④今に至るまで一貫して小京都と呼ばれていないもの：金沢・松江・遠野・萩・篠山・上野・会津若松・酒田・小浜・島原・松前・水沢・登米・村田・鶴岡・米沢・喜多方・三春・足利・栃木・高田・城端・高遠・倉吉・三次・安芸・杵築など、があることがわかる。

ここで注意すべき点は、「小京都」と呼ばれていることと「小京都」としてみなされている（イメージされている）こととは、必ずしも一致しないことである。角館・大野・高山・竜野・出石・津和野・津山・竹原・大洲

・中村・日田・人吉などは「小京都」であるとみなされ、同時に「小京都」という名を冠して呼ばれることが多いが、遠野・会津若松・足利・金沢・小浜・伊賀上野・篠山・三次・萩といったところは「小京都」としてみなされていないながら、「小京都」という名称で呼ばれることはほとんどない。

### 3. 小京都に共通するイメージの分析

#### — 小京都の意味について

この節の目的は、現在小京都としてみなされている数多くの町のイメージを知ることによって、その共通するイメージを求め、「小京都」という比喩的認識でとらえられている記号化した場所イメージの様相を明らかにすることにある。その方法として、これらの市と町が出している観光用のパンフレット、ガイドマップ、市政要覧などをもとに、まず各市町の「小京都」としての場所イメージを求めるが、これらの資料を用いる理由は、次に述べるアンケートの結果からも明らかのように、現在の小京都のイメージは観光と強く結び付いており、ここで求めたい記号化した「小京都」のイメージは観光客を魅惑し引き付ける手段として、必ず観光パンフレットなどの観光客向けの資料に、もっとも強調して描かれている



9-5表 小京都についてのアンケート調査の結果(1)

「小京都」として 全国的に	「小京都」と呼ばれることは				計
	どちらか たいへん 好ましい	とくに といえは 好ましい	むしろ 意識して いない	むしろ 迷惑して いる	
よく知られている	2	1	0	0	3
だいたい知られている	7	2	1	1	11
少しは知られている	7	9	0	0	16
まだ知られていない	4	8	7	0	19
計	20	20	8	1	49

9-6表 小京都についてのアンケート調査の結果(2)

「小京都」と呼ばれることは	「小京都」と呼ばれることは				計
	どちらか たいへん 好ましい	とくに といえは 好ましい	むしろ 意識して いない	むしろ 迷惑して いる	
町のイメージアップになる	17	12	0	0	29
ならない	4	8	8	3	23
観光面での効果を期待	20	15	0	0	35
期待しない	1	5	8	3	17
町の誇りや愛着が増す	7	2	0	0	9
増さない	14	18	8	3	43
計	21	20	8	3	52

9-7表 小京都についてのアンケート調査の結果(3)

「小京都」と呼ばれることは	「小京都」として全国的に				計
	よく知られている	だいたい知られている	少しは知られている	まだ知られていない	
町のイメージアップになる	2	9	12	6	29
ならない	1	2	4	13	20
観光面での効果を期待	2	7	15	10	34
期待しない	1	4	1	9	15
町の誇りや愛着が増す	1	3	4	1	9
増さない	2	8	12	18	40
計	3	11	16	19	49

9-8表 各市町の観光キャッチフレーズと「○○の小京都」

名称		(◎は発行されたパンフレット等に記載のあるもの)
松前	さくらの里、北の小京都	北の小京都◎
弘前	お城とさくらとりんごのまち	東北の小京都、みちのくの小京都◎
盛岡	杜と水の都、みちのくの小京都	みちのくの小京都◎
水沢	火と水と鉄と人、錆物のまち	なし
遠野	民話のふるさと	なし
登米	みやぎの明治村	なし
村田	いまも息づく歴史の町、蔵の町	みちのくみやぎの小京都◎
三角	小さな城下町	東北の小京都
角館	みちのくの小京都	みちのくの小京都◎
酒田	いい四季いい人いい酒田	なし
鶴岡	おばこの里、歴史と文化が息づく町	(東北の京都)
米沢	上杉の城下町、伊達のふるさと	東北の小京都、みちのくの小京都
会津若松	いま歴史に出会う、心のふるさと	なし
喜多方	蔵のまち、東北の倉敷	なし
足利	歴史と史跡のまち	東の小京都
栃木	蔵の街、鯉のいる街	関東の小京都
加茂	北越の小京都、雪椿のまち	北越の小京都◎
高田	上杉謙信公のまち、森の都	なし
城端	寺と曳山・民謡の町、古刹と坂の町	越中の小京都
金沢	百万石の城下町	北陸の小京都
大野	人情と伝統そして大自然の郷	北陸の小京都
小浜	ふるさとのまち、海のある奈良	なし
飯山	スキーと寺の町	信州の小京都、雪国の小京都
飯田	りんご並木の街、小京都の城下町	伊那路の小京都、伊那谷の小京都
高遠	史跡と桜の城下町	なし
高山	心のふるさと、伝統的文化都市	飛騨の小京都◎、(山都)
古川	緑と太陽の町、心のふるさと	なし
郡上八幡	水と踊りと心のふるさと	奥美濃の小京都、美濃の小京都
伊賀上野	文化薫る歴史のまち	伊賀の小京都
龍野	童謡の里	播磨の小京都◎
篠山	やすらぎの城下町	(丹波の都)◎
出石	但馬の古都、詩情あふれる城下町	但馬の小京都
倉吉	水と緑と文化のまち	山陰の小京都
松江	日本の面影、水の都、城下町	(山陰の古都)
津和野	山陰の小京都、史跡と鯉の町	山陰の小京都◎
津山	歴史と文化のふるさと	西の小京都◎
高梁	城と川と踊りのまち、心やすらぐ町	西の小京都、備中の小京都
竹原	瀬戸内の公園都市	安芸の小京都◎
三次	古墳と川のある町	西の小京都
山口	西の京山口	(西の京)◎
萩	四季の美と史跡が光る、心のふるさと	なし
大洲	水と緑のまち、水郷	伊予の小京都◎
安芸	「土佐」のふるさと、心のふるさと	なし
中村	土佐の小京都、清流の町	土佐の小京都◎
秋月	水と緑と歴史のふるさと	筑前的小京都◎、西日本の小京都◎
島原	水と緑の城下町	なし
日田	水と歴史と温泉のまち、水郷	九州の小京都
杵築	坂道のある城下町	なし
竹田	荒城の月と緑と花のまち	九州の小京都◎
人吉	急流といで湯の里	九州の小京都◎、霧の小京都
肥前	歴史と文化のかおる都市	九州の小京都◎
知覧	薩摩の小京都、史と景と文化財のまち	薩摩の小京都◎

と考えられるからである。

筆者は、これらの資料を收拾すると同時に、各市町の観光課に対し、「小京都」と呼ばれることについてのアンケート調査も行ったが、その結果の一部をクロス表で示したものが、9-5, 6, 7表である。これによると、小京都として全国的によく知られていると思っている町ほどそのことを好ましいことと思っており、その理由としては町のイメージアップにつながることを挙げているのに対し、小京都として余り有名でない町は、自己評価している町は、観光面での効果を第一に考えている傾向がかなり見られた。小京都として余り有名でない町には、最近になって小京都の名乗りをあげたところが多く、昭和4, 50年頃より観光ブームに乗って増えだした小京都の名前と観光効果との間に密接な関係のあることを予測させる結果となっている。

また、9-8表はアンケート調査票に書かれた各市町の観光用のキャッチフレーズで、その町の観光面でのセールスポイントを一言で表した、やはり一種の比喩的表現であると考えられるが、ここに出てくる言葉はかなりの的確にその町の観光のイメージを表現している。小京都の語が多いのは当然だが、ほかに「ふるさと」、「歴史」、「文化」といった言葉が多くみられるのが特徴である。

また、「○○の小京都」という名称を用いているところが相当数あるが、○○の部分には多くの場合、飛騨・

播磨・安芸・伊予といった旧国名が入ることが多く、県名が入ることはほとんどない<sup>8)</sup>。これは、後に述べる小京都に共通するイメージとも関係して、より歴史的な雰囲気を出すために、現在では使われていない古めかしい国名を用いているものと考えられる。旧国名のほかに、東北（やはり古めかしい言葉で「みちのく」と呼ぶものも多い）・北陸・山陰・九州といったいわゆる広域な地方名を冠している例も多いが、ここに用いられる地方名はほとんどが日本の周辺部の呼び名である。これは、例えば観光ガイドの一冊の単位が東北・北陸・山陰・九州となっている場合が多いように、県名や旧国単位の名称の知名度が低く、少なくとも観光地としては、地方名で一括して呼ばれることが多いこととも関係しているのではないかと思われる<sup>9)</sup>。いずれにせよ、「○○の小京都」という名称が、観光用のイメージを高揚させるようなかたちで設定されていることは間違いない。

つぎに、各市町の観光パンフレットに記載されているコピー（印象的な宣伝文句）、記事、写真、イラストなどから、それぞれの町の観光地としてのイメージを構成していると思われる要素を抜き出し、これら小京都と呼ばれる町に共通するものを求めることになるが、全体を見渡して気付くことは、小京都と呼ばれている町の観光パンフレットは、どれもよく似た構成で作られており、独特のカラーが感じられることである。

一般に小京都の観光パンフレットは他の都市と比べてページ数も多く内容も豊富で、装丁やデザインなどに手の込んだものが多い。パンフレットはたいてい盆地風景や川といった閑静な自然景観と、城や土蔵など歴史的な建物や町並みの風景の写真、およびそれに付随するコピーが中心となり、つぎに祭りや伝統行事の紹介、最後に郷土料理と特産品・お土産の紹介という順序で構成され、大型観光リゾートや工場・産業に関する記載はほとんど出てこない。

このようなパンフレットの構成や、使われている風景写真やイラストそしてコピーや本文から受ける感じは、一言でいえば抒情的であり、ある意味で見るもののロマンティックなイメージを刺激するような方向で作られている点で共通している。観光客の誘致を目的に表されたこれらのイメージは、おそらくその土地の場所イメージを最大限に強調する形でパンフレット上に表現されており、これら数多くの小京都に共通する何らかのイメージと無関係であるとは思えない。そこで、とくにコピーや本文や写真などに注意を払いながら、小京都のイメージに共通する成分と言えそうなものを選んでみた。

まず、すべての小京都に共通する内容として、歴史的な景観、具体的には神社仏閣・城跡・古い町並みなどの取扱いが、非常に重要な位置を占めていることが挙げられる。例えば、

「津軽のふるさと 仏閣を尋ねて。」（弘前）

「河に囲まれ、緑に覆われた街、盛岡。城下町の香りが、露路裏に漂う。」（盛岡）

「大通りから一步入ると、いまでも落ち着いた城下町のくらしがある」（松江）

「路地や家並みに上杉の歴史が息づく、自由自在に闊歩。」（米沢）

「歴史を秘めた数々の史跡」（中村）

のように、現在の姿を客観的に出してくるものや、

「山に抱かれたお城が出石の町を見おろし、苔むした石垣に歴史を想う…」（出石）

「白い土塀で囲まれた武家屋敷等が昔を偲ばせてくれます。」（飢肥）

「米で富を築き上げた、かつての酒田商人、大地主の面影を偲んで。」（酒田）

のように、歴史的景観の歴史性を強調することによって、  
見る者の心を過去へ引き戻そうとする表現も目につく。

このような主観的な表現がさらに強調されると、

「遠い昔の面影ゆかし一桜の里」（松前）

「歴史の面影が心にやさしく溶け込む。」（弘前）

「昔の面影をとどめる史跡の数々、今なお脈うつ伝統の風物」（島原）

のように、昔の面影というキーワードによって歴史的景  
観が美化され、



「いまに残る名勝・名刹が高原に苔むし、たたずむ石仏が “時” を超えて語りつづける。」（飯田）

「時の流れを忘れて、遠い昔に想いを馳せる。」（倉吉）

「静寂の時間を見つめていた。古都のたたずまいに身をゆだねていると、騒然とした時代が動きを止める一瞬があった。」（山口）

というように時の流れが自己の中で停止し、さらに、

「静かなる城下町で、暫し時を忘れて歴史を遡る。」（秋月）

「故きを温ねて新しきを知る。先人の息吹を受け鼓動を感じる歴史へのタイムスリップ」（鶴岡）

「400年の昔へタイムトリップしたような町のたたずまい」（上野）

「津和野では時間がゆっくりと歩きます（中略）古き良き時代のふるさとを訪ねる時間旅行にさあ出かけましょう」（津和野）

のように、観光客はタイムトリップして完全に自己の内  
的世界に入り込んでしまい、ついには、

「寺から寺へ。歴史とかくれんぼしながら歩くと、いつしか誰もが、少年少女になっ  
てしまう町。」（飯山）

というところにまで至る。

また、個人的な思念の中に没頭し、タイムトリップする  
ということは、またそこが静寂であることをも意味し

ている。例えば、

「今も閑静な伊賀の里に古人の脈々たる息づかいが聞こえる。」（上野）

「さんざめく時の流れにひっそりと息づく古都のたたずまい」（津山）

「静けさが心にしみるまるで山水画の世界」（大洲）

「石畳に静かに響く歴史の音。しなやかに和服の似合う城下町。」（杵築）

といった表現があり、動に対する静、華やかさに対する落ち着き、といったものが前面に押し出されているのも全体において共通している。また、

「角館は、みちのくの小京都と呼ぶにふさわしい歴史と風情につつまれています。」

（角館）

「折れ曲がり、入り組んだ道筋で見つけました。とっておきの津山の風情。」（津山）

「多くの史跡や文化財に恵まれた情緒豊かな城下町」（高梁）

などのように、情緒や風情といったものの強調から、さらに、

「潮風薫る光と浪漫の街」（酒田）

「伝説とロマン 詩情あふれる古都の町並み。」（出石）

「鮮やかに歴史のロマンを感じさせるまち」（日田）

「時を越え、歴史を越えて、人々をいにしへのロマンへと誘う。」（知覧）

のようにロマンの強調へとなり、一方では、

「ノスタルジックな街栃木。古き良き昔の情緒が今もやさしく息づいている。」（栃木）

「街はセピア色のノスタルジーがいっぱい…この街の歴史は古そうだ」（古川）

のように、ノスタルジーへとつながる。そして、この種の感情が地方的なイメージと結びつくと、

「茅葺き屋根に雪が降り積んで、あったかそうな灯が見えている…。遠野には冬の景色がよく似合います。それは、そう遠くない昔、日本のどこにでもあった風景。そして、だれもが心の中に持っている懐かしいふるさとの原風景。」（遠野）

「米沢には忘れかけていた心のふるさとがある。」（米沢）

「“ふるさとの素朴な風景”が旅する人の心にぬくもりと、やすらぎを…。」（城端）

「心のふるさと…城下町の風情」（八幡）

「津和野には、私たち日本人がいつの間にかどこかに置き忘れてしまった“心のふるさと”が生きているのです。」（津和野）

「心のふるさと…九州の小京都」（竹田）

といった表現となり、さらにそのイメージが強調されて、

「素朴でこまやかな心」（古川）

「素朴な人の和…郡上おどり」（八幡）

「相良700年の文化と素朴な伝統を保つ歴史のまち」（人吉）

となる。また、このようなふるさとのイメージは、小京都の持つ盆地の地形と関連して語られることも多い。例えば、

「山々に抱かれ川に育てられた人吉は、九州の京都とたとえられるように日本人の心のふるさとと呼ぶにふさわしい。」（人吉）

「緑なる山々に抱かれて 歴史が静かに眠っている」（会津若松）

「伊勢、近江、大和の山々に囲まれた静かな盆地。」（上野）

「四方を山々に囲まれ、自然と人間生活の素晴らしい調和をみせて広がる篠山の町並みは、歴史と伝統をうけついで“丹波の都”と呼ばれております。」（篠山）

「三方が山に囲まれ、市の中心を清流が流れる 文字どおり山紫水明。そんな日本的ふん囲気に満ちあふれた町 萩。」（萩）

といった表現は、多くの場合、山間の盆地の雑びた風景の写真とともに用いられている。

これらの結果から、今日小京都とみなされている町に共通しているイメージは、まず第一に歴史性の強調であり、過去の面影を残している点であり、伝統や情緒やロマンスが残されている点である。さらに、それは一部において静かさややすらぎとなり、またノスタルジーや懐かしさと結びついて、「心のふるさと」や素朴さという認識に至る。時が止まったり、遡ったり、主観的なイメージに強く訴えようとしているのも特徴と言えるだろう。

また、一部では盆地の地形や川または水路の存在といった自然条件も取り上げられるが、その描き方も非常に情緒的である。

このほか、これら小京都の観光パンフレットにかなり共通して見られる要素として、城・城下町、武家屋敷・土蔵などの古い町並み、神社・仏閣、美術品や文化財の存在、洋風建築、人物や文学との関連、織物・焼物・木工などの伝統工芸、祭り、能・鶺鴒・名物料理といった伝統文化、町造りにおける京の模倣、京との文化的・経済的關係、碁盤状の道路、などが考えられた。

そこで、次に、さきの52の小京都に88のその他の市町村<sup>7)</sup>を加えた140の市町村の観光パンフレットの記載内容を資料とし、これら小京都に共通するとみられるイメージによって、小京都と呼ばれている町とそれ以外の町が明らかに区別されているかを、統計的手法を用いて検証してみることにする。方法としては、各市町村が出している観光パンフレットの内容について、さきに挙げた小京都にかなり共通してみられるのではないかと思われる要素（「盆地」・「川・水路」・「城・城下町」・「古い町並み」・「寺社」・「美術品・文化財」・「洋風建築」・「人物・文学」・「伝統工芸」・「民話・伝説」・「祭り」・「過去の栄華」・「京都との関係」に関する記載と、「昔の面影」・「静かさ・やすらぎ」・「素朴さ」・「タイムスリップ」・「情緒・ロマン」・「故

9-9表 19変数による数量化理論2類の結果

変数		ケース数(N)		数値	レンジ	偏相関係数
		小京都	非小京都			
盆地	無有	25	95	0.07	0.51	0.16
	有	14	6	-0.44		
川・水路	無有	20	81	0.14	0.51	0.22
	有	19	20	-0.37		
城・城下町	無有	13	75	0.07	0.19	0.08
	有	26	26	-0.12		
古い町並み	無有	10	81	0.23	0.65	0.25
	有	29	20	-0.42		
寺社	無有	11	50	-0.17	0.30	0.13
	有	28	51	0.13		
美術品・文化財	無有	33	98	0.02	0.38	0.09
	有	6	3	-0.36		
洋風建築	無有	31	89	-0.00	0.02	0.01
	有	8	12	0.02		
人物・文学	無有	25	79	0.01	0.04	0.02
	有	14	22	-0.03		
伝統工芸	無有	21	83	0.08	0.30	0.12
	有	18	18	-0.22		
民話・伝説	無有	36	98	-0.01	0.16	0.03
	有	3	3	0.15		
祭り	無有	15	63	0.09	0.21	0.10
	有	24	38	-0.12		
過去の栄華	無有	31	95	0.05	0.48	0.14
	有	8	6	-0.43		
京都との関係	無有	31	101	0.09	1.50	0.30
	有	8	0	-1.41		
「昔の面影」	無有	13	82	0.20	0.62	0.25
	有	26	19	-0.42		
「静かさ・やすらぎ」	無有	20	83	0.05	0.18	0.07
	有	19	18	-0.13		
「素朴さ」	無有	32	89	0.02	0.13	0.04
	有	7	12	-0.11		
「タイムスリップ」	無有	29	93	0.04	0.31	0.10
	有	10	8	-0.27		
「情緒・ロマン」	無有	19	66	-0.00	0.00	0.00
	有	20	35	0.00		
「ふるさと・なつかしさ」	無有	17	68	0.01	0.03	0.01
	有	22	33	-0.02		

郷・懐かしさ」という各表現)の有無を説明変数とし、小京都とそれ以外の町との区別を外的基準として<sup>1)</sup>、19変数38元の数量化理論2類の計算を行った。

その結果、得られた数値の表が9-9表であり(相関比 $\eta=0.739$ )、これを見ると、「京都との関係」が偏相関係数、レンジの値ともに最も大きく、ついで「古い町並み」・「盆地」・「川・水路」・「過去の栄華」といった内容の記載、そして「昔の面影」という表現の使用が、小京都とそうでない町との観光パンフレットにおける記載内容の相違となっていることがわかる。「京都との関係」や「過去の栄華」に関する記載が小京都を特徴づけている記事であることは、小京都の歴史的な定義を考えると、当然の結果と言えるかもしれない。また、盆地であることをわざわざパンフレットに取り上げているところは意外と少なく(つまり盆地にある町でもそれをパンフレットに書くことは少ない)、そのような例では、盆地状の地形を京都との類似で語る方法もいくつも見受けられた。川や水路はどこの町にでも存在するものであるが、パンフレットに観光地として記載されるほど美しい川や水路は、やはりそう多くはなく、確かに小京都の特徴の一つとなっていると言えよう。古い町並みの記載や、「昔の面影」という表現に代表される、現代に残存する歴史性の象徴は、小京都に最も多く共通する特徴であって、今日小京都と呼ばれている町の定義にもかかわる重要な特

徴であると考えられる。

これと反対に、一般に小京都を特徴づけるものは、城下町であることや、織物や焼物といった伝統工芸の存在であると言われているが、数量化の結果では、これらの変数は必ずしも小京都とそうでない町との判別には効果的ではないということになっている。これは、確かに小京都と呼ばれている町の多くが城下町の記事や伝統工芸の記事をパンフレットに記載しているのであるが、いわゆる小京都以外にも城下町や伝統工芸を持つ町は多く、小京都の必要条件ではあっても、決め手となるような十分条件ではないことを示している。このほかの変数もすべて小京都に共通して見られる特徴なのではあるが、それは必ずしも小京都だけに特有の特徴ではないということになる。

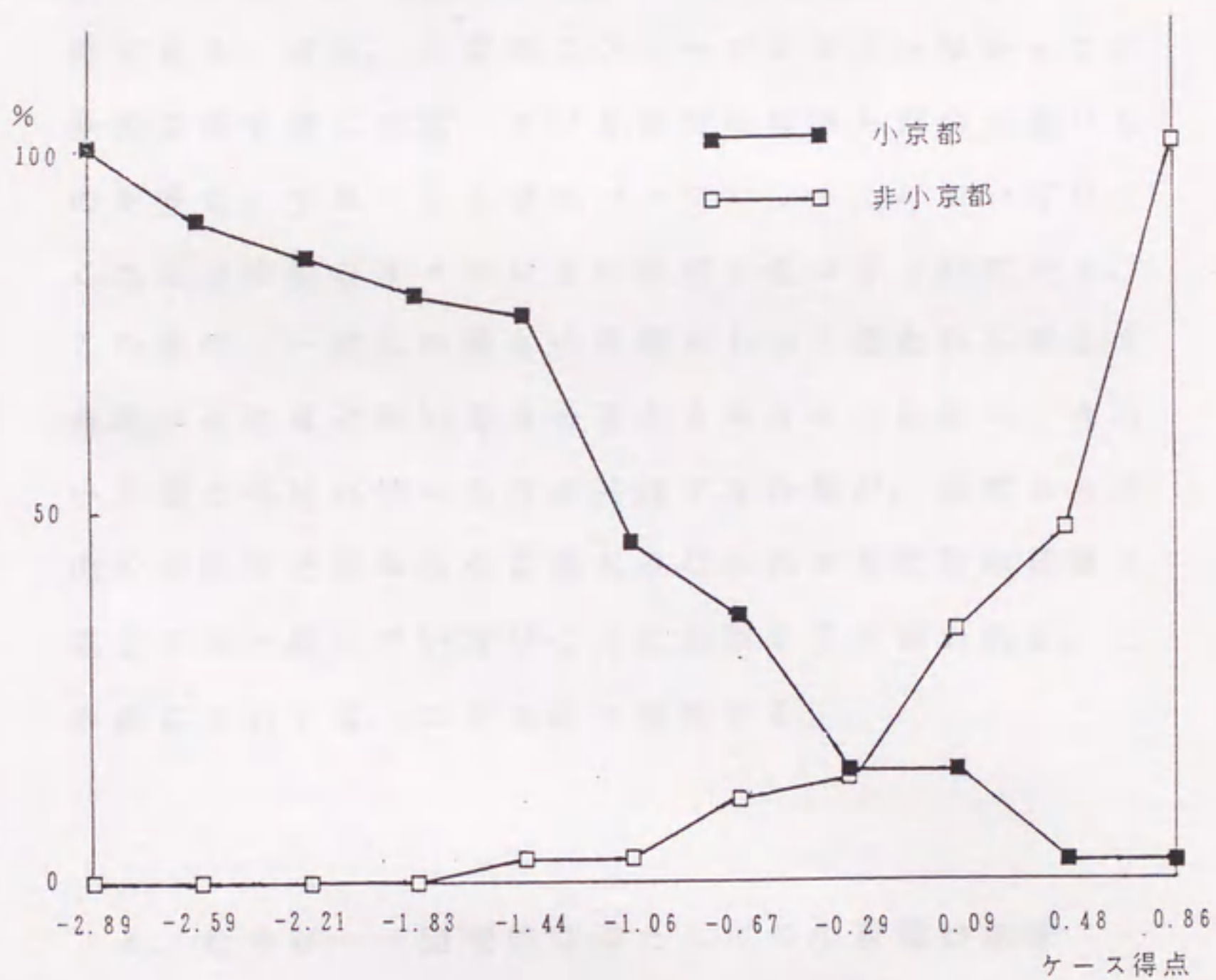
つぎに、小京都の判別に効果があると見られた変数を用いて再び数量化理論2類の計算を行い、少ない変数で相関比が最大になるような変数の組み合わせを求め、そのケース得点をもとに小京都とそれ以外の町との判別を行ってみた。その結果、「盆地」・「川・水路」・「古い町並み」・「京都との関係」・「昔の面影」の5変数10元の分析（相関比 $\eta=0.703$ ）によって、各市町のケース得点（9-10表）が得られ、140の市町村が小京都とそれ以外の町に判別された（9-2図）。この分析の結果によれば、小京都に共通する特徴を最も有しているのは、角館



9-10表 5変数による数量化理論2類の結果

得られた各市町のケース得点

小京都		小京都以外の都市					
松前	0.14	水沢	0.29	白根	0.29	信楽	0.94
弘前	-0.79	村田	-0.63	佐久	0.14	串本	0.94
盛岡	-0.64	三春	-1.43	木曾福島	0.01	綾部	0.94
遠野	0.30	鶴岡	0.14	松本	-1.43	鳥取	0.94
登米	-0.64	喜多方	0.01	長岡	0.29	米子	-0.64
角館	-2.89	栃木	-0.64	糸魚川	0.94	益田	0.01
酒田	-0.79	加茂	-0.35	新潟	0.29	備前	0.94
米沢	-1.44	高田	0.01	高岡	-0.79	倉敷	-0.64
会津若松	0.14	城端	0.01	氷見	0.13	広島	0.29
足利	0.14	飯山	-0.51	福光	0.94	下関	-0.79
金沢	-1.44	松江	-0.64	穴水	0.94	坂出	0.13
大野	0.14	島原	0.29	和倉	0.94	鳴門	0.94
小浜	-1.33	杵築	-0.79	内灘	0.94	須崎	0.94
飯田	-1.44			三国	0.14	福岡	0.94
高遠	0.94	稚内	0.94	三方	0.94	久留米	0.14
高山	-1.45	紋別	0.94	富士宮	0.94	佐世保	0.94
飛騨古川	-0.64	小樽	0.14	金谷	0.94	唐津	0.01
郡上八幡	-1.44	八戸	0.94	浜松	0.14	佐賀	-1.44
伊賀上野	-1.43	五所川原	0.94	名古屋	0.94	熊本	0.14
竜野	-0.64	山田	0.94	犬山	0.29	宇土	0.94
篠山	-2.89	釜石	0.94	岐阜	0.29	中津	0.01
出石	-1.43	花巻	0.94	大垣	0.29	宇佐	0.94
倉吉	-0.64	平泉	0.94	関ヶ原	0.94	別府	0.94
津和野	-1.28	一関	0.94	関	0.94	玖珠	0.94
津山	-1.44	仙台	0.29	中津川	0.01		
高梁	-1.44	石巻	0.29	岩村	0.01		
竹原	-2.25	小坂	0.94	白川	0.94		
三次	-0.35	天童	0.94	下呂	-0.50		
山口	-2.62	山形	0.94	名張	0.14		
萩	-2.08	伊香保	0.94	伊勢	0.94		
大洲	-2.08	水上	0.94	津	0.94		
安芸	-0.79	川崎	0.14	鈴鹿	0.94		
中村	-2.62	甲府	0.30	四日市	0.94		
秋月	-0.79	下部	0.94	熊野	0.94		
日田	-0.64	長野	0.29	紀和	0.94		
竹田	-0.63	諏訪	0.94	鳥羽	0.94		
人吉	-1.28	須坂	0.94	マキノ	0.94		
飫肥	-1.43	大町	0.94	守山	0.94		
知覧	-2.25	穂高	0.29	水口	0.94		



9-2図 数量化理論2類から得たケース得点分布による  
小京都の判別

と篠山であり、山口・中村・竹原・知覧・萩・大洲がこれに次ぐ。また、小京都と呼ばれている町の中で最も小京都らしくないと判断されたところは、高遠であった。

一方、小京都以外の町で小京都に近いと判断されたものには、佐賀・松本があり、少し離れて高岡・下関・倉敷・米子があった。このうち、松本・下関（長府）・倉敷は、いくつかの資料では小京都と呼ばれることのある町である。また、小京都のグループには入らなかったが全国京都会議に加盟している市町の得点も割合に高いものが多く、少なくとも観光パンフレット上においては、これらの市町のイメージは小京都に近づけられている。この逆に、一般には最も小京都らしいと言われる高山や金沢がそれほど高い得点を与えられなかったのは、今日小京都と呼ばれている町に共通する特徴が、必ずしも高山や金沢など昔から小京都とみなされてきた町の特徴と完全には一致していないことに起因すると思われる。この点については、つぎの節で考察する。

#### 4. むすび——隠喩的認識としての小京都の意味

今日小京都と呼ばれている町に共通するイメージは、前章で明らかにした通りであるが、ではなぜ、このようなイメージの町が小京都と呼ばれるようになったのだら

うか。それはおそらく、「小京都」という隠喩で喩えられた、手本としての京都のイメージと何らかの関わりを持っているはずである。そこで、京都のイメージについても、京都市の発行した観光パンフレット等によって確かめてみよう。京都のイメージを象徴するものとしては、「歴史」、「文化」、「伝統」、「日本のこころ」、「心のふるさと」、「優雅」、「情趣」、「豪華」、「繊細」、「閑雅」、「簡素」、「もっとも日本的な街」、「古くて新しい街」、「千年の歴史の栄華」、「悠久のロマン」、「四囲の山なみ」、「美しい自然」といったところを、拾うことができ、これをさきほどの小京都のイメージと比較してみると、ほとんど一致することがわかる。すると、やはり「小京都」という言葉は、京都のミニチュア版という隠喩的認識に基づく表現だったのだろうか。

しかし、いまここに挙げた京都のパンフレットに書かれていたイメージが、京都の場所イメージの全てであったかという点、決してそうではないはずである。むしろ京都のパンフレットに書かれている内容のほうが、小京都に共通するイメージに合わせて作られているという感さえあり、ある意味では、小京都のイメージは京都自身がそうありたいと望まれている、一つの理想の姿であるとも考えられる。

言い替えば、現在では「小京都」という言葉が、

「小京都」のイメージというある一定の場所イメージ（その内容については前章で検討した）と結びついて記号化してしまっている、ということになる。今日これほど小京都という言葉が普及し、単にその町が京都に似ているというだけの素朴な隠喩の段階を越え、観光現象に十分影響を与えるようになってきているのは、「小京都」という表現、即ち言葉自体が、松前や弘前や盛岡といった具体的な場所のイメージを離れて、小京都のイメージでも言うべき固定した場所イメージと記号化しているのではないだろうか。

ここでもう一度振り返って、「小京都」という言葉が意味しているイメージについて考えてみると、それが都市のイメージとしては必ずしもポジティブなものではないことに気付く。「歴史的」なものや「情緒」的なものが多く残っているということは、裏を返せば、昔はいざ知らず近代においてはほとんど都市としての進歩がなかったということであるし、「静か」であることは活気がないことにつながり、「ふるさと」や「豊かな自然」は、むしろ都市より農村にふさわしい。

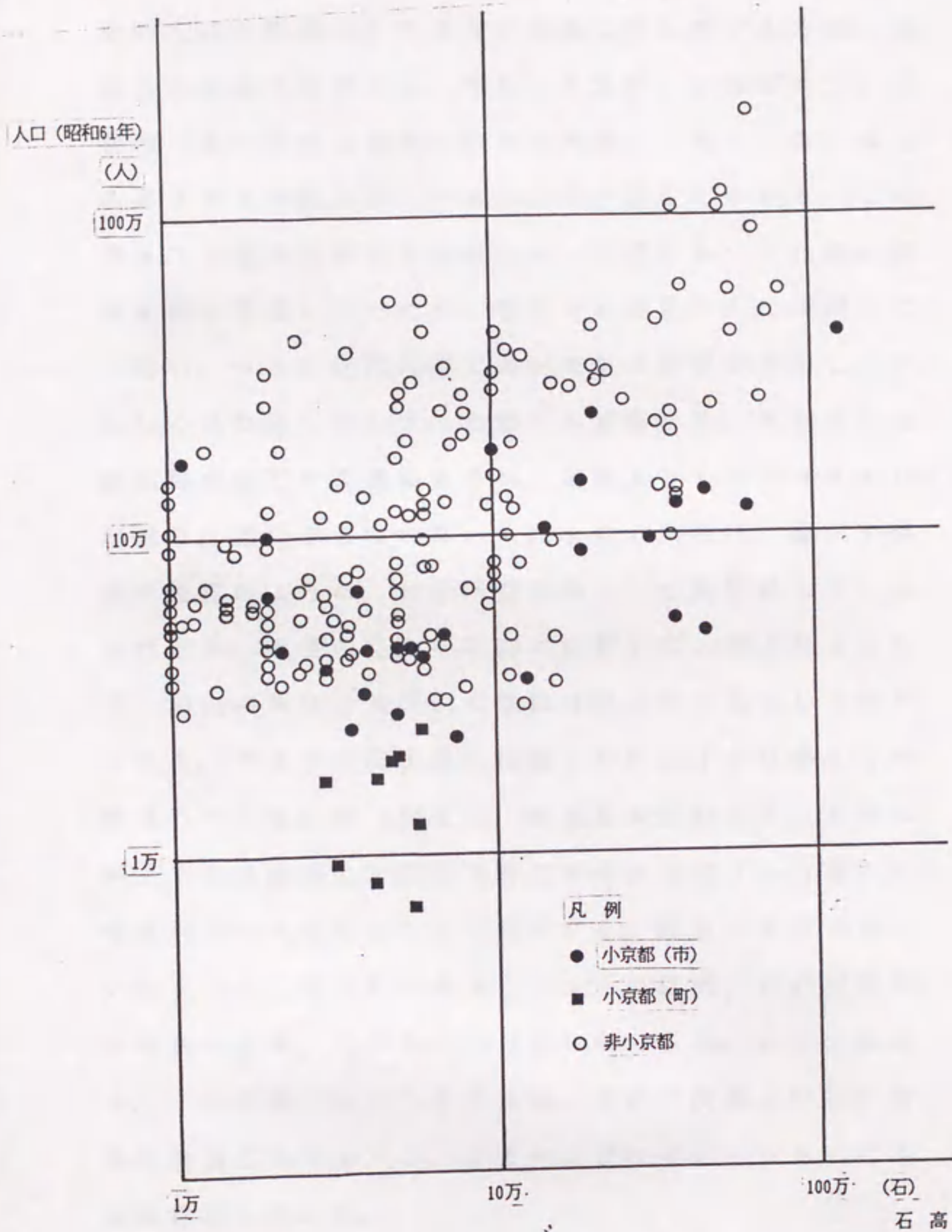
これらを総合すると、過去において政治や文化の中心であった、歴史的な町でありながら、今日ではむしろ産業等の面で他の都市に遅れをとった観のある街——しかしそれゆえにかえって近代化の波に洗われず、過去の景観や文化といったものが現在まで残っている落ち着いた

雰囲気の街、そのような町のイメージが浮かびあがる。  
これは今日の京都のイメージとは必ずしも一致しないが、  
しかし京都の持っているイメージの、ある一面と共通する  
ことは確かであろう。

銀座や富士という言葉が、とくに「小」の字をつけず  
に比喩的表現として用いられるのに対して、京都の場合  
はわざわざ「小京都」といわれるのも、「小京都」とい  
う言葉が意味するイメージが、実際の京都のイメージと  
同じではないので、混同を避けるためにあえて「小」の  
字を加えた形で定着したのではないかとも考えられる。

こう考えると、そのような京都の昔と変わらぬ一面を  
意味内容として持っている「小京都」という言葉を、や  
はりどちらかというと歴史的に変化の少なかった、悪い  
言い方をすれば明治以降の近代化に取り残されたような  
町を喩えるのに使われたことも納得できよう。そして、  
そのようなかつて繁栄しながら、近代化に乗り遅れた町  
は、明治以降急速に衰退してしまった旧城下町の一部に  
典型的に見ることができた。小京都と呼ばれる町に城下  
町が多いことは、よく指摘される点であるが、その理由  
は、城下町が武士の京に対する憧れから作られたもので  
あるというだけではなく、明治以降没落した歴史的都市  
に旧城下町が多かったことも、大いに関係していると思  
われる。

9-3図は、一万石以上の城下町の最大石高を横軸に、現



9-3図 旧城下町の近世における石高と現有人口の関係

(縦横軸とも対数目盛り、  
石高は近世における最大石高、人口は昭和61(1986)年のもの)

在の人口を縦軸にしてグラフに表したものであるが、これらの旧城下町のうち、今日「小京都」と呼ばれている都市（黒い丸および黒い四角で表示してある）は、ほとんどグラフの左上方にあることが一見してわかる。このグラフの左上方にある都市とは、近世においては高い石高を誇り繁栄していたが、現在ではあまり人口が増えていない、つまり近代以降において都市発展が停滞したか、もしくは衰退してしまった都市を意味する。その中には、津和野や出石や高遠のように、近世よりもかえって人口が減り、市にすらなれなかったものもあれば、金沢や盛岡や松江のように、県庁所在都市として発展はしているけれども、近世の巨大な石高に比較すると現人口は少なく、国内における相対的な地位は明らかに低下した都市もある。グラフの左上方に位置しながら「小京都」とは呼ばれていない町（例えば、鹿児島や山形など）もあるが、それは衰退した旧城下町でさえあれば「小京都」と呼ばれるのではないことを意味する。前節でも示されていたように、城下町であることは「小京都」の必要条件ではあっても、十分条件ではないのである。いずれにせよ、「小京都」という言葉には、衰退や没落といった言葉に象徴されるような、ネガティブなイメージもいくらかは存在していた。

ところが、昭和40年代以降の観光ブームや、とくに50年代以降の低成長期に入って世の中の価値観が変わり、



歴史を否定し自然を破壊する都市的なものより、歴史的なものや自然的なものを求める風潮が強くなってくると、これまで都市化・工業化に取り残されていた地方の町にも目が向けられるようになる。こうして、鉄道や旅行会社のキャンペーンやファッション雑誌の特集が、大々的にこれらの町を宣伝することによって、「小京都」という言葉で喩えられる鄙びた町のイメージに、新たに観光資源としての価値が与えられることになったのである。現在小京都を名乗る町の多くが、「伊予の小京都」や「東北の小京都」といった非現代的・非都市的な名称をつけ、静かさや素朴さや懐かしさといったイメージを前面に押し出していることも、結局はこの価値観の変化に伴う観光動向の変化に起因するものであろう。

このような「小京都」（あるいは京都）のイメージは、かつて室町時代の後期（戦国時代）に山口や土佐中村や一乗谷をはじめとする、京の都を模すという本来の意味での小京都が建設され、実際に「西の京」や「土佐の京」と呼ばれていたとき、そのとき喩えられていた京都のイメージが、きらびやかな文化の中心であり、かつまた権力者の政治中心であったことを思い起こすと、現在言うところの「小京都」が喩えているイメージとは全く正反対のイメージであったことに気付く<sup>10)</sup>。

しかし、このとき、「小京都」に喩えられていた具体的な場所イメージとしての、例えば京都自身の地形や碁盤

状の道路、伝統工芸や伝統文化といったものは、昔も今もほとんど変わってはいないわけで、この隠喩を用いるときの京都という場所ないしは言葉の意味の変化は、京都自身のイメージの変化によるものではなく、むしろ京都以外（要するに東京や大阪をはじめとする日本全土）の場所のイメージが変わったことによって、相対的に京都の場所イメージの持つ意味が変わってしまったことに原因を求められよう。つまり、少なくとも「小京都」という比喩的表現のモデルとしての京都のイメージの意味は、周囲との関係によって、政治や文化の中心という「都会」の象徴としてのイメージから、「古き都会」の象徴へ、そしていまや地方の田舎町の手本と仰がれるほどの、東京や大阪などに対する「反都会」の象徴としてのイメージへと、相対的に大きく変わってしまったのだ、と考えることができる。

「小京都」の言葉で喩えられている京都のイメージは、戦国時代ないしは近代より前の時代の京都のイメージなのであり、今日の京都のイメージと比較すると、確かに共通する部分はあるが、それは今日では京都のイメージの一部分を占めているにすぎない。しかしこの一部分こそが、京都をもっとも京都らしく見せている部分（場所イメージ）であり、今日の京都の観光を支えている観光資源となっているのである。そういう意味で、服部（1984）が「小京都」という概念を日本の文化的なものの象徴

としてとらえたことや、村井(1975)が「小京都こそ京都の原像であった」と看破したことは、じつに鋭い指摘であったと言わなければならない。

ところで、現在では「小京都」という言葉が広く普及し、いわゆる小京都のイメージとの間に確固たる記号関係を持ってしまったために、小京都の呼び名は観光を通じて経済的価値を生むようになった。その結果が、最近の自称「小京都」の雨後の筍のような乱立になったわけであるが、小京都の無秩序な増加は、かえって小京都のイメージを変えていく可能性がある。こうした動きの一方で、さきに少し名前を出した全国京都会議は、会議への入会基準を設け、観光効果を狙った無差別な「小京都」の僭称による「小京都」のイメージの低下を防ごうとしているし、明らかによそからは小京都だと見なされている萩や金沢や松江は、小京都の画一的なイメージで見られることを嫌い、みずから小京都ではないと言い切っている<sup>11)</sup>。

## 注

- 1) ただし、京都という地名それ自体が「みやこ」を意味する「京」や「都」といった普通名詞が固有名詞化した、類から種への提喩なので、「小京都」を日本各地にある「みやこ」の意ととれば、提喩的認識に基づくものともとれる。このように、「小京都」という認識・表現は隠喩か提喩かという問題がまずあるが、「小京都」の場合、その使われた文脈によって、提喩である場合と隠喩である場合の両方がある、と筆者は考えている。ただ、次の節で述べるように小京都の発生の歴史からみると、小京都という概念は、京都を模すところから始まっているので、第一義的には隠喩的認識に基づくものであると言うことができよう。
- 2) 場所イメージの記号化については、内田(1987; 1989)を参照のこと。
- 3) 全国京都会議に加盟する市町の数、調査当時35だったが、1990年7月現在、その数は41に増えている。
- 4) 2つの事例とも仲摩照久編(1930):『日本地理風俗体系』新光社より引用。
- 5) 調査した中では「みちのくみやぎの小京都」(村田

町) が県名を用いている唯一の例外であったが、やはり「みちのく(陸奥)」という語が入っている。

- 6) その点、唯一知覧町が「薩摩の小京都」と名乗っていることは、薩摩の名称の知名度の高さを示すものであろうか。
- 7) 分析のためにデータとして用いた市町村はつぎの通り。稚内・紋別・小樽・八戸・五所川原・山田・釜石・花巻・平泉・一関・仙台・石巻・小坂・天童・山形・伊香保・水上・川崎・甲府・下部・長野・諏訪・須坂・大町・穂高・白根・佐久・木曾福島・松本・長岡・糸魚川・新潟・高岡・氷見・福光・穴水・和倉・内灘・三国・三方・富士宮・金谷・浜松・名古屋・犬山・岐阜・大垣・関ヶ原・関・中津川・岩村・白川・下呂・名張・伊勢・津・鈴鹿・四日市・熊野・紀和・鳥羽・マキノ・守山・水口・信楽・串本・綾部・鳥取・米子・益田・備前・倉敷・広島・下関・坂出・鳴門・須崎・福岡・久留米・佐世保・唐津・佐賀・熊本・宇土・中津・宇佐・別府・玖珠。なお、これらは全国の市町村(ただし観光用のパンフレットを発行しているところ)からランダムに選んだ。
- 8) 数量化2類の計算の外的基準となる小京都とそれ以外の町との区分は、第2表において7つ以上の資料に「小京都」として採録されている市町を、ここで

は「小京都」とみなして行った。したがって全国京都会議に加盟している市町の中にも小京都のグループの側に区分されていないものがある。

- 9) 近世の最大石高によって当時の町の勢力を代表させることは、例えば、領地が飛び地の場合、表高と実高の違いなど、いくつかの問題点を含んでいる。しかしながら、大筋においては所領の石高と領内人口及び城下町の人口とはほぼ正比例し（矢守、1970）、近世から明治はじめにかけての整備された人口統計がないことを考えると、石高をもって近世の城下町の勢力を計る目安としても、大過はないと思われる。藤岡（1977）など。
- 10) このような華やかな「小京都」のイメージは、一乗谷が滅び、中村が水害や火事で見ると影もない今日では、山口市にわずかに残っているにすぎない。したがってある意味では、確かに山口は現在でも「小京都」ではなく「西の京」なのである。
- 11) 金沢と松江は一応全国京都会議に参加しているが、今も自ら小京都と名乗ることはしていない。

## 結 語—本研究の要約と今後の課題—

メンタルマップ研究や人文主義的な研究などによって、いわゆるイメージが地理学でも取り上げられるようになって久しい。しかし、イメージそのものを正面から取り上げ、地理的イメージに関する研究に共通な枠組みを与えるような研究は、これまでの地理学ではなかった。たしかに地理学における認知行動研究は、主として分析的方法によって行われてきたが、必ずしも地理的イメージに関わる全体を説明することには成功していないように思われる。そこで統合的な視点に立って、分析と統合、主観と客観という二つの方向性を併せ持つ地理学的なものを見方をベースに、地理的イメージそのものの概念を一般化し、他の地理的概念との関係を理解して、この種の研究のフレームワークを創ることを目指したのが、本研究である。そのために、地理学を取り巻いているさまざまな学問との学際領域にも敢えて踏み込み、主体によってとらえられた世界、すなわち地理的なイメージについて、さまざまな角度から接近を試みるとともに、記号論・比喩的認識などの概念を初めて地理学に応用した。そしてその結果として得られた枠組みをもとに、記号化した地理的イメージが人の意識や地理的現象に及ぼす影

響について明らかにした。

第I部では、地理的イメージ全般に関わる、概念的な枠組みについて考え、とくに地理的イメージ（筆者のいう場所イメージ）の持つ記号的な側面に光を当てることによって、我々の日常生活の中での、地理的イメージの記号としての働きについて概観し、その位置づけを明らかにしようとした。

まず、イメージと場所についての従来の定義を概観したうえで、イメージを心的な表象としての感覚の再生や想像だけではなく、あらゆる感情や知識や価値観なども含む、その主体の行動の原因となっている心的な内容のすべてとする、最も広い意味で理解し、場所イメージの語を「ある主体がある空間に対して思い描く心的な内容のすべて」として定義した。（第1章）

そして、人がある限られた空間に意識を向けるとき、そこに、対象（外界）としての空間と、主体（内界）に生起したその空間に対するイメージとが対応していると見、この両者によって場所の概念が形成されると考えると、このとき場所は、主体にとって実在する空間であると同時に、その空間に対応した場所イメージを内容として持つことがわかる。場所を成り立たせている空間と場所イメージとは不可分の関係にあって、一方だけが単独で存在することはあり得ない。場所の認識には、個人的なレベルと社会的なレベルが考えられ、いわゆる原風景



やメンタルマップなどは、個人的なレベルの場所であると理解することができる。これに対し、一定の社会集団の中に共通の場所イメージも存在し、このとき社会のレベルで、地名と社会集団に共通な場所イメージとの間にはゆるい記号関係があるが、この関係は社会の中で繰り返し使用されることによって規約性を強化し、ついには狭義の記号となることがある。これは社会レベルでの場所の生成を意味し、本研究ではこの現象を「場所イメージの記号化」と呼ぶことにした。（第2章）

場所イメージの記号化の例は、いろいろなどころにあるが、芸術作品の中にその典型的な例を見ることができる。芸術作品の中に示される場所イメージには、作者の創造性にかかわる個人的な場所イメージと、コミュニケーションの媒体としての社会的な場所イメージの、二つの側面の双方が考えられ、作者の個人的な場所イメージが一般化・記号化して社会的な場所イメージになる場合と、すでに記号化した場所イメージが作品中に利用される場合の、一見矛盾した二つの側面がある。例えば、和歌における（狭義の）歌枕の成立などは、場所イメージの記号化の典型的な例であるが、これと同様の場所イメージの記号化の例は、詩や小説といった文芸作品はもちろん、絵画や音楽や映画にいたるあらゆる種類の芸術作品の中にも、数多く存在しており、それぞれ重要な働きをしている。（第3章）

場所イメージの記号化の過程は、また、比喩的な認識方法とも深く関わっている。我々は初めて出会う対象を理解する際に比喩的な認識方法を用いることが多いが、対象としての空間を場所として認識する際にも同様のことが言える。都市のシンボルや土産品・記念写真など、その場所に関わる事物によって場所を理解する例は換喩的認識に基づく場所イメージの記号化であり、ある場所をモノや別の場所によって喩えたり、姉妹都市、三都・八景といった名数化を行ったりするのは、隠喩的認識に基づく場所イメージの記号化である。これらは我々が場所を理解する際に日常的に用いている方略であり、我々の場所に対する理解のしかたを反映している点で重要である。（第4章）

一方、社会的に記号化した場所イメージは、社会的な価値の観念と結び付き、多くの人々に共通した価値イメージを与えた結果、経済的な価値を生み出すことが往々にしてある。高級住宅地のイメージや観光地としてのイメージ、商品ブランドとしての地名などが、その典型的な例として考えられる。（第5章）

また、地名と場所イメージの記号化がいったん成立すると、その関係はなかなか崩れない。そのため、なんらかの事情で場所の実態と記号化された場所イメージとの間に乖離が生じると、場所イメージはもはや真の記号内容として現実の場所を正しく表現しているとはいえない。

そのような例として地名の改変や、場所のラベリングなどが考えられ、これらはさまざまな問題を含んでいる。(第6章)

つづく第Ⅱ部では、第Ⅰ部(第2章～第6章)において明らかにした場所イメージの記号としての働きについて、現実に行っているさまざまな事象の中からその典型例をいくつか取り上げ、実証的に検証することによって、記号としての地理的イメージ(場所イメージ)と地理的事象との関係を明らかにした。

第7章では、第2章で提示した場所イメージの記号化の過程を、軽井沢という実際の場所について具体的に記述し体系的に捉えるため、軽井沢を扱った文学作品や新聞記事などをもとに近代以降のそれぞれの時代の軽井沢のイメージを復原し、軽井沢の開発史と重ね合わせながら、軽井沢のイメージが歴史的にどのように形成され、人々の間に自明のこととして定着していったのかを記述したが、そこでは第3章で示したような文学作品が場所イメージと相互に影響を与え合う現象も認められた。さらに、第6章で述べた場所イメージと地名の関係と変化の過程についても論じ、軽井沢における地名の改変、とくに「軽井沢」の名を冠した地名の分布の拡大という現象について解釈した。その結果、近代以降の軽井沢の歴史は、「軽井沢」という場所と地名が「高級避暑地・別荘地」という固定した意味(場所イメージ)をもつ記号

表現と化していった過程と密接な関係があり、それが第5章で論じた場所イメージの経済的価値に基づいていることが明らかとなった。

第8章では、わが国の代表的な70の都市について、そのステレオタイプ化（記号化）したイメージを具体的に明らかにすると同時に、これら都市のイメージを都市の総合的評価に応用し、その一例として都市の「風格」という概念を取り上げ、実際にわが国の都市を評価し、都市のイメージとの関連から考察した。その結果、都市のイメージの多くは第4章で示したような換喩的認識に基づく少数のシンボルによって捉えられており、それをもとに行われる都市の「風格」の評価は、都市の歴史的側面や情趣や風情といった感覚で示される都市の審美的評価と、都市の機能的・規模的側面に関係する都市の総合的能力の評価系列という2つの評価系列によって、その都市のイメージを評価した結果の総合として表されるものと考えられた。

第9章では、第4章で提示した比喩的認識に基づいて記号化した場所イメージの例として、「小京都」という表現を取り上げ、各市町村が出している観光パンフレットに表現された場所イメージをもとに、小京都に共通するイメージ（それぞれの町と京都との間のイメージの類似性の問題）を明らかにし、「小京都」という表現がある特定の意味を持って一般化したことの意味と、そのよ

うな概念が一般化した理由やその社会への影響等について、比喩的認識という観点から実証的に考察した。その結果、今日の小京都とは、過去において政治や文化の中心であった、歴史的な町でありながら、今日ではむしろ産業等の面で取り残された観のある街　しかしそれゆえにかえって近代化の波に洗われず、過去の景観や文化といったものが現在まで残っている落ち着いた雰囲気のある街、そのような町のイメージで用いられており、「小京都」の言葉で喩えられるこのようなイメージは、現実の京都のイメージではなく、東京や大阪などに対する「反都会」の象徴としてのイメージや、京都をもっとも京都らしく見せている部分（場所イメージ）であると理解された。また、このような「小京都」という表現の一般化は昭和40年代以降の社会の価値観の転換に基づくもので、第5章で論じたように場所イメージが経済的価値を生むことと無関係ではない。

以上示したように、本研究では第I部において地理的イメージに関わる概念や事象についてさまざまな角度から整理、検討し、第II部においていくつかの場所と場所イメージを具体的に取り上げ、解釈や分析を行うことによって第I部で提示した内容を実証しようとした。もちろん、本研究において十分に明らかにし得なかった点や問題点も数多い。

例えば、文学作品や比喩的認識そして経済的価値など

に関する考察については、心理学や哲学・文学・言語学・社会学・経済学等関連関係分野の研究成果について、一層の見配りが必要であると思われる。これらすべての学問分野と地理学とが輻輳する領域としての地理的イメージの研究を、より体系的かつ精密なものにするためには、今後さらに多方面からの情報を收拾し、熟考しなければならないであろう。

同様に、第Ⅱ部の実証的な事例研究においては、場所イメージを分析可能なデータとして捉える方法として、文学作品などの活字メディア（第7章）・アンケート調査（第8章）・観光パンフレットの内容（第9章）というように、それぞれ異なる題材を用いてみたが、いずれもデータの有効性やその統計的処理の方法の点で問題が残っており、これらをより客観的に分析する方法についても改善の余地がある。

また、「場所のラベリング」や「姉妹都市」や「名数化」など、本研究ではその問題の存在を挙げるだけにとどまったテーマも多い。しかし、場所イメージと地理的事象（例えば地価の変化）との因果関係を示すためにも「場所のラベリング」の実証的研究が必要であるし、我々が世界を隠喩的なものの方で捉えていることを実証するためには、「姉妹都市」や「名数化」の分析をさらに詳しく行わなければならない。

いずれにせよ、今後さらに多くの場所や事象について

実証的研究を積み重ねながら、最も妥当な分析手法を発見し、この種の研究に独自の方法論を構築していく必要がある。おそらくこれら個々の問題を明らかにしていくことによってのみ、場所イメージの記号化と社会における様々な地理的事象との関係を一般化していくことが可能なのであろうし、その結果として、本研究の最終的な目的である、場所イメージが環境と人間との間に占める位置についての総括的な結論を得られるものと思われる。

## 文 南大

※ 本文で引用したもののほかは、本研究を行うにあたり、理論的枠組みの構築など、全般にわたってとくに参考としたもののみ記載した。

青山宏夫(1985)：文学からみた場所のイメージ—宮澤賢治『グスコブドリの伝記』を例に—。理論地理学ノート4。37-44。

東 洋編(1970)：『講座心理学8 思考と言語』東京大学出版会。

東 洋編(1974)：『心理学研究法15 データ解析Ⅱ』東京大学出版会。

東 洋編(1975)：『心理学研究法14 データ解析Ⅰ』東京大学出版会。

池田 央(1980)：『調査と測定』新曜社。

磯村英一(1975)：『都市と人間』大明堂。

磯村英一(1976)：都市のシンボル—その理論と現実—。新都市。30-4。14-17。

市川健夫(1976)：軽井沢—ここが変わった。歴史と人物。9月号。146-156。

伊東俊太郎(1981)：象徴と記号。日本記号学会編『記号学研究1』北斗出版。11-22。

稲垣虎次郎(1924)：『大軽井沢の誇り草津温泉の誉れ』稲垣虎次郎。

梅本堯夫編(1969)：『講座心理学8 思考と言語』東京大学出版会。

梅本堯夫(1983)：連想の心理。別冊数理科学「記憶」。14-16。

エコノミスト'81(1985)：京都らしさを求めて—「小京都」と「京都」—。ECONOMIS T'81, Vol. 3, 1-29。

エーゴ、池上嘉彦訳(1980)：『記号論Ⅰ、Ⅱ』岩波書店。

NHK取材班(1984)：『どう映っているか日本の姿』日本放送出版協会。

大阪市立大学経済研究所編(1987)：「世界の大都市④ ニューヨーク」東京大学出版



会.

- 大村 平(1980):『統計解析のはなし』日科技研出版社.
- 大脇義一(1970):『直観像の心理・増補版』培風館.
- 岡 道也(1985):都市の風格. 都市問題研究37-5, 43-59.
- 岡田喜秋(1976):『空と大地の黙示』名著刊行会.
- 岡野静二(1977):『イメージとは何か』相川書房.
- 小川和佑(1980):『文壇資料 軽井沢』講談社.
- 奥野健男(1972):『文学の中の原風景』集英社.
- 奥村恒哉(1977):『歌枕』、平凡社.
- 鏡味明克(1984):『地名学入門』大修館書店.
- 鏡味明克(1985):『地名が語る日本語』南雲堂.
- 苛原 章(1982):外国地名表現の問題点. 地理27-7臨時増刊『地名の世界』182-183.
- 軽井沢文学散歩編集委員会編(1968):『軽井沢文学散歩』軽井沢町.
- 川野 洋(1982):『芸術・記号・情報』勁草書房.
- 川本茂雄ほか編(1982):『記号としての芸術』勁草書房.
- カンター, 宮田紀元・内田 茂訳(1982):『場所の心理学』彰国社.
- 菊地利夫(1978):歴史地理学における最近の動向. 歴史地理学紀要20, 21-48.
- 北軽井沢大学村組合編(1980):『大学村五十年誌』北軽井沢大学村組合事務所.
- 北村晴朗(1982):『心像表象の心理』誠信書房.
- ギロー, 佐藤信夫訳(1972):『記号学—意味作用とコミュニケーション—』白水社.
- 楠本憲吉(1981):小京都の魅力と人情(談). 『日本発見26 小京都』晩教育図書,  
37-41.
- 久保田好郎・村山和夫(1970):高田・直江津両市の合併とその問題点—広域都市形  
成の一例として—. 新地理18-1, 2, 3.

- クラーク, 佐々木英也訳(1967):『風景画論』岩崎美術社.
- 栗田 勇(1965):『都市とデザイン』鹿島出版会.
- グールド・ホワイト, 山本正三・奥野隆史訳(1981):『頭の中の地図』朝倉書店.
- 国立国語研究所(1977):『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所報告57, 秀英出版.
- 小林 収(1974):『軽井沢開発ものがたり』信濃路.
- 小林保彦(1982):『広告、もうひとつの科学』実教出版.
- 近藤耕人(1965):『映像と言語』紀伊国屋新書A-22.
- 佐藤孝一(1912):『かるるざわ』教文館.
- 佐藤信夫(1978):『レトリック感覚』講談社.
- 佐藤信夫(1981):『レトリック認識』講談社.
- 佐藤信夫(1986a):『意味の弾性』岩波書店.
- 佐藤信夫(1986b):『レトリック・記号 etc.』創知社.
- 佐佐木忠慧(1979):『歌枕の世界』桜楓社.
- 沢田允茂(1975):『認識の風景』岩波書店.
- 沢田允茂(1983):認識とイメージ. 別冊数理科学「パターン認識」, 6-11.
- C+Fコミュニケーションズ(1986):『パラダイム・ブック』日本実業出版社.
- 島崎 清(1985):『軽井沢百年の歩み 改訂版』島崎清.
- 篠田浩一郎(1982):『都市の記号論』青土社.
- 清水馨八郎・服部銈二郎(1970):『都市の魅力』鹿島出版会.
- 梶村大彬(1978):『地理名称の表現序説』古今書院.
- スロービン, 宮原・中島・宮原訳(1975):『心理言語学入門』新曜社.
- 瀬戸賢一(1986):『レトリックの宇宙』海鳴社.
- 瀬戸賢一(1988):『レトリックの知』新曜社.
- ダウンス・ステア編, 曾田忠宏ほか訳(1976):『環境の空間的イメージ』鹿島出版会.

- 高辻正基(1985):『記号とはなにか』講談社ブルーバックスB-591.
- 高橋義孝(1978):「原光景」と「原風景」, 思想653, 27-35.
- 滝浦静雄(1972):『想像の現象学』紀伊国屋新書A-66.
- 滝田文彦編(1980):『言語・人間・文化』日本放送出版協会.
- 竹内啓一・野澤秀樹(1985):世界思想史における伝播・継承および革新—日本を主に  
して—1984年度秋季学術大会シンポジウム一, 地理学評論58-2, 103-112.
- 谷川健一編(1979):『現代「地名」考』日本放送出版協会.
- 谷川健一編(1981):『シンポジウム 地名と風土』小学館.
- 谷川健一編(1983):『地名と日本人』講談社.
- 田村 明(1984):『都市の個性とは何か』岩波書店.
- 田村百代(1986):シャミッソーと小説『ペーター・シュレミールの不思議な物語』,  
地域研究27-1, 15-24.
- 千葉徳爾(1983):『新・地名の研究』古今書院.
- 寺本 潔(1985):子どもの知覚環境の発達に関する基礎的研究—熊本県阿蘇谷の場合  
一, 地理学評論57-2, 89- 109.
- 寺本 潔・吉松久美子(1988):手描き地図にみる子供の相貌的な環境知覚—日本とタ  
イの山村の小学生の比較調査を事例として—, 愛知教育大学地理学報告Vol.67,  
21-34.
- ドゥニ, 寺内 礼監訳(1989):『イメージの心理学』勁草書房.
- 徳岡秀雄(1981):予言の自己成就過程, 野崎治男編『価値意識の社会学的研究』関西  
大学経済・政治研究所研究双書第45冊, 36-80.
- 都市科学研究所(1978):『地方都市の<風格>に関する研究』都市科学研究所.
- 外山滋比古(1971):『ホモ・メンティエンス』みすず書房.
- ナイサー, 古崎 敬・村瀬 旻訳(1978):『認知の構図—人間は現実をどのように

- とらえるか——』サイエンス社.
- 中村 豊(1978): 名古屋市の地理的空間とメンタルマップ. 地理学評論51, 1-19.
- 中村 豊(1979): わが国のメンタルマップの空間的パターンと居住地選好体系. 人文地理31-4, 19-31.
- 西川幸治(1973): 『都市の思想 保存修景への指標』日本放送出版協会.
- 日本文学風土学会編(1984): 『風土と文学』教育出版センター.
- 丹羽基二(1975): 『地名』秋田書店.
- 野田宇太郎(1961): 『日本の文学都市』黎明社.
- 長谷川浩一・星野 命(1982): 幼少期の原風景としての風土——(第2報) 原風景の心理的測定法の検討——. 『九学会連合年報人類科学』35, 105-134.
- 服部銈二郎(1978): 都市のシンボル——シンボル地域論. 日本都市学会編: 『都市と文化』地人書房, 17-30.
- 服部銈二郎・小野純一郎(1981): 上田市と更埴市の魅力的都市像. 都市問題72-12, 52-65.
- 服部銈二郎(1984): 『都市の表情——らしさの表現像——』古今書院.
- 幅 北光(1973): 『軽井沢ものがたり』信濃路.
- 林 礼二(1971): 聖地 軽井沢. 地理16-11, 78-84.
- 原田ひとみ(1984): "アンアン" "ノンノ" の旅情報——マス・メディアによるイメージ操作——. 地理29-1 2, 50-57.
- 針生一郎(1976): イメージと意味. 『岩波講座文学2 創造と創造力』岩波書店, 187-209.
- バルト, 渡辺 淳・沢村昂一訳(1971): 『零度のエクリチュール』みすず書房.
- 藤岡謙二郎(1977): 『現代都市の歴史地理学的分析』古今書院.
- 藤岡喜愛(1974): 『イメージと人間——精神人類学の視野——』日本放送出版協会.

- 藤岡喜愛(1983):『イメージ その全体像を考える』日本放送出版協会.
- 藤本哲也(1980):『犯罪学入門』立花書房.
- ブラック・サール他, 佐々木健一訳(1986):『創造のレトリック』勁草書房.
- ベルニ, 原 亨吉訳(1957):『想像力』文庫クセジュ, 白水社.
- 宝月 誠(1978):相互作用におけるレイベリングの影響. 社会学評論29-2, 28-40.
- ボウルディング, 大川信明訳(1977):『ザ・イメージー生活の知恵・社会の知恵』誠信書房.
- 星野 命・長谷川浩一・(1981):幼少期の原風景としての風土——序報:その心理的意味とパターン. 『九学会連合年報人類科学』34, 45-75.
- 星野 命・長谷川浩一(1985):青年の「心の風土」としての原風景. 九学会連合日本の風土調査委員会編『日本の風土』弘文堂, 119-154.
- 前田 愛(1982):『都市空間の中の文学』筑摩書房.
- 松岡俊吉(1981):『イメージ学ノート』弓立社.
- 松岡俊吉(1982):『イメージ・シンキング』弓立社.
- 松山 巖(1984):『乱歩と東京』PARCO出版.
- 三浦つとむ(1977):『言語学と記号学』勁草書房.
- 水島恵一・上杉 喬備(1983):『イメージの心理学』誠信書房.
- 水島恵一・藤岡喜愛・土沼雅子(1989):『イメージの人間学』誠信書房.
- 溝尾良隆(1983):景観評価に関する研究の動向. 地域研究24-1, 22-37.
- 溝尾良隆・大隅 昇(1983):景観評価に関する地理学的研究——わが国の湖沼を事例として——. 人文地理35-1, 40-56.
- 村井康彦(1975):『小京都へ』平凡社カラー新書06, 平凡社.
- 村井康彦(1981):小京都—その成り立ちと特質. 『日本発見26 小京都』暁教育図書, 116-118.

- 森 睦彦(1980):『名数数詞辞典』東京堂出版.
- 八木意知男(1985):『歌枕の探求I』和泉書院.
- 八木康幸(1986):近江湖南村落における宮座と象徴空間,人文地理38-2,123-146.
- 安田三郎(1969):『社会統計学』丸善.
- 柳田國男(1962):『地名の研究』定本柳田國男集第20巻、筑摩書房.
- 山口恵一郎(1974):『地図と地名』古今書院.
- 山口昌男監修(1981):『説き語り記号論』日本ブリタニカ.
- 山梨正明(1988):『比喩と理解』東京大学出版会.
- 山野正彦(1979):空間構造の人文主義的解説法——今日の人文地理学の視角——.人文地理31-1,46-68.
- 矢守一彦(1970):『幕藩社会の地域構造』大明堂.
- 米山俊直(1989):『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店.
- リチャードソン, 鬼沢 貞・滝浦静雄訳(1973):『心像』紀伊国屋書店.
- リンチ, 丹下健三・富田玲子訳(1968):『都市のイメージ』岩波書店.
- ルーメルハート, 御領 謙訳(1979):『人間の情報処理』サイエンス社.
- レイコフ・ジョンソン, 渡部・楠瀬・下谷訳(1986):『レトリックと人生』大修館書店.
- 歴史地理学会編(1985):『空間認識の歴史地理』歴史地理学紀要27.
- Aiken, C. S. (1977): Faulkner's Yoknapatawpha County: Geographical Fact into Fiction. Geogr. Review, 67-1, 1-21.
- Aiken, C. S. (1981): A Geographical Approach to William Faulkner's "The Bear". Geogr. Review, 71-4, 446-459.
- Alexander, D. (1986): Dante and the Form of the Land. A. A. A. G., 76-1, 38-49.
- Andrews, H. F. (1981): Nineteenth-century St Petersburg: Workpoints for an

- Exploration of Image and Place. Pocock, D. C. D. ed. "Humanistic Geography and Literature"., Croom Helm, London, 173-189.
- Cosgrove, D. E. (1979): John Ruskin and the geographical imagination. Geographical review, 69, 43-62.
- Darby(1948): The Regional Geography of Thomas Hardy's Wessex. Geogr. Review, 38, 426-443.
- Downs, R. M. (1981): Maps and metaphors. The Professional Geogr., 33-3, 287-297.
- Goodey, B. R. (1970): Mapping "Utopia"--A Comment on the Geography of Sir Thomas More. Geogr. Review, 60-1, 15-30.
- Graham, E. (1982): Maps, metaphors and muddles. The Professional Geogr., 34-3, 251-260.
- Jay, L. J. (1975): The Black Country of Francis Brett Young. Trans. Inst. Br. Geogr., 66, 57-72.
- Kuipers, B. (1982): The "Maps in the head" metaphor. Environment and Behavior, 14-2, 202-220.
- Livingstone, D. N., Harriton, R. T. (1981): Meaning through metaphor: analogy as epistemology. Annals Assoc. Amer. Geogr., 71-1, 95-107.
- Lloyd, W. J. (1981): A Social-literary Geography of Late-nineteenth-century Boston. Pocock, D. C. D. ed.: Humanistic Geography and Literature., Croom Helm, London, 159-172.
- Lowenthal, D. (1978): Finding Valued Landscapes. Progress in Human Geogr., 2-3, 373-418.
- Paterson, J. H. (1965): The Noverist and his Region: Scotland through the Eyes of Sir Walter Scott. Scott. Geogr. Mag., 81, 146-152.

- McManis, D. R. (1978): Places for Mysteries. *Geogr. Review*, 68-3, 319-334.
- Miller, G. A. (1956): The magical number seven, plus or minus two: Some limits on capacity to processing information. *Psychological Review*, 63, 81-97.
- Mills, W. J. (1982): Metaphorical Vision: Changes in Western Attitudes to the Environment. *Annals Assoc. Amer. Geogr.*, 72-2, 237-253.
- Pocock, D. (1979): The Novelist's Image of the North. *Trans. Inst. Br. Geogr. N. S.*, 4-1, 62-76.
- Pocock, D. (1980): Place and the novelist. *Trans. Inst. Br. Geogr. N. S.* 6, 337-347.
- Pocock, D. (1981): Sight and knowledge. *Trans. Inst. Br. Geogr. N. S.* 6, 385-393.
- Pocock, D. (1982): Valued Landscape in Memory: the View from Prebends' Bridge. *Trans. Inst. Br. Geogr. N. S.*, 7, 354-364.
- Prince, H. C. (1981): George Crabbe's Suffolk Scenes. Pocock, D. C. D. ed.: *Humanistic Geography and Literature.*, Croom Helm, London, 190-208.
- Prince, H. (1984): Landscape through Painting, *Geography*, 69-1, 3-18.
- Porteous, J. D. (1985): Smellscape. *Progress in Human Geography*, 9-3, 356-378.
- Rees, R. (1976): John Constable and the Art of Geography, *Geogr. Review*, 66-1, 59-72.
- Rees, R. (1982): Constable, Turner, and views of nature in the Nineteenth Century. *Geographical Review*, 72, 253-270.
- Tuan, Y. (1975): Place: An Experiential Perspective. *Geographical Review*, 65-2, 151-165.
- Tuan, Y. (1976): Humanistic Geography. *Annals Assoc. Amer. Geogr.*, 66-2, 266-276.
- Tuan, Y. (1978): Literature and Geography: Implication for Geographical Research. Ley, D., Samuels, M. S. ed. "Humanistic Geography Prospects and



Problems". Maaroufa Press, Chicago.

Tuan, Y. (1978): Sign and Metaphor. *Annals Assoc. Amer. Geogr.*, 68-3, 363-372.

Wood, L. J. (1970): Perception studies in geography. *Institute of British Geographers transactions*, No. 50, 129-142.

Wright, J. K. (1947): *Terrae Incognitae: The place of the imagination in geography*. *Annals Assoc. Amer. Geogr.*, 37-3, 1-15.

Zaring, J. (1977): The Romantic Face of Wales. *A. A. A. G.*, 67-3, 397-418.

## あとがき

本研究は、まず地理的イメージを構成する概念的・理論的な枠組みを紹介し（第1章、第2章）、つぎに地理的イメージにかかわるさまざまな事象について概観し（第3章～第6章）、最後にそのうちのいくつかについて、実証的な方法を用いて具体的に分析を行った（第7章～第9章）。

冒頭にも述べたように、近年、イメージに代表されるような「はっきりした形はないが、確かに存在していると思われるもの」が、（学問的にせよ通俗的にせよ）徐々にに関心を集めはじめしており、語られることもずいぶん多くなっている。しかし、それを正面から取り上げようとする研究はまだ少なく、地理学においても、まず大局的な視点から地理的なイメージを捕捉し、整理する必要があった。

その意味で本研究は、地理的イメージというあまりに広大な対象のために、地理学のみならず、これに隣接する多くの研究領域にまで足を踏み入れることになり、筆者の基本的な能力の至らぬ点は多々あったと思われるが、地理的現象の中に潜む構造のひとつを、従来はなかった新しい視点からとらえ直し、部分的にはあるが、地理

学における場所イメージおよびその記号化の持つ重要性について示し得たのではないかと思う。

しかしながら、第Ⅱ部で地理的イメージ、とくに場所イメージの記号化が関わっていると見られる事象を実際に取り上げ、具体的に分析してみたものの、この種のイメージ研究の実証に関する明確な方法論がいまだ確立されていないために、必ずしも説得力のある結論を導き出せなかったといううらみもある。今後はこうした具体的な地理的事象を扱った実証的な研究（その題材については本論第Ⅰ部の各所に提出しておいた）を積み重ねることによって、地理的イメージの全体像についてさらに考察を深めながら、場所イメージの研究にふさわしい方法論をも構築していく必要がある。

本研究の内容が、果たしてどれほど今後の地理学に寄与するものかわからないが、わが国ではまだ数少ないこの種の研究の一つの端緒となれば幸いである。

最後に、本研究を行うにあたり、先年名古屋大学を退官された井関弘太郎先生、同大学地理学研究室の石水照雄教授、石原潤教授、海津正倫助教授には、あらゆる点にわたって懇切な御指導を賜った。ここに記して心から感謝の意を表す。

1991年6月



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

